

Z32-B8

金の星

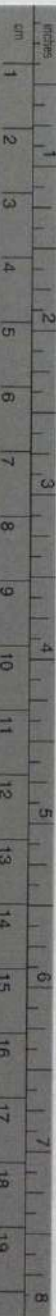
四月号



第四號



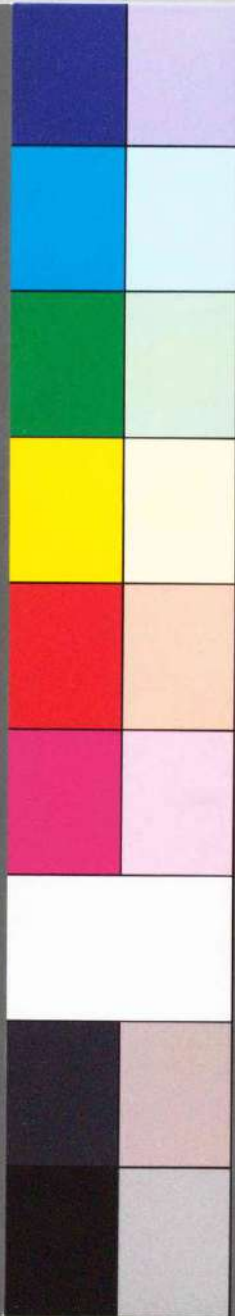
大正十一年三月三十日第三號郵便物認可 (毎月一回) (大正十一年四月一日起) 大正十四年四月一日起



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 T.M. Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 T.M. Kodak



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



行發々愈

支那文學中第一の作として、その名を世界に知られてゐる『西遊記』が名著大系の第十
四編として現れました。孫悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物が、唐の三藏法師のお供を
して遙々天竺までお經を取りに行くといふ物語りで、その途中様々の怪物に出遇つて、
八十一度の奇々怪々な困難に遭遇する有様を書いたのが本書であります。中でも、最も
人氣者の役をつとめる悟空が、耳の中から金箍棒を取出して、幾度となく魔物と戦ふ光
景は、愛讀者諸君をヤンヤと云はせるでせう。

こんな面白い物語りが、金の星社の名著大系獨特のすばらしく美しい装幀で、しかも
僅かに九十錢といふ比類なき定価で發賣になりました。是非御一讀下さい。

東京市外田端三五
金の星社
振替東京五九六番

西遊記

四六判箱入美本
本文一八〇頁
挿畫三色版外數頁
定價金九十錢
送料十二錢

世界少年少女名著大系(1) 金の星社編 松政徳次郎畫伯裝幀

氣力と
精力と

復興はカルピスの一パイから

美味……爽快……氣力
滋養……強壯……精力
氣力……精力……復興

滋強飲料

カルピス



(表現形式の圖案)

酒店・食料品店・藥店にあり

錢二十金料送 錢十九金冊各價定·本美願入箱判六四

第一編
ロビンソン漂流記

ナポレオン物語

ナポレオンの一代記です。地中海の小城コルシカに生れた一少将ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられ、歐洲を征服す。榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セント・ヘルナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語です。

第三編
ドン・キホーテ

イスパヤの有名なお話。毎日騎士の物語りを讀んである内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、疥癬に染つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂におはれた死をとげるといふ痛むな物語りです。

第四編
コロンブス物語

アメリカ大陸を発見した偉人コロンブスの物語です。コロンブスがあらゆる困難と戦つて、遂にアメリカ大陸を発見するまでの變化絢りない運命を記した血と涙の物語です。この偉人の傳記を書いた本は餘りないので、非常にめづらしい本です。

錢二十金料送·錢十九金冊各價定·本美頗入箱判六四

大人國小人國めぐり
第五編
ガリバ
ア
ー
旅行記

外の沿道をやり、再び航海に出て大入国に到達し、そこでさんく、口にあひ、漸く霧にさらはれて、本國に歸て来るまで實に面白、物語りです。

第六編

ロビンフッド物語

英國に傳へられた石名は「物品」です。そして、
あつたロビン・フッドが悪い男のために國を去れて
地に賊となつて、シャーウッドの森にかくれ、王
を救ふ戰を起したり、悪い所正をやつたり、そし
て最後、遂にまされまゝの變化、多い物語りです。

アラビヤナイト

アラビヤン・ナイト程面白い物語りば、世界のついでに
學が通じないといはれてゐます。千年餘の間も語り
傳へられた物語りであらふ事を考へても、如何にこの
物語りが讀者に興味を興へてゐるかといふか、何
アラビヤン・ナイトの中でも、特に面白いのばかり
が集つてゐます。

第 八 編
ギリシャ神話
オデッセー物語

ギリツオの諸將ホーミーの作であつて、世界で一番古い。そして又一番面白い物語りです。トロイの戦争に遙々海を渡えて出征した勇士オアッセとが神の怒にふれ、途中ありとあらゆる困難に出遭ひ、遂に乞食となつて本國に歸る迄の物語りです。

第九編
シエークスピア物語

有名シエークスピヤの差の中で、面白いものに
かりん選んで、物語り風に書いたものです。『テンペ
スト』『御意のま』『エニスの商人』がみくろを馴し
『真夏の夜の夢』『冬の夜ばなし』等、是非一度は讀ん
で置くべき物語りです。

金星社 星の金 編

錢二十金料送錢十九金冊各價定・本美類入箱判六四

編四十第 編三十第 編二十第 編一十第 編十第

西遊記

新約物語

神話古事記物語

入繪 イソップ物語

グリム童話

グリムの童話は改めて述べるまでもなく、ドイツの名な傳説研究家グリム兄弟の作つたもので、各篇ともドイツの各地に傳へられた國民童話である。しかし、グリムの童話は、今ではドイツ一國のものでなく、少年少女の珍寶として珍はれてゐる程有名なものになつてゐる。本書の中に集められた作はグリムの數多くの作の内、最も有名な面白く、ばかりである。童話の愛好者及研究家の御一讀を待つ。

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまでに、随分澤山の書が出てゐる。しかし本書の如く、一つのお話に一枚づきの立派な畫を入れて、お話を讀み、兩方面白く讀まざる本は他にない。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていただきたい。

「古事記物語」ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもあるまい。實際驚く程立派な、面白い物語りである。日本の國がはじめて出来た話から始つて神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからすつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話である。

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス、キリストの一生を聖書に從つて最も正確に書いた本である。この尊い人の一生を子供のために書いたものは他にない。本書はわが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したい。

世界少年少女名著大系 (13) 金の星社編・装幀・寺内萬治郎畫伯

こども新約物語

四六判箱入美本
本文二一〇頁
挿畫三色版外數頁
定價金九十錢
送料十二錢

版再忽

二千年の昔から今日に至るまで、常に世界の救世主として渴仰されてゐるイエス、キリストの一生は、何人も一度は知つて置かねばならぬものです。本書は聖書の四福音書、マタイ傳、マコ傳、ルカ傳、ヨハネ傳に傳へられてゐるキリストの一生を、少年少女にわかり易く、面白く書いたもので、易く他に得られぬ良書であります。ナザレの一大工の子として生れたイエスの生ひ立ちから始つて、様々の迫害に遇ひ乍らユダヤの國々を傳道して歩く有様や、最後に十字架に懸けられて死を遂げるまでの血と涙の歴史は、本書一冊によつて、直ちに知ることが出来ます。物語りとして盡きの興味があるばかりでなく、又讀んで一大教訓を得るためにも、愛讀書の一つとして選ねばならぬ絶好の良書です。譯述者は、長年牧師として傳道に従事してをつた金の星社の山野虎市先生で、同先生の心血をそゝいだ名著であります。

一五三端田外市京東
社星の金
番六九五九五京東替振



春の訪	れ(表紙・原色版)	寺内萬治郎
チューリップ畑	(口繪・三色版)	岡本 歸一
萬人敵の名劍	(口繪・一色版)	寺内萬治郎
あの山蔭	(作曲)	(二) 本居 長世
お晝の汽車	(六)	若山 牧水
愚助大和尚	(八)	沖野岩三郎
金雀花咲く牧場	(言)	大木 雄三
森の頭になる話	(言)	宇野 浩二
デヨンとひろ子さん	(毛)	大場 繪津
と	(器)	野口雨情選
小鳥は空に	(器)	加藤 武雄
居眠り地藏さん	(器)	竹久 夢二
白痴の昇天	(笑)	片平喜一郎
ジャンヌダークの最後	(笑)	津谷 孝吉
裸體の軍醫	(七)	久米 岐一

[illegible]



チューリップ畑

(金の星書)

岡本歸一畫

萬に敵人の名劍



第二〇頁の「まんにんてき」を御覽下さい

寺内萬治郎畫

▶ 威 權 高 最 の 物 讀 童 兒 ◀

仲原善忠著

日本外交史

(最新刊)

四六判二五〇頁
定價一圓八十錢
送料(書留)八錢

日本歴史中、外交史は最も興味深き児童讀物です。歴史科の課外讀物として御薦めす。

奥野庄太郎著

世界英雄物語

(最新刊)

四六判二四〇頁
定價一圓六十錢
送料(書留)八錢

本書は奥野先生の洋行土産でございませう。少年讀物として最も興味多い有意義な物語です。

早 泉 著

世界偉人物語

(最新刊)

四六判三五〇頁
定價二圓四十錢
送料(書留)八錢

ルーテル、ツングステル、ホルン、マリ子、バスター、ロビンソン、クリスト、カンストの傳。

小島政一郎著

汽車の話

(最新刊)

四六判二三四頁
定價一圓五十錢
送料(書留)八錢

蒸氣機關及び汽車の發達、構造、現狀等を興味深く説ける児童の科學的好讀物。

發兌 東京市牛込區 日活書店 電話 三二四一 六五三六 電話 三二四一 六五三六

女俱樂部

つても引張風素敵な四月月號

賣切の中早くお下さい

運動地を嚙む熱球
戦話實盛の奮戦
仇討櫻吹雪
武勇智左馬介
滑稽寶石燦爛
小説怪船奇女
實話怪船奇女

世界不思議五人組
四月と少女
四月の十訓
春の水(ローマ詩)
名士の修養訓
女學生の新聞
最近の遊藝室
家庭の教科書
講談社通信

誰にも出来る
大懸賞
（課題） 次の文の○のところへ字を入
れ下さい。
○○俱樂部は○本一の少女雑誌
（規定） 葉書に書いて三月三十日迄に大
日本雄辯會内宣傳部宛お出し下さい
當選者三百名に五十銭の圖書切手を
差上げます。此廣告の出た雑誌名記入の事
（發表は少女俱樂部六月號）

此外記事澤山 定價五十銭（送三錢五料）
東京市本郷區駒込坂下町四八
大日本雄辯會發行

少女何處へ行く

本誌は毎號
東宮妃殿下
台覽の光榮を
辱うす。
雑誌界の女王

全國の目ざめた
少女の方は皆本
誌の愛讀者であ
ります。
先生方は大賞讃
少女方は大喜び
是非一度
ご覧下さい。

忘れ得ぬ先生の教訓……名士回答
勉強運動仕事……市川源三
特別挾込附録をさなグラフ
一萬人當選大懸賞

美談佳話 愛と涙武勇の譽號 内容一部
小説露草の花……南部修太郎
熱血武勇八犬士……須田六福
義勇西劍舞……吉田一穂
銘々傳月下の太刀風……磯村野風
歴史山住みの姫……大倉桃郎
小説山住みの姫……大倉桃郎
長篇明けゆく空……横山美智子
小説消えたダリヤ……花辰春樹
小説馬賊血染めの白樺……久保一穂
奇談

科學セクシヨン

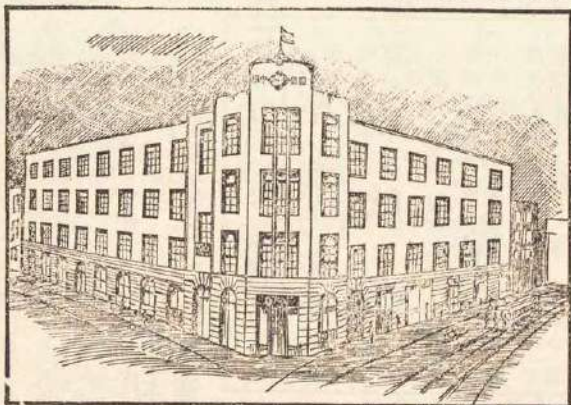
面白く読んで行くうち
しらすく理科の力が
つく。爲になる本誌特
有の誌上理科室
蚊の生ひ立ち……
大きな石橋の架け方……
郭公の恋愛……
天體遊行……

便利な袱紗附紙入
大懸賞
横山美智子

天下の青年は大日本國民中學會に入會する乎

- 講義が新しいから
- 會費が安いから
- 指導がよいから
- 學制が正しいから
- 基礎が固いから
- 講師が善いから
- 卒業が早いから
- 成功が速いから

通信教授のソリチ



(復興帝國一の偉觀本會新事務所全景)

立身成功の基礎

現代の活社會に、名を成さんとす
るには必ず中等教育を受けなければ
いけない。中等教育の學力のな
い者はどうしても生存競争の勝利
者たることは六ヶしい。併し家庭
の事情で中學に入れぬ者も決して
失望するに及ばない、中學校に
行かずに中學卒業同様の學問をす
る方法がチャンと出来てゐる。創
立以來二十三年といふ古い經驗の
ある講義録で有名な大日本國民中
學會の通信教授法がそれである。

東京神田駿河臺（お茶の水電車站）

大日本國民中學會

電話 大手五七七七 電話 神田三〇〇三
神田三〇〇四 振替東京四二〇〇三

創立廿三年 內容は一番古くて中學講義錄

講義録見本つき
却則書無料進呈

三井信衛 作
ローマ 譯

家なき娘

何といふ美しくも哀しい物語でせう。さまざまの運命に翻弄されたさすらいの乙女にどうか御同情下さい。これは日本でも廣く愛讀されてゐる『家なき子』の姉妹篇で、我國最初の譯述書であります。少年少女の皆さまは勿論、學校や家庭にも是非備へておくべき世界的名作です。一時も早く御一讀下さい！

その一節

『あなたには、お父さんやお母さんがあるの。』
『いえ……只つた私一人……』パリンヌは泣きながら答へました。
『まあ、私とおんなじれえ……』ロオザリイの目にも涙が一杯溢れてゐました。

發行所

東京市外
田端三五一

金の星社

振替東京五九五六番

本日代表童謡作曲界の金星童謡曲集

第一輯二各金十六錢三輯以下各金十八錢送金料六錢

第八輯	第七輯	第六輯	第五輯	第四輯	第三輯	第二輯	第一輯
べんぺん	お人形さんの夢	子守唄	夢と唄	赤い靴	青い空	一つお星さん	人買船
小松耕輔作曲・達崎龍作謠	本居長世作曲・野口雨情作謠	本居長世作曲・野口雨情作謠	小松耕輔作曲・野口雨情作謠	本居長世作曲・野口雨情作謠	本居長世作曲・野口雨情作謠	本居長世作曲・野口雨情作謠	本居長世作曲・野口雨情作謠
(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)	(目曲)
小鳥車、紅燈籠、さみだれ	お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雄子、芒の穂、お馬のお耳、草薙び、霜柱	子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、霜柱、葱坊主、藪の下道	夢とり、おしやれ椿、つば子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り	赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮船屋、眠り龜の子	青い空、燕、雨夜の傘、でんぐし、雀の酒盛り、呼子鳥	一つお星さん、七つの子、鰻と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬	人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん
東 京 市 外	東 京 市 外	東 京 市 外	東 京 市 外	東 京 市 外	東 京 市 外	東 京 市 外	東 京 市 外
番 六 九 五 九 五 五 五 五 五	番 七 八 三 五 川 石 小 話 電	番 六 九 五 九 五 五 五 五 五	番 六 九 五 九 五 五 五 五 五	番 六 九 五 九 五 五 五 五 五	番 六 九 五 九 五 五 五 五 五	番 六 九 五 九 五 五 五 五 五	番 六 九 五 九 五 五 五 五 五
京 東 替 振 振 振 振 振 振 振	番 八 九 五 四 五 部 版 出 眉 白	番 八 九 五 四 五 部 版 出 眉 白	番 八 九 五 四 五 部 版 出 眉 白	番 八 九 五 四 五 部 版 出 眉 白	番 八 九 五 四 五 部 版 出 眉 白	番 八 九 五 四 五 部 版 出 眉 白	番 八 九 五 四 五 部 版 出 眉 白

(通巻第六拾五號)

金の星

四月 號



あ の 山 蔭^{かげ}

作曲 本居長世
作 謠 野口雨情

あ の 山 越^こえ て
あ の 山 蔭^{かげ}へ
水 汲^みみ に
スタ コ ラ スタ コ ラ スタ コ ラ サ

一 桶^き汲^みん で は
草^{くさ}に か け
二 桶^き汲^みん で は
草^{くさ}に か け
一 桶^きか け れ ば
葉^はが 伸^のび る
二 桶^きか け れ ば
花^{はな}が 咲^さく
あ の 山 越^こえ て
山 越^こえ て
あ の 山 蔭^{かげ}へ
水 汲^みみ に
スタ コ ラ スタ コ ラ スタ コ ラ サ



pin lento *mf*

ひとをけくえでは
ひとをけかければ

くさにかけ ふたをけくえでは
はかのびる ふたをけかければ

くさにかけ スタコラ スタコラスタコラ
はながさく

p *poco rit.* *pp*

五

pp

f *p*

あ の や ま こ え て や ま こ え て

ま か げ へ み づ く み に

f *p*

スタコラ スタコラスタコラ

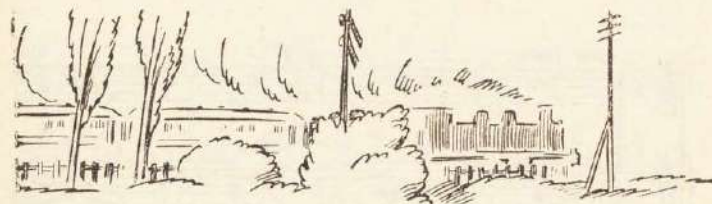
ff *f*

スタコラ スタコラスタコラ

四



けふのお菜はたまご焼
やアおいしいなおいしいな



お晝の汽車

若山牧水

坊やお晝の御飯時

停車場出てゆく汽車がある

ビー——ポツポツポツポツポ——

いまもお膳についた時

ビー——ポツポツポツポツポ——





愚助大和尚

沖野岩三郎

愚助は忘れん坊でありました。何を教へましても直ぐ忘れてしまふので、お父様は愚助を馬鹿だと思ひ込んで、お寺の和尚さまに相談にまゐりました。すると和尚さまは、
「其の子は御飯を食へますか。」と、ききました。お父様は、



「えい、御飯は二人前位平氣で食へます。」と答へました。和尚様は又た、
「其の子は打てば泣きます

か。」と問ひました。お父様は笑ひ乍ら、

「それは和尚様、なんぼ馬鹿だつて、打てば泣きま

す。鐘だつてたゞくれば鳴るぢやありませんか。」と申しました。そこで和尚様は、
「宜しい、御飯を食べるのは生きてゐる證據。打てば泣くのは、神經のある證據。或は大和尚になるかも知れない。こゝへ伴れていらつしやい。私の弟子にしてあげる。」と、申しました。

お父様は大變喜んで、早速お家へとんで歸つて、

「愚助御飯をお食べ！」と申しました。其時は、まだ午後の一時頃でしたが、愚助は少うしお腹がすいてゐましたので、早速大きなお茶碗に山盛り三杯食べました。それを見て、お父様は、

「うん、大丈夫だ。」といひましたが、今度は少し怒つたやうな聲で、

「愚助、こゝへお出で！」と申しました。

愚助は不思議に思ひながら、お父さまの傍へ近よ

りますと、お父様は、いきなり愚助の頬つべたを、びしやりと殴りつけました。

木の皮みたいなのがさ／＼した手の平で、ひどく殴られたので、愚助はヒイ／＼と泣きました。愚助が泣くを見て、お父様は、

「うん、大丈夫だ。それなら和尚様のお弟子になれるぞ！」と申しました。

それからお父様は、着換だの足袋だの、學校道具だのを風呂敷に包んで、愚助に背負はせて、お寺へつれて行きました。それを見た和尚様はにこ／＼笑ひ乍ら、

「あ、愚助か。よく來た、よく來た。」と言つて、直ぐお弟子にして呉れました。

愚助はお寺から學校へ通ひました。和尚様は、愚助が歸つて來ると直ぐ、今日習つた所を復習してみました。ところが、一つだつて覚えてゐません。

『どうしたんだい。なんと見事に忘れてしまつたものだな。』と言つて、和尚様は腹をかへて笑ひました。

愚助は和尚様に打たれるとばかり思つてゐましたのに、打たれなかつたばかりか、さも可笑しうに笑はれたので、自分も何だか可笑しくなりました。

其晩でした。愚助はお蒲團の中で、眼を閉ぢてゐますと、何所かで「氣をつけ！ 右向け右、前へおい。」といふ號令の聲が聞えました。

『おや、あれは先生の聲だな。』と思つて、ちつと其のまゝ眼を閉ぢてゐますと、學校の庭が眼の前にありありと見えて來ました。

庭には生徒が並んでゐます。生徒の中には自分の愚助も並んでゐます。

『おや、あそこにあるのは俺だぞ？』と言つて愚助はちつと見てゐますと、受持の先生は生徒をつれて教場へ入りました。

それから先生は算術を教へました。

『あ、あそこで俺が算術を習つてゐる。あ、手をあげた。答は百二十五。俺はなか／＼えらいぞ……今度は讀方だ。あ、俺が立つた。うん、すら／＼と行詰らずに讀んだ。俺はなか／＼えらいぞ……今度は綴方だ。あ、出來た出來た。先生が感心してゐる。今度は習字だ。うまい／＼俺が一番上手だ……今度は體操だ。あの俺が一番活潑だ。俺は何をして一番だぞ……』

いつの間にか、あたりは、ひっそりとして先生も生徒も愚助の俺も見えませんでした。

愚助はすや／＼と眠つてしまひました。そして翌る朝眼を覺しますと、和尚様は、

『愚助、早く起きて顔を洗つていらつしやい。御飯前に昨日習つたところを、復習してあげます。』と言ひました。

愚助は顔を洗つて來て、算術の本と讀本とをもつ

て、和尚様の前に出ました。所が不思議にも、昨日出來なかつた算術が、今朝はみんな、すん／＼と出來ます。讀本をあげますと、昨日一字も讀めなかつた所が、今朝はすら／＼と讀めます。和尚様も驚きましたが、愚助は尚更驚きました。

それから御飯を戴いて、學校へ參りました。歸つて來ますと、和尚様は復習をして下さいました。愚助は今日習つた事を一つだつて覺えてゐません。和尚様は又た腹を抱へて笑ひました。愚助も可笑しくなつて笑ひました。

けれども、晩になつて、お蒲團の中に入つてゐますと、先生の聲が聞えます。生徒が見えて來ます。そして生徒の中の愚助は、せつせと勉強してゐます。翌る朝、和尚様が復習をしますと、愚助はすら／＼と、皆な答へます。

和尚様は考へてゐましたが、
『愚助、おまへの頭は一日後の頭だよ。昨日習つ

た事を今日覺えるんだ。他の子供は昨日習つた事を昨日覺えて、今日は忘れてゐるんだ。所が、おまへは昨日習つた事を今日覺えて、いつまでも忘れないんだ。おまへは決して馬鹿でも何でもない。成長したなら、きつと、えらい人間になるぞ！』と言ひました。けれども愚助は、

『俺の頭は寫眞頭ではないか知ら？ 書問習つた事を、其晩現像して、翌る朝焼きつけるのではないか知ら？』といふやうな事を考へてゐました。

それから、毎晩々々愚助は、お蒲團の中に入るのが樂みになりました。

お寺は軒が傾いて、柱が朽ちてゐます。和尚様は村の人達に、お寺を改築するやうに、何度も何度も、お話ししましたが、村の人達は、お金のいる事は御免だと言つて、和尚様の言ふ事を聞入れませんでした。そこで、和尚様はお寺の書院の床の間に懸

つてゐる、大きな掛軸を外して、それを京都へ賣りに行きました。和尚様は其の掛軸を賣つたお金で、お寺を改築しようと思つたらしい。

ところが、和尚様は京都へ行つたまゝ待つても待つても歸つて来ません。村の人達は心配して京都まで和尚様を尋ねて行きましたが、京都は廣い／＼町ですから、和尚様は何所に居らつしやるか、さつぱり判りません。

村の人達は、もう和尚様は、京都の町で電車か自動車かに轢かれて死んでしまつたものだと思ひました。

「死んだ和尚様は歸つて来ないだらうが、せめて、あの大きな掛軸だけは取返したいものだ。」

村の人達は、時々そんな事を申しました。けれども其の掛軸は、何所の誰がもつてゐるか知れないのです。

さうしてゐる所へ一人の畫家さんが参りました。この畫家さんは妙な畫家で、何一つ自分で考へ出しては描けないのです。その代り、猫を描けとか虎を描けとか、こちらから命令すれば、實に立派なものを描きます。

村の人達は相談しました。

「あの畫家さんに頼んで、和尚様が何所かへ持つて行つた掛軸を描いて貰はうではないか。」

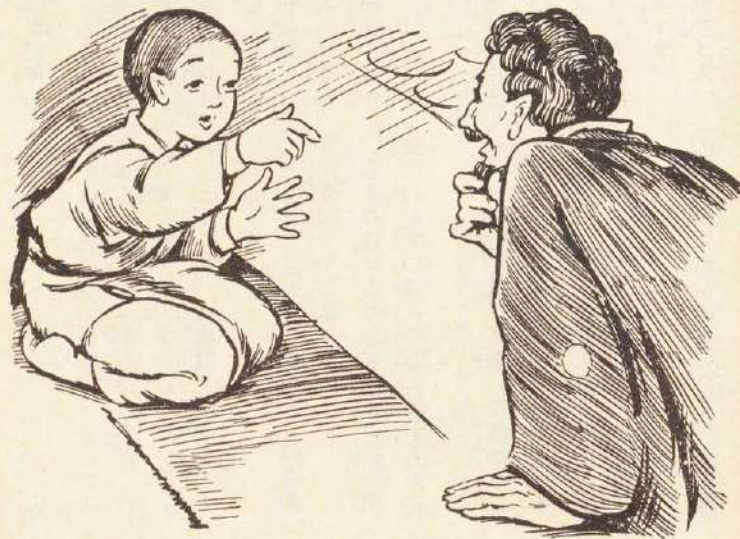
「それはいい。では描いてもらひませう。」

そこで、畫家さんに相談しますと、畫家さんは、「承知いたしました。どんな畫でしたか、仰しやつて下さい。其通りに描きます。」と申しました。

さて、さう言はれてみますと、此の村中に、其の掛軸の繪を、はつきり覚えてゐる人は一人だつてありません。

「妙な人間が、圓いものゝ向ふに立つてゐたつけ。」

「何人居たつけネ？」



「六七人だつたらう？」

「いや、五人だらう？」

誰一人、はつきり覚えてゐません。そこで村の人達は愚助の所へ来て、

「愚助さん、あなたは、あの書院に掛つてゐた大きな掛軸の繪を覚えてゐますか。覚えてゐますなら、畫家さんに話してあげて下さい。」と頼みました。

愚助は眼を閉ちて考へました。何とか、かんとか、和尚様が詳しく教へて呉れた事だけは知つてゐますが、みんな忘れてしまつてゐるのです。けれども愚助は、

「宜しい、其の畫家さんを、こゝへよこして下さい。きつと考へ出して、元の通りの繪を描いて貰ひます。」と申しました。

「愚助さん、大丈夫ですか。」と、村の人達は念を押してききました。すると愚助は、

「大丈夫です。僕の頭は、一日後れの寫眞頭ですか

ら。」と、申しました。

畫家さんが参りました。そして問ひました。

『愚助さん、どんな繪を描くのですか。』

『明日の朝まで待つて下さい。今晚見て置きますから。』

愚助は答へました。そして其晩蒲團の中で眼を閉ぢてみた通り、翌朝畫家さんに話しました。

『掛物の真中に、大きな壺があるんですよ。壺の正面には、こんな風に白い雲の飛んでゐる繪があるんです。』

愚助は指尖で、雲の恰好を教へて置いて學校へ行きました。そして一日何にも覺えないで歸つて來ますと、畫家さんは大きな紙に、立派な壺の繪を描いてありました。飛んでゐる雲も、愚助の言つた通りの雲です。

『愚助さん、この壺の側に何があるのですか。』と畫

いうちに、王モウの首はすばりと前に落ちてゐたさうだ。』と、立續けに申しました。

『では壺の向ふに、孔子様とカンタイと、王モウと黄巾の賊とを描くのですか。』と、畫家さんはさうしました。

『いえ、孔子様だけ。孔子様が右の手をこんな風に握つて、小指をこんなに撥ねてゐます。』と言つて、學校へ行きました。そして何にも覺えずに歸つて來てみますと、本當に賢さうな孔子様の畫が出來てゐました。

翌る朝、畫家さんは又た尋ねました。

『孔子様の傍に何を描くのですか。』

すると愚助は答へました。

『孔子様の隣りに、老子様を描くのです。老子さまは、お母さんのお腹に七十年居たのださうな。だから産れた時、もう髪が眞白で、齒が抜けてゐたのだつて。』

家さんはききました。

『待つて下さい、今晚見て置きます。』と愚助は申しました。畫家さんは、愚助が畫手本でも内證で見るのか知らと思ひました。

翌る朝になると、愚助は、

『畫家さん、壺の右の端にネ、孔子様が立つてゐるんですよ。支那の山東省の鄒邑といふ所で産れた孔子様、この人は偉い人だよ。或時にネ、カンタイといふ人が、孔子様を憎んで、斧で斬殺さうとしたのさ。所が孔子様は、(天、徳を吾に爲せり、カンタイ夫れ吾を奈何!)と仰しやつて、泰然自若として坐つてゐらしたんだよ。するとカンタイは孔子様を殺す所が、色を變へて逃げたのださうな。それからすつと後に、王モウといふ人があつたのだよ。或時に黄巾の賊といふ馬賊が攻めて來た。すると王モウは孔子様の眞似をして、(天、徳を吾に爲せり、黄巾の賊夫れ吾を奈何)と言つたが、其の言葉の終らな

『誰だつて産れた時は、齒が無いんですよ。』

畫家さんは笑ひました

『何でもいゝから、其の老子様を書くのです。老子様は孔子様も感心した人ですよ。』

愚助は學校へ行きました。そして教はつた事をみんな忘れて歸つて來ますと、立派な老子様の繪が出來てゐました。やつぱり右の手を握つて、小指だけ撥ねてゐました。

翌る朝、愚助は申しました。

『今日はネ、老子様の傍へ、悉達太子を描くんですよ。悉達太子といふのはネ、中天竺マカダ國、淨飯王のお子様で、カピラ城にゐなすつたのだが、或時城の外を通る老人を見て、人間は何故あんなに、年をとつて、病氣になつて、そして死ぬのかといふ事を考へたのです。(生れて老人になつて病氣になつて死ぬ)どうしても其のわけが解らない。人間が老人にもならず、病人にもならず、死なない方法はない

かと考へたが、わからないので、たうとう太子様はお城をぬけ出して、雪山といふ所へ行つて、アララ、カララといふ仙人について、何年も何年も修行した末、やつとワケが解つたのです。』

『どんなに解つたのです?』

畫家さんは眼を圓くしてきゝました。自分も年をとらないで、病氣をしないで、千年も萬年も生きてゐようと思つたのでせう。

『生れなかつたら……生れなかつたら、いゝんですよ。』

『生れなかつたら?』

『生れなかつたら、年もとらず、病氣にもかゝらない。死にもしない。』

『何だい、そんな事……』

『だつて、それだけの事が、人間にはなかく、わからないんだよ。それが本當に解つたので、悉達太子様は、今にお釋迦様と云つて尊敬されるのです。』



『えッ、それがお釋迦様ですか?』

『うん、さうだよ。其のお釋迦様が、斯うして小指を撥ねてゐらつしやるんだよ。』

愚助はそれだけ言つて置いて、學校へ行きました。今日は先生から呟鳴られた上、鞭で頭を、ひつぱたかれて、細長い瘤をこしらへて歸つて來ました。

繪は立派に出來てゐました。

翌る朝、愚助は學校へ行く前に、又た畫家さんに話しました。

『今日はネ、お釋迦様の隣りに、イエス・キリスト様を描くんですよ。此人もお釋迦様と同じやうに、ダビデ大王といふ偉い王様の子孫でしたが、ユダヤ國の王様にならないで、貧乏人や病人のお友達になつて、親切を盡したので、何にも悪い事をしないのに、悪い人に嫉まれて殺されたのです。其のイエス・キリスト様が右の手を高くあげて、壺の中を覗いてゐる繪をお描きなさい。終り!』

畫家はびつくりしました。

『夫れで終りですか。』

『さうです。それで此の掛軸は元の通りに出来るのです。』

畫家は、これでもしまひだといふので、一所懸命にキリスト様の繪を描きました。

五日間で、立派な繪が出来上りました。そこで村の人達は町から表具屋を備つてきて、それを掛軸にしました。

二十日目に出来上つた掛軸は、高さ一丈、幅六尺でした。書院の床の間に掛けますと、實に立派なものでした。

村の人達は、此の掛軸の説明を愚助に願ひますと、愚助は、

『宜しい、明日の朝までに見て置くから、明日の朝、お寺の鐘が鳴つたなら、村の人達は男も女も子供も一人残らず集つていらつしやい。』と申しました。

村の人達は、愚助が、此の掛軸の説明をした書物を見るのだと思ひました。しかし愚助は、蒲團の中で眼を閉ちて、和尚に教へられた説明を考へて見たのでした。

鐘が鳴りました。村中の人は、一人のこらず集つて来て、本堂の縁側まで、ぎつしり一杯に坐りました。

愚助は石油箱を持つて来て、其の上に登りました。そして先づ、孔子と老子と釋迦とキリストの履歷を詳しく話しました。

それは和尚に教へた通り一言も間違はないで話したのです。

村の人達はみんな驚きました。

それから愚助は、一段と聲を張り上げて、

『皆さん、この繪は、四聖吸醋之圖と申しまして、四人の聖人が、お醋を嘗めてゐるのです。』と言つた

時、多勢は一度にとつと笑ひました。

『お待ちなさい。笑ひ話ではありません。右の端の孔子様は、此の壺の中のお醋を嘗めてみて、これは

酸っぱいと思ひました。すると其隣りの老子様は、酸っぱいものを酸っぱいといふのは夫れは常識である。しかし能く味つてみると、此のお醋は少しく淡

い。水っぱい味がすると申しました。それを聞いたお釋迦様は、醋を酸っぱいといふのは道理だ。酸っぱいが少し淡いといふのも最もだ。しかし、よくよく味つてごらん、此のお醋には甘い所があると申し

ました。そこで最後にキリスト様は、醋は酸っぱいものだ。それに此の醋は淡い。水っぱい。のみならず少し甘い。これは腐敗してゐるのだ。だから打ち

まけて、新しく醸り直すがよい! と申しました。諸君、抑も此の四聖の言葉は……』

愚助は二時間あまり詳して説明しました。さア、それを聞いた村の人達は、大變感心しまして、俄か

に愚助を、『愚助大和尚』と崇め奉つて、こんな大和尚様を、こんな古寺に置くのは恐れ多いと云つて、早速お寺の改築に取りかかりました。

三年経つて、お寺が立派に改築出来ました時、和尚様は、ひよつこり歸つて來ました。

和尚様は持つて出た大きな掛物をやつぱり肩げてゐました。

それは何所へ持つて行つても、大き過ぎると言つて買つて呉れる人がなかつたからです。

和尚様は、お寺が立派になつたワケと、愚助が和尚様と崇められてゐるワケとを聞いて、腹を抱へて笑ひました。

愚助は和尚様が歸つて來たので、又た元の小僧さんになつて、小學校へ通ひました。そして毎日忘れて、毎晩思ひ出して、はつきり覺えるのでした。

村の人達は、又た愚助が馬鹿だか賢いのかか解らなくなりました。(をばり)



金雀花さく牧場

(ミレーの生立ち)

大木 雄三

1

千八百年代のはじめ、フランスに有名な畫家がありました。牧場や羊を描くことが好きで、その畫家の描いた百姓の繪は、ほんとに土の匂ひでもするやうに、しつとりした氣持にさせます。

この畫家の繪で『晩鐘』といふのは、廣い畑で働いてゐた百姓の

夫婦が、お寺から響いてくる鐘をきながら、お寺そかに夕の祈りをしてゐるところです。それから三人ばかりのお婆さんが、背をまるめて、畑の落穂を拾つてゐるところを描いた『落穂拾ひ』といふのがあります。

これらの繪は世界中の評判になつたもので、この國にもたくさんさんの版畫ができてゐますから、みなさんもきつと見たことがあるでせう。この畫家の名を知つてゐる方もありませう。ミレーです。けれどもミレーといつただけでは半分です。ちやんと呼ぶには、ジャン・フランソア・ミレーとかう言はなくてはなりません。

2

ミレーは、グリユシユといふさびしい田舎で生れたのです。

グリユシユには、ひろい牧場がありました。そ

して青々と伸び上つた柔い草の上には、眠いやうに目を細くした羊がのんきに、遊んでゐました。海が近いので、どーんどーんと打ち寄せる浪の音が、村の人たちには、優しい音楽になつて聞えるのでした。

ミレーは、その景色が大變好きで、こんなよいところはどこにもあるまい、と思つてをりました。金色の金雀花や圓い紫色の灌木が風に吹かれる景色は、ことにミレーを喜ばせたものです。

そんな日、小さいミレーは、きつと牧場の方へ出て歌を唱ひながら元氣よく遊ぶのでした。

メー、メー……

赤ん坊のやうな聲で啼く山羊は、柔い草の葉を食べて、口をもぐ／＼させてゐます。ミレーは、側へ寄つて、

『こら、あまりどつさり食べると、お腹が痛くなるよ。』

と言ひながら、山羊の顔を撫でてやるのでした。

海に近い岩の上に、ミレーの姿が、ちつと動かすにゐることもありました。さういふときは、氣に入つた景色の寫生をしてゐたのです。

ある日、どこにもミレーの姿が見えないので、お父さんは、ひどく心配して、あちらこちらを探して歩きました。村の人にきいてみても、知つてゐる者は一人もありません。

『どうしたのかしら。』

と、お父さんは首を傾げて考へましたが、ちきにつこり笑つて、海に突き出た岩の方へ歩いて行きました。すると、岩の上にミレーがゐて、いま一生懸命に繪を描いてゐるところでした。

お父さんは、そつと後から覗いてみて、感心したやうに首を振りました。それからミレーの名を呼びました。

『あゝ、お父さん。びつくりした。』

ミレーはお父さんの顔を見上げて笑ひながら言ひ

ました。

『お父さん、見て下さい。僕、いまこれを描いたのです。向ふに高い楡の木が立つてゐるでせう。下に羊がおはせい遊んでます。』

かう言ひながら、描いてゐた鉛筆で、そつと紙の上を指しました。

『うむ、うむ。』

と、お父さんが返事をする、ミレーの目は得意と嬉しさで輝くのです。

『ほら、これが羊です。そしてこちらが楡の木……楡の木は、羊の仲間へ入つて遊べないから、退屈して大きな欠伸をしてるところです。』

お父さんは、可笑しさうに、

『さうかい、欠伸してるのか。だからすこし曲つてゐるだね、はゝゝこりや面白い。』

と、言ひました。

ミレーの描いた繪は、どれもこれも、みんな價值

のある立派なものだったのです。けれども誰一人、ミレーが天才だといふことを知る人はなかつたのです。ところが、ひよつとしたことから、ミレーが村中の人を驚かさやうなことができました。

3

グリユシユーに小さい鍛冶屋の店がありました。

鍛冶屋さんは働き者で、朝からトンカトンカチやつてゐるのに、どうしたわけかお客がさつぱりないのです。で鍛冶屋さんは、何か店を繁盛させる方法はないかと考へてをりました。

ある夕方、鍛冶屋さんはブリケンやうに、大にこにこで外から歸つて來ました。何か板のやうなものを持つてゐるので、

『それは何だね。』

と、鍛冶屋さんのお上さんが訊きました。

『これか。これはすばらしいものだよ、偉いもの

さ。』

と、鍛冶屋さんが答へました。

『偉いものつて、どんな物だね。』

『さて、さて、急いぢやいけない。これを店先きへ出しておくのだ。するとお客がいつぱいやつて來るのだよ。』

『へえ。』

お上さんはどんなものか、早く見たいと思ひました。覗いて見たけれども、紙で包んであるので見ることができません。しばらく煙草を喫んでゐた鍛冶屋さんは、まもなく包んだ紙を除けました。

『何あんだ、繪ぢやないか』

と、お上さんが、つまらない顔をする、

『繪だよ、だがいい繪ぢやないか。あのミレーが描いたのだ。あの子供はうまいなあ。』

鍛冶屋さんは、かう言つて、その繪を店の表へ出しておきました。

「あんな子供の描いたものが何だといふのだい。こんなものでお客さんが来るなんて、ばかばかしい。ほんとにばかばかしい。」

お上さんが、ぶつぶつ言つてゐる時に、静かな鐘の音が聞えてきました。寺で鳴らす夕べの祈りの鐘です。

鍛冶屋の夫婦も十字を切つて、神様にお祈りをし



ました。——今日一日、何事もなく送ることができました。有難うございます。神様！と。

それからすこしたつてからです。黒い服を着た牧師さんが、ぼこぼこと歩いてきました。牧師さんの帽子の廣いつばのかげには、古ぼけた教會堂の屋根が半分ばかり見えてをりました。

牧師さんは坂を上つたり下つたりしましたから、そのたびに帽子が麥の葉にかくれたり、出たりしました。道は何度も何度も曲りくねつてゐました。けれども、この牧師さんは若い時から、毎日そこを通つてゐるのですから、目を閉ぢてゐても歩けるくらゐだつたのです。牧師さんは鍛冶屋の店先きへ來たときに、

「おやつ。」

と、足をとめてしまひました。それから家の中へ向いて聲をかけたのです。

「今日は。」

「はい、はい。」

鍛冶屋さんは、牧師さんの姿を見るとべこつとお辭儀をして、

「何の御用でせう。またドアの工合でも悪いのでせうか。」

と言ひました。

「違ふ、違ふ。私はそんな用で來たものではありません。」

「へえ。」

「この繪は誰が描いたのです。大へんよく描いてありますね。私はそれをお訊きしたいのですよ。」

牧師さんがかう言つたので、鍛冶屋さんは得意になつて云ひました。

「これですか、私の友達のみレーが描いたのですよ。みレーは、こんな繪なんか、わけなく描いてしまひますからね。」

「はあ、ミレーさん？」

牧師さんには、わからないのです。

「えい、あのジャンの息子のミレーですよ。」

「あゝ、あの子供ですか。」

やうやく牧師さんも、ミレーのことを思ひ出すことができたのです。牧師さんは、いつまでも繪を眺めました。

その繪は、驢馬に乗った三人の男が市場へ出かけて行くところを描いたもので、驢馬も人も大へんよく出来てゐたのです。

「これはえらい、ミレーといふ子供は天才だ。じつに感心した。」

と、牧師さんは、すっかり感心して、いつまでも動かずに眺めてをりました。これを見てゐた鍛冶屋さんは、真似をして、

「えらいよ、私の友達の子は天才だよ。嘘だと思ふものは、私の家にある繪を見に来るがいい。」

と、村中を觸れ歩いたのです。翌日から鍛冶屋の店先は、繪を見にくる人でいつぱいになりました。中にはそのついでだといつて、鍛冶屋へ鑄物を注文するものもあつて、店は急に繁昌してききました。鍛冶屋さんは、なるべく大きな聲で、来る人毎にミレーの話をして、

「じつに偉い。私の友達の子は天才だ。あの子の繪のおかげで、この店も繁昌するやうになつたからえらいものだ。」

と讀めそやすのでした。でミレーの天才だといふことは、村中の評判になつてしまひました。

4

ミレーのお父さんは、ミレーと二人だけの時に、次のやうに話しはじめました。

「可愛いミレーや。ゆくゆくお前はどんな人になりたいと思ふね。」

「僕は畫になりたいのです。」
「やうか。」



お父さんは、ちつと目を伏せました。そして言ふのでした。

「やつぱりさう考へてゐたの。お父さんは、ずつと前からさう思つてゐたのだつたよ。お前を畫家にしたいたいとねえけれども、お父さんは貧乏だから、お前に繪の勉強をさせられなかつたのだ。お父さんも決心した。これからお前は好きな繪を勉強してもいいのだよ。」

ほんとう、お父さん。」

ミレーは跳り上りました。

「ほんとうだよ、もうお前の弟たちも大きくなつて私を手傳つて働いてくれるやうになつたのだ。だからお前は心配しないで、うんと勉強なさい。」

えい、一生懸命にやりますとも。あゝ、僕は畫家になる勉強ができるのですね。」

ミレーはお父さんに飛びついたほど嬉しかつ

たのでした。

『お前は、つまらない人間で、このまゝゐてはいけないのだよ。立派な立派な畫家になつて、ほんとにみんなから、天才だといはれるようになつておくれ』

『えい、なりますとも。』

ミレーはかう答へたのでした。



5

二八

それから間もないことです。ミレーはお父さんに連れられて、繪の先生のところへ行きました。先生は、はじめミレーの描いた繪をみたとき、

『これは君が描いたのか。』

と訊ねました。

『えい、さうです。』

ミレーが答へました。先生はちつとミレーの描いた繪を見つめてゐました。その一枚の繪は、一本の樹の根元で羊飼ひが笛を吹いてゐて、向ふの緑の傾斜面に、たくさん羊が株を食べてゐるところだつたのです。もう一枚の方は、一人の百姓がある家の戸口に立つて、パンを貰つてゐるところで、空には星が輝いてゐるさびしい繪でした。

先生がいつでも口をきかないので、ミレーは心配になりました。

『先生、ほんとに僕一人で描いたのです。誰にも教へて貰つたり、手傳つて貰つたりはしません。ねえ』

『この子の言ふのは嘘ではありませんよ。私はちゃんと見てゐたのです。』

と言ひました。

『でも、これはとても子供の繪とは思へないほどよく出来てゐる。』

先生は容易にほんとにしません。そこで、お父さんと、ミレーとは、繰り返し繰り返して、嘘つきはしないといふことを言つたのでした。

たうとう先生も、ミレーの言葉を信用しなければならなくなりました。そして、お父さんに向つて、大へん真面目に、

『それがほんとならば、この子供は天才です。あなたは、何故いふまでも百姓などをさせておいたのです、もつたいないことですよ。』

と言ひました。ミレーはやつぱり天才だったので、先生をおどろかしたそのとき、わづか十八だったのですもの。(をばり)



お父さん。

『さうだとも。』

と、お父さんは先生に

二九

森の頭に話るな

宇野浩二



森に出て行つた狐のおこんは間もなく一疋の狼に會ひました。

『おこんさん、御機嫌宜う。』と狼の方から話しかけました。『お前さんは相變らず綺麗だね。一緒に散歩しようか。』

『お黙りなさい。』といつになく狐のおこんは眞面目な顔で叱りつけるやうにひきました。私はもうお前なんかと冗談を云つてゐる身分ぢやないよ。私はもうお嫁さんだよ。お前さんはまだ知らないだらうが百里も遠方からこの森の頭になり來た、片耳の猫の玉吉の私はお嫁さんになつたんだよ。』

『それやちつとも知らなかつた。』と、狼の若造がいひました。『ちやあ、早速その玉吉さんに御挨拶に行かうか?』

『駄目々々』と、狐はいひました。『うか、お前さんあの人の傍へ行くとひどい目にあふよ。幸ひ玉吉さんはまだ御飯前だから、お前さん、どこかで羊をとつて來て、それを挨拶のしるしに持つてお出で。だけど、それも初の時は、そつと入口のところへ、玉吉さんに見られないように置いておかないと、ひどい目にあふよ。』

かう脅かされて、人のよい狼は、

『いや、どうも有難う。ちやあ、そんなことにしよう。』といつて、狐に別れて、羊を見つけに出かけました。

狐のおこんはこれで羊が一疋もうかつたと思ひながら、又ふら／＼と少しばかり歩いて行きますと、今度は一疋の熊に出あひました。

『お早う、おこんさん』と、熊の方から挨拶しました。(相變らず綺麗だね。)

『まあ、黒助さん、失禮なことを云ふもんぢやないよ』と狐はわざと鹿爪らしくいひました。『私はもう以前 私ぢやないんだよ。お前さんは今度百里もある遠方からこの森の頭になり來た猫の玉吉といふ』

方を知らないだらうが、今度私はその玉吉さんのお嫁さんになつたんだよ。」

『それは知らなんだ。』と、熊はいひました『では、一つその方にお目にかゝりたいもんだね。』

『何をいふんだよ。お前さんなんかうかう／＼傍に行かうもんならひどい目にあふよ。だが恰度これから御飯を上るところだから、お前さん大急ぎでどこかで牛を一疋殺して持つておいで。しかし、今、狼の若造さんにもいつたんだが、若造さんは羊を持つて来ることになつて居るんだ。お前さんも牛を持つて来たら、そつと、玉吉さんに見られないように、入口にそれを置いときなさいね。それでないと、見付かつたらどんな事になるかも知れないから。』

かう狐のおこんにいはれると、正直な熊の黒助は『おや、さうしよう、よく教へてくれた。』といつて、早速牛をとりどこかへ行つてしまひました。そこで、狐のおこんは暫くその邊をぶら／＼歩いて



三二
てから、自分の住居の方へ歸つて來ましたが、家の中に入ると、恰度枯草の坐蒲團の上で眠つてゐました玉吉の目を醒まさないように、なるべく静かに、おとなしくして居ました。

話代つて、狼の若造はやつとのことで一疋の羊を殺して、えんやらさとそれを擔いで、狐の住居の傍まで來ましたが、あんまり近くへ行つて、もしもその猫の玉吉といふものに見つかつては大變だと思つたものですから、入口から見えないところへ羊を下ろしてなるべく食べいゝようにと、その皮を剥でゐました。すると、そこへ熊の黒助が一疋の牛を運んで來ました。

『今日は、黒助さん。』と、若造はいひました。

『今日は、若造さん。』と、黒助も挨拶しました。『ところで、おこんさんは？』

『まだ見えないよ。お前ちよつと呼んで見てくれなにか？』と、狼がいひますと、

『いや、お前呼んでくれよ。』と、黒助も、猫の玉吉に見つかつてはと思ふものですから、逃げ腰になつてかういひました。

『いや、それは私しもしやだよ。』と、若造も恐がつていひました『ちや、兎に角、おこんさんの出て來るまで待つてゐることにしよう。』

『それにしても、玉吉さんとかゝ一緒に出て來ちやあ大變だから』と、黒助はいひました『私はこの木に上つて隠れてゐよう。』

『そんな事をいつたつて、そんなら私はどうしよう』と、狼は泣聲になつていひました『私は木に上れないし、どこへ隠れよう？』

『お前はあその叢の中に入つたらいゝ。』と、黒助はいひました『私がその上から分らないように木の葉をかけてやるから。』

『有難う、ちやあ頼むよ。』といつて、狼はそこ／＼に傍の叢の中に入りましたので、熊はその上から



一面に木の葉をふりかけて、若造の鼻だけが見える位に、木の葉ですつかり隠してやりました。そして自分は傍の樅の木の一歩頂上へ上つて、そつと下の様子を見てゐました。すると、間もなく、狐の住居の入口に、狐のおこんと並んで、猫の玉吉の姿が見えましたので、黒助が木の頂上からそつと小さな聲で、叢にある若造に向つて、

『来たよ、来たよ。』といひました。しかし、思つたより玉吉といふのは小さいよ。』

『しッ、しッ!』と、叢の中から若造が震へながら『聞えちや大變だぞ。しッ、しッ!』

と、いふ間もなく、玉吉は目の下に現れて、先づ背中を丸くして伸をしてから、そこにおいてある牛の肉をちよい／＼と片足で引掻きながら、時々鼻を持つて行つて、『ふう、ふう!』と云つてゐます。

熊の黒助はそれを木の上から見ながら、びつくりしました。それは玉吉が、自分の持つて来た牛が氣に



入らないらしく、『ふう、ふう!』と云ふのが、『こんな小つぼけなもの!』といつて居るやうに聞えたからです。

『身體は小さく見えるが、随分食べるんだな。』と、黒助は思ひました。『私などはあの四分の一で腹が一ぱいになるが、して見ると、よつほど強いやつに違ひない。見つからないようにしよう。』

叢の中にある狼は困りました。といふのは、玉吉を見ようとしても、かぶつてゐる木の葉のために見えないのです。それを見ようとして、ちよつとでも身體を動かすと、身體の上の木の葉がばら／＼こぼれて、隠れてゐるのが分りさうなのです。それでも、どうかして見たいと思ふので、鼻の呼吸で少しづつ、顔の邊の木の葉を吹き飛ばして見ました。

が、片耳ではありましたが、それが玉吉の耳に聞えました。玉吉は牛と羊の肉からちよつと顔を離して、ふと聞耳を立てました。その時、『さうだ、今日は

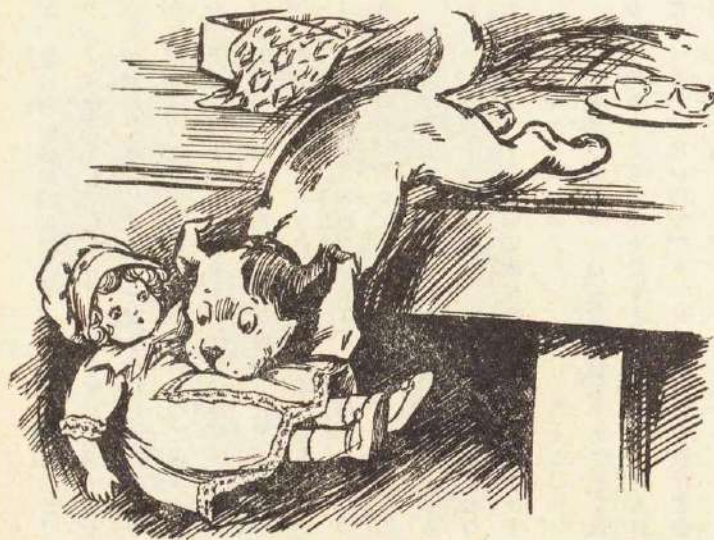
まだ鼠を食はなかつたな。」と、思ひました。目を上げた時に、向ふの木の葉の山の中に、鼠が隠れてゐるのを見つけたやうな気がしたからです。そこで、いきなり前足をそろへて、爪を立て、それが、狼の鼻とは知らずに飛びつきました。狼の、若造のびつくりしたことがありません。

いきなり木の葉が四方に煙のやうに飛んだかと思ふと、狼は夢中で、後も見ないで逃げ出してしまひました。が、狼よりもつとびつくりしたのは、猫の玉吉でした。玉吉はびつくりした餘り、夢中で傍の樫の木に駆け上りました。ところが、その頂邊に隠れてゐた熊の黒助が又びつくりしました。

「これは俺も見つかつたぞ！」と思つたものです。が、下から猫の玉吉が爪を立て、駆け上つたものです。黒助は逃げ途がありません。熊は目をつぶつて、運を天に任して、木の頂邊から飛び下りる外ありませんでした。それと一緒に何十本といふ樫の

木の枝が一度に折れて落ちました。黒助は落ちた拍子に腰の骨を打つやら、足の骨を折るやら、しばらく立上ることも出来ないやうに見えましたが、その時、狐のおこんが、「黒助さん、しつかり。そら、玉吉さんが来るから、それ、早く！」と叫びましたので、黒助はびつこを引ながら、夢中で、一生懸命に逃げて行つてしまひました。

うまくやつたのは、結局猫の玉吉でした。この事があつてから、愈々本當に玉吉はえたいが知れない程強いといふ評判が森中に傳はりましたので、望みの通り森の頭になりました。それには狐のおこんの賢い智恵のお蔭があつたといふ迄ありません。そして、玉吉は望み通り、お爺さんお婆さんの家にゐた時のやうに、毎日ごろ／＼と怠けてゐて、それで少しも食べ物に不自由することはありませんでした。そして相變らず時々慰みに鼠を取つて暮しました。(をばり)



ジョンとひろ子さん(推薦)

大場 繪津

今迄ひとりおとなしく、お縁側でお人形ごつこをして遊んでゐたひろ子さんは、お隣の百合子さんがお迎へにいらしたので、お人形も何もやりつばなしで、遊びに行つてしまひました。

さつきからお庭の木かげで、ひろ子さんの遊ぶ様子をみてゐた仔犬のジョンは、何を思ひつたのか、ノコ／＼とお縁側のそばへやつてきました。そしてジョンとお縁側の上に飛び乗つたかと思ふうちに、ひろ子さんの一番大じな西洋人形のマリーさんを、ズル／＼ひつばつてお縁の下に入りこみました。

今迄青いお眼をバツチリさせてゐたマリーさん

が、急に白い眼を出したので、ジョンは吃驚して、ワン／＼吠え出しました。けれどジョンは、マリイさんが別にどうもしないで安心したと見え、おつかなびつくりお人形の側に腹ばひになつて坐りました。そして顎を地べたにすりつけて、尾をばた／＼ふりながら、時々うなつたも吠えたりしてゐましたが、悪戯すきなジョンは、ちつとしてはおられないとみえ、そろ／＼本性を現して、お人形にじやれつきました。

マリイさんはお手々をもがれたり、お顔をかじられたり、洋服をさかれたり、それは惨々な目にあつた揚句、とう／＼お庭の隅に放り出されてしまひました。

お人形に飽きたジョンは、此度は何をしようかと、お家の廻りをぐる／＼まはりまじけれど、何も目につくものがないので、コッソリと垣根を抜けてお隣りのお庭に出ました。

お座敷では、おうたの最中で、百合子さんがオルガンをひき、ひろ子さんが、

『青い眼をしたお人形は、アメリカ生れのセルロイド……』と聲をはりあげて歌つてゐました。ジョンは、一寸横目で二人を見ましたが、氣付かれないのを幸ひ、裏の方へソツト行きました。

すると、恰度お夕飯の支度時分なので、百合子さんのお母様と女中さんが、おいしうなお料理をこしらへてゐらつしやいました。バタのこげる匂ひや、牛肉のうまさうな匂ひが、ブン／＼ジョンの鼻をつきますので、ジョンはもうたまらなくなつてしまつて、お臺所の中へしらす／＼入つてしまひました。

それと氣が付いた女中さんは、

『こん畜生！』と足をふみならしたので、ジョンは吃驚して外に飛び出しました。

あゝこわかつたと胸をなでおろしたジョンは、忌いしい何か悪戯をしてやるものはないかと、あたり

を見廻しましたがけれど、これといつて目ばしいものがないので、そこらをウロ／＼しながら、のそりのそりと物置の裏へやつてきました。

恰度其處に、さつきおこられた女中さんのまだ新しい足駄がきれいに洗つて、ほしてありました。



それを見つけたジョンは、やゝいゝものがあつたぞ！ といはんばかりに、片方をくばへて、ドン／＼逃げ出しました。そして自分の小屋の處まできて、ホッと安心しました。けれど、どうも小屋では狭いので、又それをやつこら／＼お縁の下にもつてきました。

ジョンはさあこれからとばかりに、ガム／＼下駄をかじりだしました。ビロードの赤い鼻緒は眞黒になるし、まつ白だつた桐の下駄は、ジョンの齒形でいつばいになつてしまひました。さあこれでもういいと、ジョンはお縁の下から何知らぬ顔をして這ひ

出ました。

さて、お隣りから歸つてきたひろ子さんは、お縁側にやつてきました。まだお人形の家は其まゝになつてゐて、おふともお道具も、元の通りにならんでゐました。けれども大切なマリイさんの姿が、何處へ行つたのか見えません。ひろ子さんの胸は、何かに打たれたやうにドキンとしました。

どうしたのかしら、私たしかにこゝに置いた筈だけれど……もし見つからなかつたらどうしよう。と小さい胸をドキ／＼させながら、あたりをさがしてみましたが、あらう筈はありません。ひろ子さんは益々心配になつて、お人形を持つて行きもしないお室までも、あつちこつち探しました。お母様のお室近くきた時、ひろ子さんは、何かヒョクと思ひついた様に顔を明るませて、お母様のお室に入りました。「お母さん、私のお人形をおしまひになつたでせう？」

「いえ、お母さんなんか知るもんですか。」まあこの言葉をきいた時、どんなにひろ子さんがつかりしてしまつたでせう。

力なく「そお」といつたきり、何とも云へませんでした。お母様はひろ子さんの顔を見上げて「どうしたの。」と仰しやいました。

「あのね、私お人形を出したまゝお隣りに遊びに行つて歸つてきたら、お人形だけないんですもの。」とおしまひの方は、もうオロ／＼聲になつていひました。お母さんは少し聲を強めて、

「あなたはいつもさうでせう。遊んだ後は片付けなければいけないといつもいふでせう。ほんとにわるいくせですよ。もつとよく探がしてごらんさい。」と、いはれました。

それから、お母さんとひろ子さん、女中の竹やも一緒になつて、さがしました。

ふとお母様が、縁の下をおのそきになると、お人

形の片手かがれておちてをりました。お母様は、

「アラ、こゝに片手が落ちてゐるよ。これは又あのジョンの仕業だよ。お庭の方を見てごらん。」と仰有つたので、二人は裏庭の方からお玄關の庭まで見ました。

けれど小さいマリ

ーさんは、どこに

かくれてゐるの

か、なか／＼見當

りませんでした

が、やうやくお庭

の隅の植込みの中

から、泥だらけに汚れた

可哀さうなマリーさんを、

抱きかゝへた竹やが

出て來ました。

アラあつたの？と、ひろ子さんは飛び上るやうにし

て、竹やのそばに駈けて行きました。嬉しさうに竹



やの手から、マリーさんをとるが早い、ひろ子さんは、シク／＼なき出しました。

「ジョン、ひどいわ／＼。私のお人形をこんなにし

てしまつて。

ひろ子さんは、

こんなになれ

てしまつたの

がくやしく

て、お庭に立

つていつまで

も泣いてゐま

した。竹やが

何度もお家に

入るやうにい

つてもきかず、暗いお

庭に立つてゐましたが、しまひにお母様が出てゐ

したので、どうしもお家に入らなければなりません

んでした。

しばらくお母様の後について、お茶の間に入つて行きますと、お父様はもう歸つてゐらして、お火鉢の側に坐つていらつしやいました。ひろ子さんの涙によぐれた顔と、マリーさんの姿をご覧になつたお父様は、アハハハとお笑ひになりました。ひろ子さんは、笑はれたのが何となく悲しくなつて、又シクシク泣き出しました。

お母様は其時、さつきの譯をすっかりお父様にお話しになりました。ひろ子さんが泣きやんだ時、お父様はこんな事をひろ子さんにおたづねになりました。

『ひろ子、ジョンとお前と今日した事はどつちが悪いと思ふの？』

ひろ子さんは、しばらく下を向いて、だまつてゐましたが、小さい聲でジョン！と云ひました。

『ウン、ジョンの方がわるい。さうかね。お人形を



持出してこはしたのはたしかにジョンの方が悪いがお縁側にお人形を出して置いたのは誰なの。お前だろ？』

ひろ子さんは、一寸うなづいてみせました

お父様は尙言葉をつゞけて、

『そんなら、もしお前がそのお人形を出して置かなかつたなら、ジョンだつて悪戯をしようと思つたつて出来ないじやないか。片付けなかつたから、そんなにされてしまつたんだろ、ね。だから今日した事は、どつちが悪いかわかるだろ。物をかたづける時は、一時は面倒だけれど、きちんと元の通りにするのは、ほんとに氣持がいいのだよ。そして今日の様に、辛い目に遇はすにむ事もある、かなしい目にあふよりは、面倒でもきちんと物を片付ける子は、ほんとによい子供だね。お父さんはそんな子が大好きだよ。』と仰いました。

ひろ子さんは、お父様のお話をきゝながら、自分

の方が悪かつた事に氣がついて、先づきからジョンを大變うらんでゐたのが悪くおもはれてきました。お父様はそれだけお話しになると、口笛をふいてジョンをおよびになりました。ジョンは、何の御用かと、裏の小屋から一目散にかけてきました。お父様はジョンの頭をなでながら、

『お前もお人形どつこがしたかつたのかい。』と仰つたので、お母様もひろ子さんも、クスクス笑ひ出しました。

其時、臺所から竹やがでて来て、お隣りの女中さんの下駄をジョンが目茶苦茶にしたことを話しましたので、大そうジョンは叱られてしまひました。

ひろ子さんは、これからは決して今日の様な事はしませんが、お父様とお母様にお約束しました。

それからお人形のマリーさんは、當分の間、お人形病院に入院させる事にしました。ジョンは、悪戯をした罰として、五日の間鎖でつながれました。



童謡

野口雨情選

(大人篇)

とんび

愛媛縣 生石村
仙波しげる

とんびビーヒヨロ
ヒヨロヒヨロビー
食べものないかと
ヒヨロヒヨロビー

麦ばた千里にや
春の風

げんげん畑も
春の風

とんびビーヒヨロ
ヒヨロヒヨロビー
食べものさがして
ヒヨロヒヨロビー

雪の日

埼玉縣 大越村
腰塚まさ緒

好きなおこたも
あきちやつた
みかんもたべたく
なくなつた
おこたの上の猫の目も
だんだん細くなつてきた
まだまだ粉雪ふつてゐる

霜の朝

福井縣 小濱町
法本 美夫

大根畑の

霜の朝
豆がカラカラ

燃えてゐる

大根畑の

霜柱

ふみふみあたりに
行かないか――。

水くぐり

青森縣 長島町
田 秀二

カツボリ／＼水くぐり
チラ／＼粉雨まだ晴れぬ
畑の寒菊ニツ三ツ
雪の降るのに水くぐり

四四

あひるは寒から冷たから
川べりすすき枯れすすき

水は冷たし雪 降る
それでもあひるの水溜り
カツボリ／＼水くぐり

春

甲府市 東青沼町
五味くに三

梅桃、さくららの
咲く里に

はるばる春の

来る頃は
ゆきは學校へ参ります

梅桃さくららの
散る里を

はるばる春の歸る頃
姉やは子守に参ります

木つつき

神奈川縣 藤澤町
手塚 敬三

お山の可愛いきつつきは
いつも電報うつてゐる
遠いお國の母さまに
おたより知らそと
うつてゐる、

コツコツコツコツ

『母さまおからだ
如何です』

お山の可愛い木つつきは
いつも電報うつてゐる

狐

横須賀 市谷入
興津 榮一

コン／＼小狐親狐
尻尾をぬらすな
雨コン／＼

湯上り

愛知縣 一宮市
森 はたる

私や

お湯から
出たばかり。

お月さま

雲から
出たばかり。

河原の小石

群馬縣 群馬村
青柳 花明

河原出て見りや
綺麗な小石



一つ拾ほか
拾つて見れば

拾た小石が
ども氣に入らぬ

拾て拾て
拾て拾て
拾て置いて見りや
綺麗な小石
やはり小石は
河原の小石。

から車

濱松市 中村 元

からから野みち
から車

鎮守の森には
鳥がゐる

野みち近みち
から車

からから夕焼
みな焼ける

四五

小鳥は空に

加藤武雄



四六

四（前號までの梗概は一三三頁にあります）

義雄の一家が京都を引き揚げる日が来た。前の日のうちに、此の村では滅多に見る事のない貨物自動車に来て荷物を運び出した。

夕方になつて黒い大型の自動車が義雄達を迎へに來た。義雄は、母の編んだ毛糸のジャケットを着て、いそ／＼と自動車に乗った。信子、お美津、最後に仙石老人が乗った。

「一寸待つて下さい。」

信子が運転手に云つた。そして窓から顔を出して、門の前に集つた村の人達に最後の挨拶をした。村の人達は、親しい者の柩でも送り出すやうに、黙つて頭を下げた。寒い黄昏の中に、悲しい沈黙が

續いた。

「奥様、もう時間がせまりましたので。」

仙石老人が注意したので、やつと自動車が動き初めた。そのとき、村の人の中から一人の少年が叫んだ。

「義ちゃん萬歳——」

それは少年達が學校の運動場で競争をして義雄が勝つたときにも叫ばれた萬歳であつた。義雄はその聲で村の友達のことを胸に浮んだ。

「母さま、あれが學校の庭ですね。僕達がいつでも遊んだ……」

「爺やは若様が馳競をなさるところを此の道から拜見しました。若様は随分お活潑でいらつしやいますねえ。」

仙石老人も云つた。自動車は、動物園の横を通つて岡崎公園をぬけた。小さな義雄には象を見に來たり、運動會に來たりした馴染みの場所であつた。さ

うなら、だ。もう再び見る事も來る事もなからう。

京都驛へは大工の庄助が來てゐて、荷物の世話をした。間もなく東京行の列車が着いたので一行は一等寢臺車へ乗つた。お美津も一等寢臺車の客であつた。

「私は、その當世流のブロなんとかでして、勿論三等の赤切符なんだが、お美津は全く豪勢なものだ。」もうすつかり諦め切つた庄助が、じょうだん交りにこんな事を云つたりした。

「庄助さん、どうもいろ／＼御苦勞をかけましたなあ。花が咲きましたら是非とも一度御上京下さい。俺が御案内致しますでな。」

仙石老人が云つた。老人と庄助とは、いつの間にか、すつかり打ち解けて居た。やがて發車時間が來たので、プラット、ホームのアラム、ベルがけたたましく鳴り響いた。そのとき混雜した見送人を掻き



別けるやうにして近寄つて來たのが駐在所の健吉だつた。義雄は、いちやくその姿を発見して汽車から降りようとしたが、仙石老人にとめられた。健吉は息せき切つてゐた。

「あのね、本願寺の前で電車が停電したので、あれから僕、走りどほして來た。お父さんも來てゐるのだから、走れないから間に合はないかも知れない。」

「義ちゃん、東京へついたら繪葉書をくれたまへな。」

「健ちゃんも、皆んなの事を知らして呉れたまへよ。それからねえ、僕のことを忘れてはいやだよ。」

「忘れるものか。早く伯爵様におなりよ。」

こんな話をしてゐるうちに、車掌の笛の合図で汽車は靜かに京都驛を離れた。そのとき、改札口から、象のやうに肥つた駐在巡查の森田平吉氏が出て來た。もう挨拶をすることもできなかつたので残念さうに、帽子を打ち振つた。

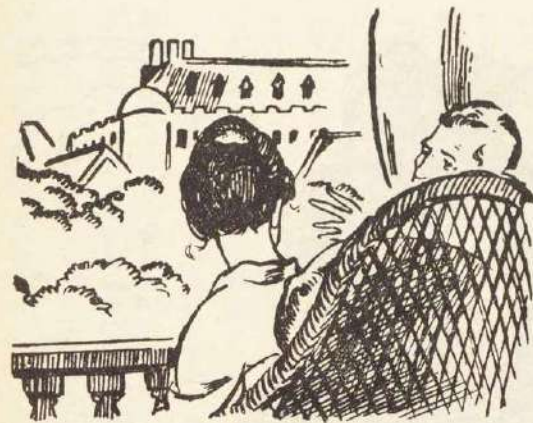
濱名湖で夜が明けた。間もなく旭光に輝く富士山が現はれた。義雄は寫眞や繪で見た富士山と實際の富士山は随分違ふといふ事を知つた。

國府津を過ぎて、列車ボーイが來て荷物をまとめた。義雄の荷物は仙石老人のと一緒にし、信子の荷物とお美津のものを一つにまとめたので義雄は不審した。そのとき信子は東京へ着いたら母と子との住居が別々になるのだと話したので、義雄は驚き悲しんだ。仙石老人が傍から言葉を添へた。

「ねえ、義雄様はこれから先生に來ていただいて、いろ／＼の御勉強をなさらなくてはなりません。それにはお母様とは別のお邸にお住ひにならなくてはなりません。義雄様のお邸は中瀬谷と申しまして、東京の市外にございますが、お母様のお邸も矢張りその中瀬谷で、お邸とお邸とは谷一つ隔てた二つの丘の上にあります。さうですなあ、道程にいたしますと五六町ほどしか離れて居ませんので、義雄様の

御居室の窓からは、お母様のお邸が手にとるやうに見られるのでございます。」

そして、毎日散歩に出たとき母と子とは逢ふ事が出来る、と



いつたので義雄は漸く安心した。たゞ、夜が来ると寂しからう、と思つたが、汽車が東京驛へ着くと、伯爵家の自動車が出来て待つてゐた。一行

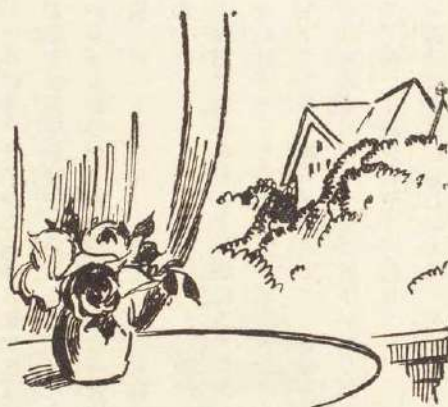
を乗せた自動車は、京都の幾倍も賑かな東京の市内を馳つて、間もなく中瀬谷の別邸に着いた。花崗石の、いかめしい門を潜つて、松並木に挟まれた砂利道を一町あまりも走るのであつた。玄關は日本風の敷臺になつて居て、四人の女中が手をついて迎へた。仙石老人の先導で、母と子の一行は長い廊下を通つて、高臺の切崖の上に建つた一室に入つた。日本室ではあつたが、切崖に突き出たベランダがついてゐた。ベランダには籐椅子が恰好よく配置してあつて、そこから眺めると丘の麓の人家が一目だつた。人家のむかうにも亦、同じほどの高臺の丘があつた。その丘の上には森に囲まれた赤煉瓦の宏壯な、まるで城のやうな邸宅があつた。それが岩村伯爵家の本邸で、ちよとそこを向きあつた、そして日光に輝く硝子窓の一室が、義雄の居室であると仙石老人が説明した。

「僕、ちよとお處に出て見てもいいでせうか？」

義雄は仙石老人に訊ねた。

「よろしうございますとも、だれか書生を呼んでお伴いたさせませう。」

「いえ、



僕ひとりの方が好きなんです。」

義雄は縁側から、女中の穿かせて呉れたスリッパを工合わるさうに引きすりながら、冬枯の芝草をふんで、庭園の奥深くはひつていつた。

あのお城のやうな邸、この公園のやうな庭、それがみんなお祖父様のものなのだ。自分はそのお祖父

様の孫なのだ。義雄は子供だからそれが嬉しかつた。そして未だ見ぬ祖父の老伯が、善良な英雄のやうに想像されたりした。

信子は、仙石老人からこの別邸について、いろいろの説明をきいた。洋館が二つあるがそれは御使用にならなくとも、此の日本風な建物だけでも充分であらう。女中は四人つけておくが、多過ぎれば二人にしてもいいであらう。女ばかりでは不用心だから書生を一人よこさう、だのといろ／＼の打ち合せをしたのち、

「では、私は一應伯爵に御目にかゝつて御安着の報告を致しましたのち、改めて御伺ひいたすでござりませう。」

といつて、その室を辭したのであつた。

とり残された信子は、いろ／＼と物思ひに沈んだ。

自分をあんなに憎んでゐた老伯が、思ひ掛けぬ、

こんな邸宅や召使ひを自分のために用意してくれやうなどとは不思議でならなかつた。

だが、伯爵の方では、伯爵家世嗣である義雄の生母に、みづめな生活をさしたくはなかつたのだ。それは信子に對する好意からではなく、家門の虚榮には過ぎなかつたけれど――。

一つには、信子から義雄を奪つた償ひに、出來得る限りの満足を信子に與へなければならぬと考へたからでもあつた。愛の値價を知らぬ老伯は、愛は物質で買へるものだ、と誤つた考へを持つて居たのであつた。

義雄は池の畔をめぐり築山の上に出た。そこから幻燈のやうな富士の山が望まれた。それから築山を下つて松や檜の林に入つた。林の中には黒と白との二匹の兎がゐた。兎は思ひがけない少年を見たので、驚いて逃がれやうとした。

義雄はそれが珍しいので、兎のあとから、得意の

馳足で追ひか

けるのであつ

た。二匹の兎

は、逃げなが

らも離れやう

とはしなかつ

た。二匹が後

になり先にな

りびよんびよ

ん跳ねながら

林をぬけ、西

洋花壇の中へ

逃げ込んだ。

花壇には、アネモネやヒヤシンスや春咲く花の球

根が植ゑてあつた。そして、フレイムの中には、春

の草花が播種してあつた。義雄は、いつの間にか、

スリッパを捨て、靴下のまゝで、花壇の中をくる



くるとかけ廻つた。

勿論、球根やフレイムの芽生などはほとんど踏みにむりながら、逃げる兎のあとを追ふのであつた。遂には吾を忘れて大聲に、愉快な叫びをあげながら馳け廻つた。

こんな騒ぎは、此の邸宅には始めての出来事であつた。若い書生や女中達に、とても、厳格な家風に縛られて、笑ひ聲一つにも遠慮するのであつた。

新しい、そして小さな主人は、そんな家風なんか考へはしなかつた。自由に叫



び、自由に馳つた。

林の中に巢を組んだ、小鳥の群もさぞかし驚いたであらう。

信子は、窓からこの光景を眺めた。

二匹の兎を追ひながら花壇を踏みちつてゐる吾が子の姿を眺めた。

「あれでいいのですわ。」彼女には心から微笑した。何事にも恐れず、どんなに境遇が變化しようとも、矢張愉快である吾が子の姿が嬉しく眼に映じた。

(つづく)

居眠り地藏さん

竹久夢二

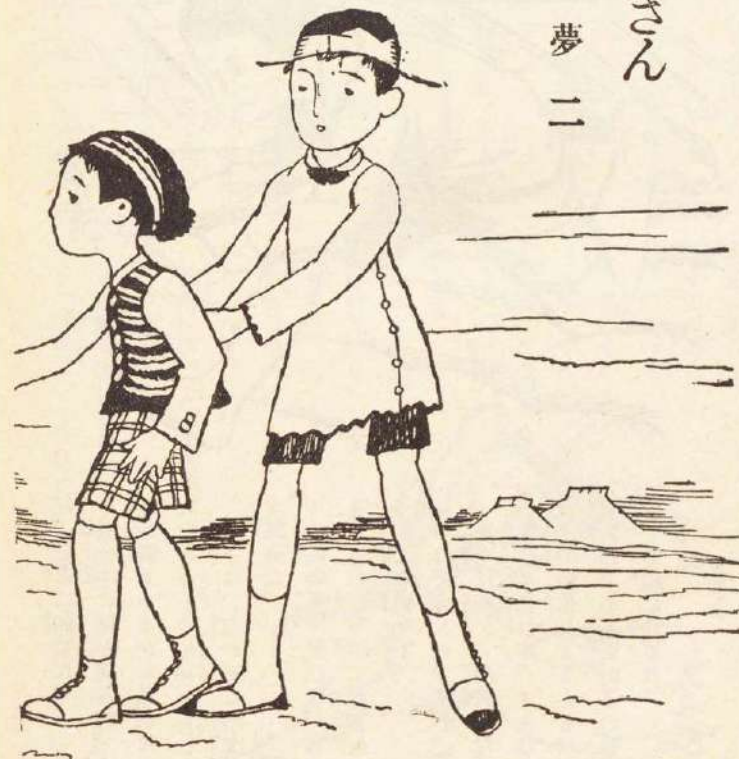
るねむり地藏さん

道の端

お馬が通るに

こつくりこ。

るねむり地藏さん



赤エブロン

いつもお年が

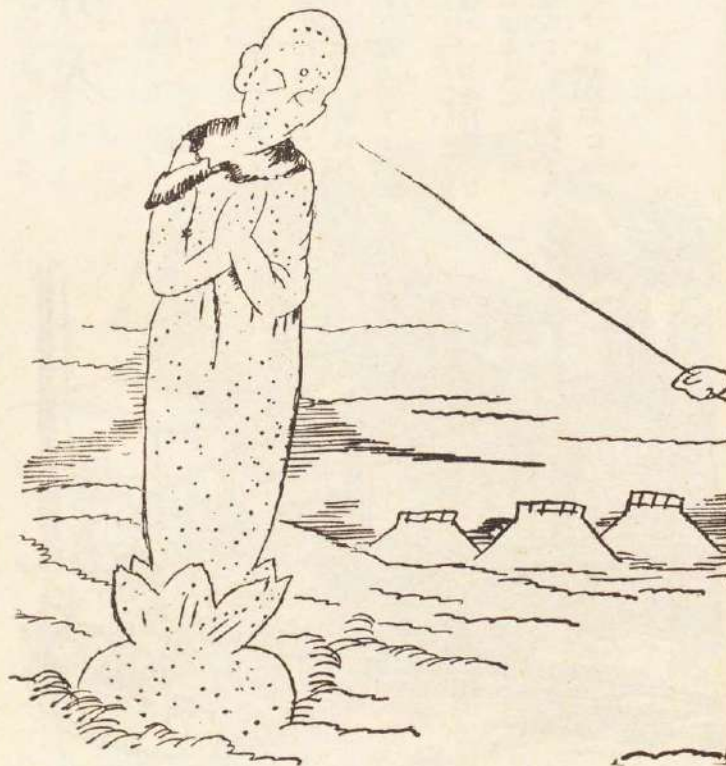
若こござる。

るねむり地藏さん

赤とんぼ

あたまのてつぺん

こつくりこ。

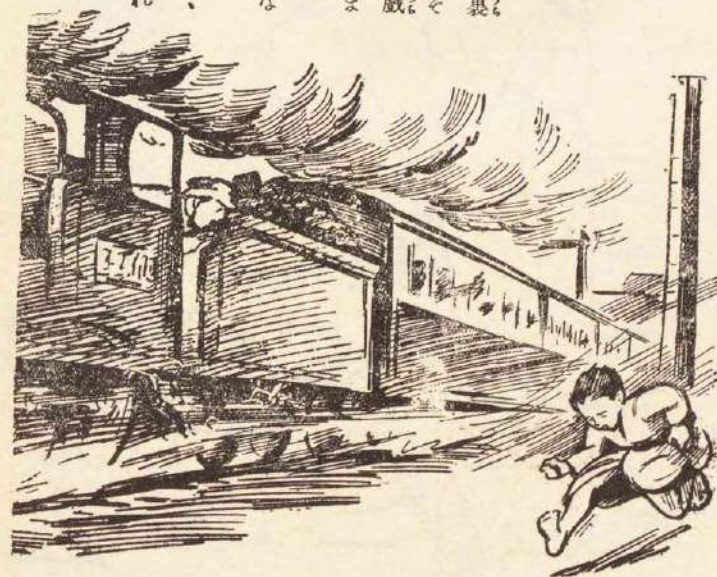


白痴の昇天

片平喜一郎

ある日、暖い陽の光がボカ／＼と輝いてゐる、裏町通りの四つ角に大勢人だかりがしてゐました。それは、一人の汚らしい風をした少年が、町の悪戯な子供達にとり圍れて、罵しられて居るのでありました。

「ねえ、みんな。この大馬鹿小僧が、お金持ちになりたいんだなんて云ふから、笑はせるよ。」と一人の子供が、その少年を罵ると、その後から、「さうだ／＼。こんな小僧つこが、お金持ちになれば、天がひつくりかへらあ。」
「乞食のくせに生意氣だ！」

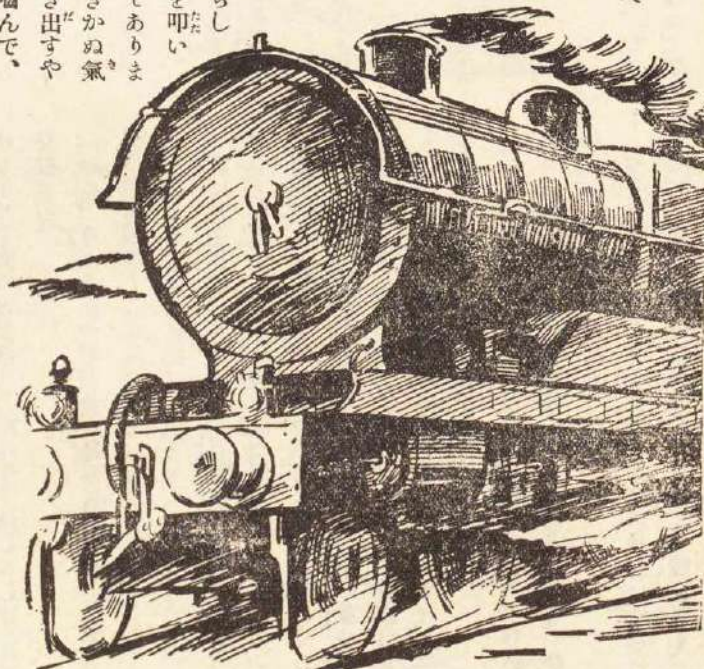


「馬鹿野郎！」

と、少年を圍んでゐる子供達は、口を揃へて、その少年を罵りたてゝゐるのです。汚らしい少年は、顔を赤らめて、棒のやうに立つたまゝ、下をむいて、黙つてをりました。

少年は、いましたがた、子供等にむかつて『俺あ、いまにお金持ちになるんだぞ。』と言つて、威張つたことから、すっかり子供等の反感をかつたのを、ひどく後悔してゐる様子でありました。

しかし、子供等は、少年の困惑つてゐるらしい顔色を見ると、みんな痛快がつて、手を叩いて囃したてながら、ますます少年を嘲るのでありました。——けれども、少年は、なか／＼のきかぬ氣な子供でありましたから、それがために泣き出すやうなことはありませんでした。少年は、唇を噛んで、



子供等の罵倒する聲を耳にしながら黙つてゐました。

が、そのうちに、子供等の中の一人が、みんなの囁きたてる聲の靜まるのをみて、少年の前に進んできて、

「やあい、お前は白痴のくせに、お金持ちになるんだなんて、生意氣だ。いつたい、どうしてお金持ちになれるか知つてゐるのか。」

と、指先で、少年の額を突つて、横柄に言ひました。すると、少年は、怒つたやうな顔をして、その子供をしろ／＼睨めながら、

「俺あ、知らなくたつて、お金持ちになるんだぞ。」と、言ひました。これを聞いて、子供等は、またどつとふきだして、少年を嘲笑ひました。

その時、

「どうしたんだ、どうしたんだ。」と、言ひながら、一人の肥つた子供が驅けて來ました。子供等は、驅

けて來た子供の方をみて、みんな、ほこらしげに口を揃へて、

「ねえ、君。こいつが、お金持ちになりたいいつて、いま泣き出すとこなんだ。」と、言ひました。

「そいつあ、面白いな。」

肥つた子供は、ちよつと、少年の顔を覗いてから、にこ／＼笑つて、子供等に向つて、

「ねえ、みんな！ からかつてやらうよ。僕いゝことを考へた。笑つちやいけないよ。」と、低い聲で言ひました。そして、肥つた子供は、いかにも眞面目らしい顔をしながら、少年の傍へ寄つていつて、少年の肩を輕くたゝいて、優しい聲で言ひました。

「ねえ、君！ 君はそんなに金持ちになりたいの？ 君、ほんとにお金持ちになりたいんなら、僕いゝことを教へてあげやうか。」

少年は、この肥つた子供の、思ひがけない優しい言葉に、驚いたやうな顔をして、暫く、疑ひ深く、

その子供を凝視してゐましたが、それが、いかにも本氣で言つたらしいことが解ると、安心したやうに、いくらか落ち付いて、



「教へて貰へたら、嬉しいな。」と、言ひました。

「そりや、わけのないことなんだ。」

肥つた子供は、ちよつと、周囲の子供等の方を覗いて、微笑つてから、唐突に言ひました。

「君は汽車ばつばを知つてゐたらう。——汽車ばつばと競争するんだよ。勝てたら、きつと、お金持ちになれるんだ。」

これを聞いて、少年は、嘘のやうな氣がしましたが、しかし、よく考へてみると、ほんとらしくも思はれました。

なる程、汽車のやうな大きなものに勝てたら、汽車よりも偉くなるわけだから、ひよつとしたらお金持ちになれるいとも限らない、と、少年は、そんなことを考へながら、

「勝てたら、君、ほんたうにお金持ちになれる？」と、念をおすやうにして、子供にたづねました。

「ほんとうさ、きつと、お金持ちになれるよ。」と、肥つた子供は、言葉に力をいれて、答へました。

少年は、子供の、この力強い言葉に躍りあがりた

い程の喜びを感じました。

お金持ちになるんだ——そんな考へが少年の頭の中に、電光のやうにひらめきました。少年は、じつとしては居られないやうな気がしました。

少年は、希望に満ちた眼を輝やかして、子供等を見まはして、言ひました。

『俺あ、すぐ、お金持ちになつて来る。』

少年は、飛ぶやうにして、急いで、其處を立ち去りました。子供等は少年の駆けていつた後姿を見て、どつと、大きな聲を出して、みんな笑ひました。

それから間もないことでありました。

少年は、停車場の入口に立つて、胸ををどらせながら、汽車の来るのをもどかしさうにして待つてゐました。

停車場には、いろいろな人達がゐました。髯のある立派な紳士だの、綺麗に着飾つた女だの、少年のやうに汚らしい風をした、男だの女だの、たくさんの人々が出たり入つたりしてゐました。

紳士は、少年に話かけられたので、驚いたやうにちよつと、顔を上げて少年を見ましたが、それが、ボロ／＼の着物をきて、髪の毛は栗の毬のやうに延びた、汚らしい少年だつたので、紳士は眉をよせて、いやな顔をしながら、見ぬふりをしてしまひました。

少年は、そんなことには気がつきませんでしたから、また、

『あの、汽車に勝つたんでせう。』と、言ひました。

すると、紳士は、火がついたやうに顔を真っ赤にして、少年を睨めつけて、

『うるさいッ、何を云ふのだ。』と、嗷鳴りました。その聲に、少年は、頭のすぐ上から、雷が落ちて来たかのやうに驚いて了つて、蒼くなつて、其處を去りました。

少年は、『あの人は、俺が、いまにも汽車に勝つてお金持ちになることを知らないから、あんなに怒つ

少年も、人々の間に交つて、停車場の中に這入りました。——この時、少年は、待合室の立派な腰掛に坐つてゐる、山高帽を冠つて、金縁の眼鏡をかけた、お金持ちらしい一人の紳士に目がつきました。少年は、その紳士を見ると、すぐ『お、あの人はきつと、汽車に勝つた人に違ひない。』と、思ひました。

——自分もいまに、汽車に勝つて、お金持ちになつたら、あの紳士のやうに、山高帽を冠つて、金縁の眼鏡をかけて、立派な腰掛に坐る身分になれる——と、少年は、そんなことを考へると、堪らなくその紳士が懐しく思はれて、話かけてみたくなりしました。

少年はツカ／＼と紳士の方へ歩いていきました。

『あの、あなたは、汽車に勝つたのでせう。』

と、少年は、紳士の前に立つて、丁寧にお辭儀をしてから、ぶつさら棒に言ひました。

たのだ。』と、心の中でそんなことを思ひました。

そして今度は別の廣い待合室の方へいきました。

少年は、其處へいくと、一番さきに、汚れた半被をきて、穴のあいた帽子を冠つた、労働者らしい男に目がつきました。少年は、その男を見た瞬間に、『おや、あの人は、汽車に負けちやつたんだな。』と思ひました。さう思ふと、その男が、なんだか氣の毒に思はれてきました。そして、その男を慰めてやりたいやうな氣になつて、少年は、その男の傍へ近寄つてきました。

『ねえ、あなたは、お氣の毒に、汽車に負けたんですね。』と、少年は、その男に言ひました。

労働者風の男は、知りもしない少年から、唐突にそんなことを言はれたので、不審さうな顔をして、少年をじろ／＼見ました。その男は、少年の言つたことがどんな意味であるかは解らなかつたやうですが、それが、男には、確かに、癪にさはつたらしい

のです。その方は、顔に青い筋を脹つて、唇をふるはしてゐました。

少年は、まさか、自分のために、男が怒つてゐるのだとは思ひませんから、もう一度、やさしく

「ほんたうに、お氣の毒です。」と言ひました。すると、男は、堪りかねたやうに、拳をふりあげて、

『馬鹿野郎奴！何が氣の毒なんだ。いゝ加減なことを拔すと承知しねえぞ。』と言つて、少年を擲らうとしました。

少年は、思ひがけない、男の劍幕にすつかり膽をつぶして、狼狽で、其處を逃げ出しました。

折角、慰めてやらうと思つたのに、そんなことになりましたから、少年は『あの人は汽車に負けて、

氣が狂れたのかもしれない。』と思ひました。少年は停車場の戸外へ出てからも、後を見ながら『氣の毒に、氣の毒に！』と、さゝやいてゐました。

そのうちに、停車場の中が、にはかにざわめきた

つてきました。まもなく汽車の發車する時刻なのでせう。さつきの山高帽の紳士も、半被の男も、みんな、乗降場の方へ行きました。

少年は『さあ、これから、お金持ちになるんだぞ。』と、口の中で言ひながら、駆け出す身がまへをしました。

汽車は、たくさんの人々を乗せて了ふと、ボーツといふ汽笛を鳴らして、靜かに動き出しました。少年は、體一つばいに力をいれて、駆け出しました。

少年は、頭の中で『勝てば山高、負ければ半被。』と絶えず、誰かさゝやいてゐるやうな氣持がしましたので、夢中になつて走りました。けれども、汽車

は、少年のことなんかは、考へてもくれませんでした。次第に速力を速めて、町を出る時には、もう、少年をすーつと遅れかして了ひました。ところが

少年は、夢中になつて、走つてゐるものですから、そんなことにはちつとも氣がつきません。汽車はい

つも自分よりすーつと遅れて、走つてゐるとばかり思ひてゐました。そして、二里も三里も走りました。

汽車は、もう、次から次へと、停車場を六つも七つも通り越して行つた頃でせう。少年は、だん／＼

少年は、汽車が行つて了つたのを知りませんから、後に汽車が走つてゐないのを見ると、もう自分は勝てたものだと思つたのです。

『あゝ、これでお金持ちにもなれるんだ。』



息がはずんで、足が重くなつてきました。少年は、もう大丈夫だらうと思つて、後を振りむいてみました。

少年は、さう思つて、走るのをやめて了つて、道傍へ腰をおろしました。

少年は、すつかり安心して了ひましたので、いま

まではりつめてゐた氣持が急にゆるんで、體に疲勞を覺えて、眠氣がしてきました。少年は、うとうとしてゐるうちに、遂には、軒をかい、其處に寝こんでしまひました。

暫らく経つて、少年が、眼を醒した時には、もう、すっかりあたりが暗くなつて、空には星が一つばい輝いてゐました。

少年は、むつくりと起きあがりました。と同時に「銀貨だ、銀貨だ。俺の銀貨があんなにたくさんある！」と、叫んで、空に手をのばして、飛びあがりました。

少年は、空一面に輝いてゐる星を見て、銀貨だと思つたのであります。一生懸命に手をのばしては飛びあがつて、星を掴もうとしました。しかし、どうしても、少年には、星を掴むことが出来ませんでした。少年は、狂つたやうになつて、道傍の大きな木に、勢ひよく上りました。

少年は、木の頂上に立つて、手をのばして、星を掴もうと、あせりました。けれども、少年には、とても星を掴むことは出来ませんでした。

「おれの銀貨！ おれの銀貨！」と、叫びながら、さかんに、手をふりあげて、星を掴もうとしてゐるのでしたが、少年は、とてもこれでは星は掴めないと思つたのでせう。木の頂上から、星をめがけて、力一つばいに飛びあがりました。

少年は、飛びあがると同時に、寒氣がして、體が軽くなつたやうに感じました。

すると、不思議にも、少年の體は、風船玉のやうに、ゆら／＼揺れながら、星の輝いてゐる空へと、昇りはじめたではありませんか。

「おれの銀貨！ おれの銀貨！」と、少年の叫ぶ聲は、だん／＼空高く響き渡りました。

少年は、空高く昇るにつれて、體が冷えて來るのを感じました。そして、少年は、星を一つ掴むこと

いて來ました。

その晩、夜が更けるに従つて、だん／＼風が吹いて來て、仕舞ひには、大暴風がやつて來ました。身を切るやうな風が吹いて、雷は破れるやうな聲で轟き、稻妻は盛んに青い火花を散らして、一晩中、大荒れに荒れ狂ひました。

そして、暴風が静まつた、翌る朝のこと、道傍の木の下に人だかりがして、人々はお互に、何かひそひそと語り合つて居ました。それは、哀れな白痴の少年の死骸をとり圍んで、少年の死について噂をしてゐるのであります。

しかし、人々の中には、この白痴の少年が、汽車とかけつこをして、へと／＼に疲れてそこに寝こんだまゝ、昨夜の暴風に吹きつけられて、寒さと、疲れのために、とう／＼こゝえて死んで了つたと云ふことは、誰一人として、知る人はありませんでした。

(をばり)

が出來た時には、體が半分も冷えきつてゐることを知りませんでした。しかし、少年は、そんなことは、なんとも思ひませんでした。少年は、手あたり次第に星を掴んで、懷につめ込みました。

空は、だん／＼星の数が減つて、薄闇になつて來ました。少年は、星の重さで、體が重くなつて、それに、體が次第に氷のやうに冷めなくなつて來たために、體の自由がきなくなつてきました。それでも少年は、身をもがきながら星を掴むことをやめませんでした。

たうとう、西の空に蒼白く輝いてゐる星を最後にみんな、とり盡した時には、少年の體は、星の重さに堪へかねて、すん／＼下に向けて落ちはじめました。「おれの銀貨！ おれの銀貨！」と、少年の叫ぶ聲は、うめくやうに、靜かな夜空に、物凄く響き渡りました。星のない空は、墨汁を流したやうに眞つ暗らになつて、北の方から、さら／＼と、冷い風が吹

ジャンヌダークの最後

津谷 孝吉



(四) ミュウズ河畔

「ビエトルや、ビエトルや。」
糸を紡ぎながらジャンヌは、不
圖その目を移しました。「ビエトル
は、何處にあるの？」

「あゝ、こゝだよ、姉さん。」

次の部屋から聲がして、ジャン
ヌの側に出て来たのは、弟のビエ
トルでした。

「ビエトル、村にはやつぱりイギ
リスの兵隊が、たくさんゐて？」

「あゝ、多勢ゐるよ。皆悪い目を
して、通る人を睨んでるよ。」

ヴオラルが悲壯な最後を遂げ
てから、早くも一年の月日が経つ
て、ジャンヌは十七となりました。
けれどもその一年の間に、イギリ
スの兵隊はだん／＼とドムレミイ
の村に入つて、音に聞えたミュウ
ズの河畔も、今ではすっかりイギ
リス軍のために、奪はれてしまつ
たのでした。そればかりではなか
つた。フランスの王様も有つて無

いと同じで、イギリスの王様が
フランスの政治をするやうにさへ
なつたのです。

それを思ふたびジャンヌの胸に
は、たとへ方ない嘆きが迫つて來
て、その心は来る日も／＼、フラ
ンスの國運を案じるばかりであ
りました。

「ビエトル、散歩に行かうか？」
糸を巻きながらジャンヌは言ひ
ました。

「あゝ、行かうよ。」

「何處へ行かう？ ミュウズ河の
川縁へ行つて、鬼ごつこでもし
うか？」

ジャンヌのかう言つたのは外で
もないが、その邊りへ行つて、ひ
そかにイギリス軍の様子を知りた

かつたからでした。

「それぢや、歌を唄ひながら行き
ませう。」

ジャンヌがビエトルの手を引い
て村へ出ると、彼方此方にはイギ
リス兵が厳しく立つてゐて、歩い
て行く二人の姿を、時々咎めま
した。ジャンヌは少しでも油斷を
せざるために、わざと美しい聲で
歌を唄ひながら、兵士たちの間を
歩いて行きました。やつとミュウ
ズの河岸に着いた時、尙も同じそ
の聲で歌を口ずさみながら、河邊
の草むらにそつと腰を降したので
した。

フランスの敗北を知らないか
のやうに、さら／＼と流れてゐる
河の面を見た時、ジャンヌの唄聲

ち、いつか嘆きに慄へてゐまし
た。その目で不圖向ふ岸を眺める
と、そこには二三人の少年たち
が遊んでをりました。だが、微か
に聞えて来るその少年たちの語る
言葉は、みんなイギリ／＼の言葉で
した。

向ふ岸にあるマクセイの村も、
いつの間にかイギリスの領分とな
つて、本國から移住して来る人さ
へもありました。今、遊び戯れて
ゐるイギリスの少年たちを見ると
ジャンヌの胸にはフランスの國を
思ふ暖い心が、轟々とこみ上げて
来るのでした。

「姉さん、リラの花が咲いてゐる
よ。」

「まあ、さう。」

「摘んで行つて、カタリイヌ姉さんにおあげしよう。」

ビエトルがさう言つて、美しい花々を摘み始めた時、俄かに向ふ岸から石が飛んで來ました。

「あッ、危い！」

と思はずジャンヌが言つた時、「わッ！」とビエトルは叫んで、草むらの上に倒れてしまつたのでした。その時向方の岸からは「イギリス萬歳！」といふ少年たちの聲が聞えて來ました。

「おへ、ビエトル、しつかりおし。何でもないから。」

ビエトルの額からは血が流れてジャンヌに抱かれたその身體は、早ぐつたりとなつてゐました。ジャンヌはスカートをびり／＼と、

引き裂いて、ビエトルの額をしつかりと縛つたのでした。

「姉さん……」とビエトルは恨めし氣に向ふ岸を眺めました。「イギリスの馬鹿！イギリスの馬鹿！」

「ビエトル、お前の敵も、きつとこの姉さんが打つてあげるよ。痛いだらうが泣いちゃ駄目だ。フランス男兒が泣いては駄目だ。」

「僕泣いたりなんかしない。イギリスの馬鹿！イギリスの馬鹿！」無念の目をあげてビエトルは、再びさう言ひました。弟を抱いたジャンヌがあるお寺の前にと道をつく人誰か、彼女を誇しさに眺めるのでした。不圖邊りを見廻すと、そこにはイギリス兵の姿も見えませんでした

「皆さん！」ジャンヌは道ゆく人たちに向つて叫びました。「フランスの國は、イギリスのために、すつかり蹂躪られてしまひました。こんな小さい子供にまで、哀しい思ひをさせねばならないとは、まあ何といふ無念なことせう。私たちは一刻も早く、國の耻辱を雪がねばなりません……」

心からジャンヌは告げたけれど村人たちは「はゝゝゝ、又氣がひが吹鳴つてゐるよ。」と笑ひながら、誰もがその側を行き過ぎてしまひました。

「あゝ……」と深い吐息をついたジャンヌはそのまゝ力なくお寺の前を去りました。今はもう、人の力を當にし

てゐる時ではない。さうだ！たとへ女の身ではあつても、行くところまで行かう！フランスの爲めに倒れるまで！

(五) 故郷よさらば

「ジャンヌよ、それぢやお前は、どうしても行くといふのだな？」

氣づかひしげに言ふ父の言葉を聞くと、さすがにジャンヌは哀しくはなつたが、今はフランス存亡の時です。

「お父さま、私はあります。」

「さうか。それはどの決心がある



なら、わしはもう止めぬ。その代りに飽くまで祖國のために盡すの

ぢや。」

「はい……ではお父さま。」

「ジャンヌよ……」

を投げました。大勢の兄弟弟たちもその圍りに集つて、ジャンヌにお別れの言葉を送つたのでした。「ジャンヌ姉さん、フランスのために盡しておくれ。」

「ビエトル。きつと姉さんは、お國のために力をつくして、飽くまでもイギリス兵と戦つて見せる。」

ジャンヌは住みなれた家を立ち去つたのでした。あゝ思へば十七年の間、ジャンヌを育ててくれたこのドムレミイの村よ。今、音もなく流れて行くミユズ河の面を眺めた時、ジャンヌの心はどんなであつたでせう……

ヴォークリュウルの市には、フランス軍の守備官ボオドリクウルが屯してをりました。目ざすは遠

いこの都です。——ジャンヌは、只一人日に夜に、さびしい旅を續けて行きました。

苦しい旅を終つて、やうやくそこに着いたジャンヌは、ボオドリクウル大將の露營へと進んで行きました。一人の番兵が鋭くジャンヌを推何しましたが、彼女は心をこめて、ボオドリクウルへの面會を求めました。やがて銃剣を捧げた二人の兵士に伴はれて守備官の面前に行くと、ボオドリクウル大將は聲を高めて尋ねました。

「お前は何者だ!?」
「はい。私はドムレミイに住んでをります、ジャンヌ・ダークと申す者でございます。」

「ジャンヌ・ダーク……。さうし

て何の用で來たのだ?」

「はい……」ジャンヌは熱情に燃える目をあげて「閣下、今わが國は危急の時でございます。私は不束ながら、このフランスを救ふためにまゐつたのでございます。」
「何……」とボオドリクウルはからりと笑つて「何を血迷うてゐるのぢや、わづか十六や七の乙女に、どうしてこのフランスが救へるといふのか?」

「いえ、私には強い決心がございます。國を愛ふる私の心を、閣下、どうかお信じ下さいまし。私は神を信じてをります。神は私を守つてゐられます。」
「してお前は、どうしてこの國を救はうと言ふのだ?」

「たとひ百人でも二百人でも、どうか私に兵をお與へ下さいまし。」
「ふむ、お前は女的身で戦争に出るといふのだな?」

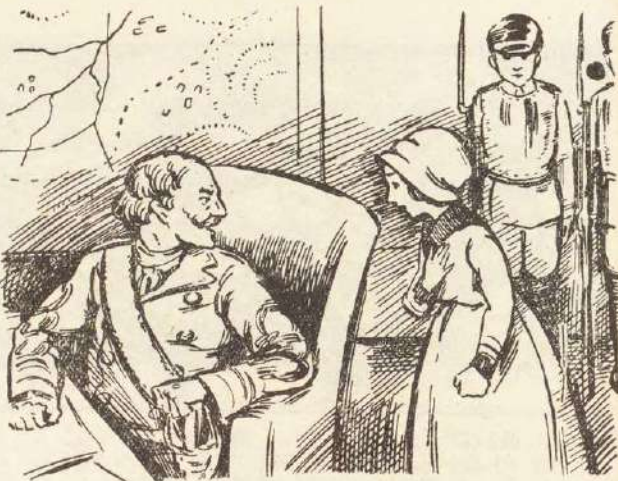
「はい。」

健氣なジャンヌの顔を見つめてゐたボオドリクウルは、側の兵士に向つて命令を下しました。

「お前たち、兎も角もこの娘を、シノンの市へつれて行け。」

「はッ。」

と答へた二人の兵士は、やがてジャンヌの側につき添へて、シノンの市へと赴いたのであります。そこには時の皇帝シャルル七世が荒れ果てた宮殿にお住ひになつてをりました。十七の乙女ジャンヌ・ダークは、祖國を思ふ正義に燃



市では「神の子」としてジャンヌを讃へ、ほんの僅かの兵ではあつたが、彼女は胸に必勝を期したのであります。

(六) オルレアンへ

ロアル河の上流にあるオルレアンの市、それは今イギリス軍に、すっかりと取り圍まれてをりました。オルレアンの都が英軍の手に落ちたならばフランスはやがて滅亡の衰しを見なければならぬ。——それほどこの都は大切でした。しかもイギリス軍勢は日に日とその勢を増して、

今やオルレアンの運命は、さながら風前の灯でした。
ちやうどその折も折、ボアチエイの町ではオルレアンへの援兵が着々とその準備を急いでゐたのです。ほんの數へるばかりの兵ではあつたけれど、その意氣は曾つてのフランス軍には見られないほどでした。

あゝ時に、千四百二十九年四月、東の空が灰白く明けようとした時、ぼーつ！と響く角笛の音は、突然邊りの静けさを破つたのでした。「オルレアンの危機を救へ！フランスの國辱を雪げ！」

一聲高く叫んだのは、白銀いろの鎧を着た一人の大將でした。鼠色の大きな馬に堂々と跨がり、そ



の手にほては輝く一挺の劔。それこそ十七の乙女、ジャンヌ・ダークその人の姿でありました。今はもはやドムレミイの村にゐた頃の彼女とは、その言葉もその姿も、すつかりと見違へるばかりでした。「一同の者!」

「おゝ……」と数多の兵士は、一聲に答へました。

「死力を盡して、オルレアンを圍みを解けよ。」

「おゝ……」と再び應への聲。

「進め、オルレアンへ!」

再び轟々と響く角笛の音。一隊は駒の蹄も高らかに、隊伍堂々足並そろへ、かつ、かつ、かつ、かつ、……オルレアンへと進軍して行つたのでした。

七二

何といふ勇ましいジャンヌの姿でせう。朝あけの空は一點の曇りもなく、輝く太陽は三色旗を強く照して、ひら／＼と微風に靡いてをりました。さうして突進して行くこと約三十哩。遙かの地平線には黒い煙のやうな塊が見えました「オルレアンだ。オルレアンだ。」誰言ふとなく言つたその聲は、一團となつて「わあッ」とひびきました。早くもそれを知つたイギリス軍が、慌てゝ戦闘準備をしたのでした。が、ジャンヌの戦略は只一筋の突進にありました。

「進め! 進め!」

劔を振つて士氣を鼓舞するジャンヌの聲。一隊は「うおッ!」とばかり、英軍を目掛けて突進した



のでした。

「援兵だ、援兵だ。」

イギリス軍に包まれた味方の一隊も、俄かに勇氣百倍して「進め、辱を雪げ、うおッ!」とばかり總攻撃となつたのでした。

「フランス軍の援兵だ。やつつけろ!」

イギリス軍の方では、まさかに援兵が來るとは思つてゐませんから、すつかりと狼狽してしまひました。その上に常になく、フランス軍の突撃が激しかつたので、すつかり面喰つて、ばたり／＼ばたばた、見る／＼うちにオルレアンの市は、イギリス軍の死屍の山となりました。

明日の運命を氣づかはれたオル

レアンの市も、ほんの一時間か二時間のうちに、勝利の角笛が鳴り渡りました。

今、フランスの軍勢は、屍の山をなす戦ひのあとに、秩序も止しく整列してゐました。さうしてその前を馬に跨がつて閱兵してゐるのは、ジャンヌ・ダークです。その雄々しい女傑の姿よ。味方の大將はじめ数多の下士卒は、誰が唱へ出したか「ジャンヌ・ダーク萬歳!」と叫び「萬歳!」の聲はオルレアンの空も崩れよと響き渡りました。

長い間、イギリスの虐政の下にあつたフランスの國は、ジャンヌ・ダークの力によつて再び明るみに歸ることになりました。

それから間もなくでした。再びシャルル七世の面前を訪れたジャンヌは、心から一つのお願ひをしました。それはシャルル七世がイギリス王の壓迫から離れて、一日も早く戴冠式を行はれたいとのお願いでありました。

やがてジャンヌは王様をレンスの市に御案内して、音に聞えたノートル・ダムの大伽藍で、目出たく戴冠式をあげることとなりました。

王様のお側で、ジャンヌは長い儀式の旗を持つて、お護りをしてゐました。得も言はれぬ美しい樂の音が、廣い大きなお堂に充ちて、金銀珠玉に輝く王冠が、皇帝のお頭に乘らせられた時、感極つ

て泣きぐづれたのは、ジャンヌその人でした。

今、フランスの國には、静かな平和が訪れました。さうしてジャンヌは誰言ふとなく『オルレアンの少女』と名づけられて、その名を知らない者ともなくなりまして。あゝ、あのドムレミイの小さな村に育つたこのジャンヌが、こんなにも大きな功勞を現はさうとは！だが、ジャンヌはこのまゝに平和な一生を過したのでせうか？果してイギリスはフランス侵略の手を引いたのでせうか？

(七)あゝ千四百三十一年

ノートルダムの大宮殿で、シャルル七世が戴冠式をお舉げになつ

てからは、フランスの國もだんだんと回復して來ました。しかしながら國の中には、まだ彼方此方にイギリスの軍勢が屯して、中々に退きあげようとはしないのでした。ジャンヌは一刻も早くその軍勢を追ひ拂はうと、毎日々々作戰計劃に餘念がなかつたのです。

ところが、シャルル王様に仕へてゐる多くの御家來たちは、ジャンヌが心から英軍の征伐を計つても、一向に取り上げる様子もなかつたのでした。心から國を思ふジャンヌ。そのジャンヌの心さへ知らずに、王の御家來たちは、そろそろジャンヌの功名を嫉み始めたのです。

……と、その時も時、オルレア

ンに近いコンピエーヌ城に向つていつの間にも用意をしたのかイギリスの軍隊が一所に集り、刻一刻と

地に墜ちるでございませう』ジャンヌは最早鎧に身を堅め、溢れる誠をもつかう言ひました

は御家來の一人がジャンヌを危地に陥入れるために、こんなことを目論んだのです。それとも知らぬ忠義なジャンヌは、ほんの僅かな兵士を引きつれて、コンピエーヌ城へ向ふ



進みつゝあることを聞きました。『陛下、どうか私に軍勢をお與へ下さいまし。……コンピエーヌ城を占領されましたなら、折角取返したフランスの威力も、遂には

『しかし、今フランスでは資金がないのだ。ジャンヌよ、たとへ僅かの兵士であつても、お前の力で戦へないことはあるまい。』王様のお答はかうでした。これ

早くもたくさんイギリス軍は、わあッとはかりにその城の周りを包圍したのでした。おゝ、そのイギリス軍の數、それはコンピエーヌ城内に守備する

ジャンヌの軍より、何千倍何萬倍の數ではないか！

一日二日三日と日の経つにつれ、味方は刻一刻と斃れ、ほんの少數へるばかりになつてしまひました。今はこれまで！ 月もない夜更、數へるばかりの兵と共に城外に出たのはジャンヌでした。

と、ジャンヌだ！ といふ叫び聲と共に、わあつと十重二十重に圍んだのは、大兵を鼻にかけた敵軍でした！

『何をッ、イギリスの軍勢！ いざ、ジャンヌを見よ、ジャンヌを見よ！』

サツとばかりに刀を揮ふ女丈夫の姿こそ、あゝ何に譬へませう。月はないけれど、バツバツと閃く

劍の光が、しばしは續けさまにチャリ／＼チャリ／＼と鳴つてゐたが、やがて闌ふこと三十分、突然ばつたりとその音の止んだのは、何の徴示でありませう？

あゝジャンヌ、一世を動かしたジャンヌ、彼女は敵兵のために手を取られ、さうして暗い一室に閉ぢ込められたのでした。

ジャンヌが英軍に捕はれた時、王の家來たちは皆一様に、ジャンヌを悪く言ひました。たとへ僅かの兵でも勝つて見せると言ひながら、王を偽つた妖女だと言ひました。

さうしてジャンヌは本國フランスの法律によつて、刑場に引かれることゝなつたのです。

七六
千四百三十一年五月二十一日。
かあん！ かあん！ と刑場の鐘は鳴り渡りました。

『おゝ……』

とジャンヌは十字架に縛られながら、不圖故郷ドムレミイを目に浮べました。

父よ、母よ、ビエトルよ……今頃はどうしてあよう。

その時、焰々と燃え上る火は、ジャンヌの身をすつかりと蔽つたのでした。

『フランス萬歳……フランス萬歳……』

そのジャンヌの聲も、だん／＼と微かになり、やがて不圖聞えなくなりしました。

(をばり)

裸體の軍醫

久米 絃 一

一、桑の葉摺れ

日露戦争當時、我が軍が、支那の九連城と云ふ所に滯陣中の出来事です。



ある聯隊に、山田と云ふ軍醫がありました。或時この山田軍醫は、二三名の兵士を連れて、附近の農家に、食糧を果めに行きました。軍醫が食糧の徴發に行くなんて可笑しな話ですが、この山田と云

ふ人は非常に支那語が巧みだったので、何かと便利な點があると思つたのでせう。

其日の暮れ方、軍醫等は、一軒の大きな農家に着いて、其處で、豚一匹、鶏二十羽、酒二樽を廉い價で買ひ求める事が出来ました。

一行がそれを車に積んで、歸らうとした時、軍醫はフト、傍の高梁畑の中で、一人の男が鰐風呂（支那の田舎では、土甕にお湯を沸して這入るのです）を焚き附けてゐるのを見出しました。

軍醫は江戸ッ子だけに、お風呂が大好きでした。上陸以來一度も入浴した事が無いので、穢い話ですが、虱が襟首を上つたり、下りたりしてゐる程なのです。軍醫が、

『這入りたいな。』と思つたのも無理はありません。早速、家の者に掛合ふと、しぶ／＼ながら承知して呉れました。軍醫は、從卒一人を残して、後の者は皆一足先に中隊に歸らせました。そして自分は裸に

なつて、風呂場へ行きました。

恰度いゝ湯加減でした。すつぱりと首までお湯に浸つて、あたりの黍畑の、さら／＼と云ふ葉摺れの音を聞いてゐると、軍醫には遠い故郷の事が思ひ出されて來ました。

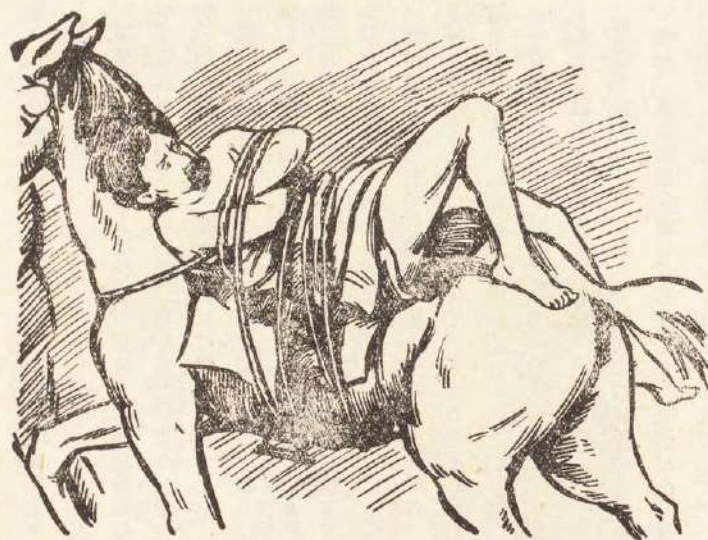
此時軍醫は、お風呂に這入れた事だけで、満足してゐればよかつたのです。

處が軍醫は、お風呂から出て、又あの汚いシャツを着ねばならないと思ふと、ガツカリしました。其處で從卒を呼んで、

『オイ、從卒。何處かの家へ行つて、どんなものでもいいから、シャツを一つ分けて貰つて來て呉れ。』と云ひ付けました。從卒は畏まつて、家の方へ引歸して行きました。

軍醫は又お湯の中につかつて、のんびりと詩の文句などを考へて居りました。

と、其處へ、ガタリ、ガタリと云ふ、風呂場の方へ



段々と近寄つて來る靴音が聞えて參りました。

二、失敗つた！

軍醫は、從卒が歸つて來たのだと思つて、『從卒か？』と聲をかけましたが、返事がありません。

も一度『從卒か。』と大聲で呼びましたが、やはり返事がありません。

『オヤ。』と思つて腰を上げようとした途端、ニユツと風呂甕の中を覗き込んだ顔は、まアどうでせう。鬚のもしや／＼生えた、眼の青い敵兵の顔だつたのです！

したも二人。帽子を右下りに冠つて、手には銃劍を持つた雲突くばかりの大男でした。

一人の敵兵は、キツと軍醫の顔を見下ろして居ましたが、突然支那語で、

『日本人か。支那人か？』と、訊ねました。

軍醫は答へに窮して、マゴ／＼してゐると、いき

なり一人の露兵が手を延ばして、軍醫の腕首をぐつと掴みました。

軍醫は、もう此の上は仕方がない、死物狂ひになつて暴れてやらうと思つて、襖から飛び出るが早いか、腕を掴んだ奴の喉を力任せに締めつけました。處が其の間に、もう一人の露兵は、銃剣を取りなほして軍醫の膝を突刺しました。そして腕き廻るのを二人がかりで押へ附けて、到頭、馬を繋ぐ綱でぐるぐる巻きにしてしまひました。

從卒は何處迄行つたのか、影も形も見えません。軍醫は裸のまゝ馬に乗せられて、もう日の暮れた山道を、どん／＼敵地の方へ連れて行かれました。

一時間も來たかと思はるゝ頃、馬は一つの、かなり大きな農家の前で停りました。

其處で軍醫は下ろされて、以前の百姓屋から持つて來た、軍醫の服を着せられました。軍醫はもう覺悟を決めて、少しもジタバタ騒ぎませんでした。

處が暫くして、家の中から上官らしい兵士が出て來て、軍醫の身體検査を始めた時、ポケットの中から聴診器が出て來たのです。

『お前は軍醫か？』と、その兵士は訊ねました。

『さうだ。』

すると彼等は、何かヒツ／＼相談し合つてゐましたが、やがて軍醫を連れて、地下室の様な所へ下りて行きました。

その室には一人の立派な將校が、何處か傷でも受けたと見え、寢臺に横はつて、如何にも苦しうな様子をしておりました。寢臺の傍には、この將校の奥さんらしい、美しい支那婦人が立つてゐましたが、軍醫の顔を見ると、何かしらハツと驚いたやうでした。

間もなく先刻の、身體検査をした兵士がやつて來て、丁寧な支那語で、

『お前、軍醫なら、この將校の傷を癒して貰ひたい。』

と頼みました。

軍醫は心の中で思ひました。

『此奴は憎い敵

の將校である。

併し矢張り彼と

ても祖國の爲に

勇敢に戦つて傷

を受けたのだ。

負傷した者には

敵味方なく、治

療してやるのが

軍醫の務だ。』

かう思つたも

のですから軍醫

は承知の旨を答

へて、治療に取りかゝりました。將校の傷は、太股に

弾の破片が這入つた儘、化膿してゐるのです。



早速破片を抜取つて、後を丁寧に繃帯してやると將校は痛みが薄らいだのか、間もなく深い眠りに入

つて行きました。

それを見た夫人や

兵士達はどんなに

喜こんだ事でせう

三、夫人の涙

軍醫は地下室の

一つに監禁せられ

ました。食事や、

寢具類は鄭重なも

のでしたが、どう

も、何時まで経つ

ても、放還される

様子が無いのです。と云ふのは、此の家に居る將卒

達は、何か特別任務で秘密に出張を命ぜられて居る

もので、もし今、軍醫を日本軍へ歸したら、自分達の仕事は危くなると思つたのでせう。

處が或日の事、番兵の云ふ所を聞くと、どうやら軍醫は、近い内に捕虜として、敵の本國へ送られる模様なのです。軍醫はもうこれまでだと思ひました。捕虜として生恥を擡ぐより、一そ、暴れるだけ暴れて、此處を逃げだしてやらう、と決心しました。

或夕方、何時もの通り夕飯を運んで来る時刻を見計つて、軍醫は、部屋にある大きな椅子をしつかりと握りしめて、今に兵士が這入つて來たら、ただ一打に打ちのめしてやらうと待構へてゐました。

やがて、コトリ／＼と室に近づいて来る靴音がして來ました。處がその靴音が、何時もの様に荒々しくなく如何にも柔しいのです。オヤ、と思つて、振り上げた椅子を下ろした途端、扉を開けて這入つて來たのは、番兵ではなく、例の支那婦人でした。

婦人は手に大きなお鍋を下げてゐました。その鍋

を軍醫の前へ置いて、蓋を取ると、まアどうでせう。中から出て來たのは、婦人用の汚い／＼支那服だつたのです。婦人は、呆れてボカンと立つてゐる軍醫に、その服を差出して、

『さ、これを着て直ぐ此處をお逃げなさい。』と云ひました。

軍醫は益々呆れかへつてゐますと、婦人は、『一體なせ私が貴方を、此處からお逃がせるか、その譯をお話しませう。』

私には一人の父親があつたのですが、四五年前に日本へ出稼ぎに行つたまゝ、未だに何の消息もないのです。處が、私が貴方にお目にかゝつた時、驚いた事には、貴方のお顔が私の父親とそっくりなのです。ええ、全くよく似てゐるのです。私は、オヤ、お父さんぢやないかしら、と一時は思つた位でした。『夫人はかう云つて、ボケツトから一枚の支那人の寫眞を取り出して軍醫に示しました。』

出してしまひました。

『おや／＼、随分ヒゲだらけなお婆さんだな。』

金東紅も可笑しさに笑ひながら、鋏を取り出して、長く伸びた軍醫の顎鬚を切り落しました。

『さア、では出かけませう。貴方はそのお鍋を提げていらつしやい。そして若し番兵が、『誰か?』と訊ねたら、貴方は、『蘭でございます。今晩は、御苦勞様』とだけ云つて、どん／＼歩いてゐらつしやい。餘計な事を仰しやつてはいけませんよ。さア、參りませう。』金東紅はかう云つて、軍醫と一緒に部屋を出て、戸口の方へ歩いて行きました。

戸口には一人の番兵が、銃剣を持つて、半身月の光りに照されながら、ちい／＼と身動きもせずに突立つてゐました。(つゝ)

(其後、軍醫はどうなるでせう。無事に逃げる事が出来るでせうか。次號をお待ち下さい。)

『これが父親です。ネ、よく似てゐるでせう……で貴方に一つお願ひしたい事は、貴方が日本へ歸りになつたら、是非この父親をお探し下さつて、支那へ歸るやうにと仰しやつて下さいませ。娘の金東紅が、お父さまのお歸りを毎日待つてゐると申して下さいませ。』夫人はかう云つて、軍醫に寫眞を渡しました。軍醫はその話を聞き、また金東紅の眼に浮ぶ涙を見ては、どうしても聴いてやらねばなりませんでした。

『よろしい。承知しました。キットお探して上げませう。』軍醫がかう云ひますと、金東紅は見る／＼顔を輝やかして悦びました。

其處で軍醫は、愈々此處を逃げ出す決心をして、今持つて來て呉れた支那服に着かへました。何しろ人一倍身體の大きな軍醫が、小さな婦人服を着たものですから、その恰好と云つたらありません。軍醫は壁の鏡に映る、自分の姿を見て、思はずブツと吹



幼年詩

若山牧水選

チャボの卵(賞)

香川県三溪
小學校尋五 漆原 純子

チャボが卵
うみました
チャボのからだのやうな
かはいのをうみました
評 ほんとにすなほなお歌で音
業も調子もよく整つてゐま
す。(牧水)

目白(賞)

福岡縣下
妻校尋三 中村 重利

みぞばしり

香川県上校尋四 吉原ヒサエ

廣いたんばであそんでる
みぞばしり
ちよつととんでは
またおりて
ちよつととんでは
またおりて
たのしさうに遊んでる
評 みぞばしりとばせきれいの
事かナ。(牧水)

朝日

山形縣樺
澤校尋六 石澤ウメヨ

朝日が見えても
山はかすんで
雪が降る

きれいな目白が
かごに入れられて
ないてゐる

外から一匹の目白が
とんで来て
一しよにないた
評 これはまたきれいな寫生で
す。(牧水)

床屋(賞)

東京市外
下目黒 伊藤 駿二

床屋のおぢさん
今刈つてあげてる人の
頭にまだ毛が二本
残つてるのが
わかんないのかなア
評 いつも君の面を面白く見てゐ
ました。(牧水)

さねの音

福岡縣下
妻校尋三 塚本マツエ

煙

山形縣瀧
館校尋五 齋藤 正雄

夕はんを
たくけむり
空一ぱいに
うごいて居る

冬の天氣

松本小學
校尋六 吉澤 正治

青い空は
何處も彼所も
晴れて居る
僕と兄さんの
足音が楽しさうに
ほか／＼と音たてる

子供

山形縣樺
澤校尋六 龜岡 しげ

とん／＼ひびくさねの音
其の音とん／＼
どこへ行く
評 とん／＼とんで矢部川へ。
(牧水)

冬

秋田縣
新屋町 今川 キヨ

冬になつたら
木の葉がおちて
その上に雪がつもつた
評 實にかんたんで實に面白
い。(牧水)

雀

甲府市佐
度町十三 豊島 泰

雀がたいへん
さわぐ
明日は雪か
評 らしいぞ。(牧水)

小さな子供が
かはいい聲で
うたをうたつて



こちらにくる

八

お山

山形縣樺
澤校尋六 龜岡 しげ

お山に雪がたまつた
またふつてくるぞ
はやくかへろ
はやくかへろ
評 これもかんたんでゐてなが
なが面白。(牧水)

學校の庭

山形縣樺
澤校尋六 吉田 實

こしのまがつた
おぢさんが
つるをたのみに
何時までも
生徒のあそびを
見てゐます
評 あたゝかいひなたでせう。
(牧水)

朝

香川県上校尋五 村井銀次郎

姉さんが
いそがしさうに
妹のさうしを
とちてゐた

新しい子守

千葉縣平
岡校高二 佐久間登里子

暮れ方
妹をおぶつて
新道に出たら
新しい子守を
真中にして
子守がみんな
話してた

何となく部屋の中が薄暗くなつたので、不圖窓の方を眺めると、もうだん／＼と夕暮近くなつて、鐵棒の入つた高い窓の外には、夕焼雲が紅くのぞいてゐました。……と、その目を何気なく壁の邊りに移すと、いつの間にか五寸ばかり開いてゐてそこからは二つの目が覗いてゐます。

「あッ……」

「おい／＼、静かにしろ！」

言はれたのでちつとそこを見ると、一人の見知らぬ男が、恐ろしい目で睨んでゐたのでした。

「誰だ！ 誰だ！」

恐ろしさにたち／＼としながら、逸雄は思はず大きな聲で言ひました。

「誰だつていゝさ。それよりは此れでも食つて、腹をこさへろよ。」

見ると壁の間からは、その人の黄色い大きな手がニユツと出て、肉饅頭を三つ四つ掌に乗せてゐます。逸雄は透かさずその壁の間から方向を見ましたが、その方向はまるで眞暗な闇のやうでした。

「要らないよ！」

「要らない？ どうとも御勝手だが、腹が減つたら食へよ。こゝへ置いてくぞ。」

「餓死したつて、そんなもの食はない。」

もうその時、びしやツと壁は閉ぢられて、床の上には今の肉饅頭が三つ、ころ／＼と轉んでゐるだけでした。さうして部屋の中は、

八月

又元の深い静けさに歸りました。いつまでも／＼、その深い静けさが、部屋の内にも外にもつづいて行きました。夜はいよ／＼更けて行く一方でした。窓から洩れる夕映も、いつの昔にか消え果て、今は青白い月かげが、ほんのほんやりと照つてゐるのです。どうすれば此處を逃れることが出来るのでせう？ 珊瑚を取り戻すことよりも何よりも、先づこの部屋から逃れることを考へねばなりません。けれどもさつき幾度となく開いた壁も、満身の力を罩めて押しかかうとしても、もとよりピタとも動きません。又幾度となく窓に攀ち登つて、鐵棒を力一杯挫かうとしても、何の效力もありません



でした。

ぐつたりと倒れた逸雄は、只恨めし氣に、窓から洩れる月の光を見つめてゐました。だん／＼とお腹は空いて来るが、さつきの人の置いて行つた肉饅頭などを、口に入れる氣にもなりませんでした。

3 下水道

さうしては一日過ぎ、また二日過ぎ、恰度逸雄がこゝに來てから早くも五日の日が経つてしまひました。その間空腹は刻一刻と迫つて、もう一足歩いてもふら／＼と目がくらむやうでした。

と、恰度五日目の夕方でした。力ない身を起しながら不圖壁の側を見ると、今までは少しも氣がつか

かなかつたが、何かしらその一隅には、圓い形に壁が盛り上つてをります。

『おや、これは可笑しいぞ。』

一寸見ると何でもないやうですが、透して見ると確かにそのところだけは、まん圓く盛り上つて、その下に何かしら秘されてゐるやうにさへ見えるのです。

そつと逸雄は、こし／＼と爪で擦つて見ました。だん／＼力を單めて行くと、ばらばら！ばらばら！とほんの少しづつではあるけれども、その邊りの壁土が粉になつて落ちて來ました。向も一心になつて擦つてゆくと、刻一刻と壁土は剝がれて、不圖そこに現れたのは、ほんの小さい白いボタン

でした。

お、それこそは、何かしらそこに仕掛があるに違ひない。何の仕掛かわからないが、もうかうなれば手當り次第に危険を冒して、萬一の僥倖を願ふより仕方がない。

『さうだ！』

思ひ切つて逸雄は、その白いボタンを、ち／＼を押しました。その一刹那、すゞ／＼／＼の四方から壁が迫つて來て、その中に押し潰されてしまふのではあるまいか。それとも、それを押した瞬間、床下から刻々に水でも湧いて來てその中に溺れてしまふのではあるまいか。

と、嬉しや！すーッ！そこ

の壁が左右に音もなく開いた。恰度人間一人が出れるくらゐの隙間が出來ました。あッ、しめた！

逸雄は思はず身を躍らしてそこから出ると、眞暗がりの中を手さぐりながら、一足々と歩いて行つたのでした。

何十間歩いたでせうか。行くに従つて、何となく泥臭い匂ひが鼻をついて來ました。すると、ち／＼、ち／＼、と水の音が聞えます。又氣がつくと、足許にはいつの間にか、生ぬるい水が流れてゐます。恰度その時でした。ちやぶ／＼と水の中を歩いて行く逸雄が、不圖上を見ると、そこからはボーッと青白い光が洩れて來ました。しかも、その仄かな明るい光は、つい目の

前にある細い鐵の梯子を照してゐます。

『ふん、これは下水道だな。』

暗がりの中に思はず囁いた逸雄が、そのまゝ鐵の梯子を一つ一つ昇つて行くと、ごつんと頭に障つたものがある。ぐつと力をこめてそれを手で押すと、見る／＼明るい光が射し込んで、目の前に現れたのは、何日か見なかつた神戸の市街！やうやく逸雄は、惡人たちの巢から逃れることが出來たのでした。

4 既にわが家はなかつた！

はつと夢から醒めたやうに、逸雄は邊りを見廻しました。そこは恰度見覚えのある海岸通の淋しい

裏町で、ごた／＼と建てつまつた洋館が、まるで恐ろしい魔物のやうに、黒々と見えてをりました。

かうして、惡人の手から逃れては來たが、逸雄は何の思案もつきませんでした。父もなく母もなく、只つた一人頼みにしてゐた河野は惡人であつたし、今はこの恐ろしい出來事を語る者さへもありません。それにしても、兎に角山手にある自分の邸に歸らうと、力ない身に力をつけながら、逸雄は足を早めたのでした。

やうやく邸の前に來ました。あの鬱蒼と生ひ茂つてゐる木々を見ると、逸雄の目には何故ともなく嬉し涙が溢れましたが、不圖その門前に立つた時、

『おやッ！』

と激しく叫んで、よろよろと後ずさつてしまひました。つい五六日前までは、はつきりと書かれてあつた表札が、今は見知らぬ人の名に書き替へられてゐるではないか！呆氣に取られて佇んどゐたとき、不意にとんとんと肩を叩く者がありました。

『逸雄君！逸雄君！』

呼ばれて振り向くと、そこに立つてゐるのは額田探偵でした。

『あッ、額田さん！』

『お、やつぱり君か。君は一體今まで何處にゐたんだ？』

『僕は今まで、惡人たちの手に囚はれてゐたんです。』

逸雄は一伍一什を物語つたのでした。

「それちや、あの珊瑚の犯人はやつぱり河野に芳雄か。ふう……しまった！ しかも我々の氣のつかない間に、君の家もこの通り人手に渡つてしまつた。さうして河野や芳雄は東京の方へ逃げてしまつたのだ！」

「えッ、東京へ？」

逸雄は今更のやうに、大きな邸を眺めました。生ひ茂つた木々の向方に見える美しい洋館——それはもう逸雄の歸つて行く家ではなかつた……

「それから逸雄君、實は大變不思議なことがあるんだよ。」

「不思議なこと？ 不思議なこと

つて一體何でせう？」

「……それはまア後で話すとして、兎に角君は歸る家もない有様だ。今夜はゆつくり警察で寝て、明日からは當分僕の家へ泊つてゐたまへ。」

額田探偵が親切に言ふまゝに、逸雄は探偵と共に、住みなれたわが家の前を立ち去つたのでした。だが、今探偵の言つた不思議な事件とは何でせうか？

5 「嘆きの薔薇」公演

「さアお懸け。お腹が空いてるだらう。早くこれを食べ給へ。」

警察の一室に通された逸雄は、額田探偵から食事を與へられました。

長いこと食べるものも食べなかつた逸雄は、その心づくしに思はず涙を浮べたのでした。

恰度それを食べ終つたとき、逸雄は探偵に向つて訊きました。

「さつき仰つた、不思議なことといふのは何でせう？」

「それはこれだよ。」

探偵は逸雄の目の前に、一枚の新聞を掲げたのでした。

さうしてその一個所を、ちつと指しました。

それを眺めた逸雄は、

「おやッ！」

と鋭く聲を立てたのでした。それは東京の或る新聞でしたが、その廣告の欄には、こんなことが出てゐたのです。



◇第二の市田四郎氏出づ！

名嘆きの薔薇公演

◇世界的音楽家小畑楊吉氏！！

日三リよ日一十二
(演開時六後午)
座 國 帝

「小畑楊吉！——逸雄は叫びました。

その人に憶えがあるかい？」
え、この人はお父さんのお弟子だつたんです。名も顔も憶えてゐます。」

「ふむ……」

と額田探偵は考へ深さうに首を傾けてをりましたが、急にぐりと新聞を引つくり返しました。
「ところが君、こゝを見給へ！」

こゝにも亦こんな廣告が出てゐるよ。」

「えッ、何處に？」

逸雄が眺めると、そこにも亦次のやうな廣告が出てゐたのでした。

しかもその演奏者の名は、市田芳雄ではありませんか！

市田四郎氏の遺児 市田芳雄氏
少年天才音楽家

名嘆きの薔薇公演

三十一日より(夕六時)帝國演藝場
一日間(開演)に於て

「これは變ですね」

「變だね。」

二人はちつと顔を見合はせました。

「どつちも三十一日から三日間ですね。今までは難曲とされて、誰一人あの名曲を弾く者さへなかつたのに、どうしたつて言ふんではう……」

それにこの芳雄兄さんの方は、何だか怪しいですね」

「何はともあれ、芳雄君の名まで出てゐるんだ。何かしら意外な秘密があるかも知れない。二十一日といふともう二日しかないが、それまでは何事もそのまゝにして置いて、突然劇場の方に行かうと思ふ。これは屹度、君が囚はれてゐる間に、何か金んだことに違ひない。僕は明日東京に立つよ。」

「ちや、額田さん、僕も一緒につれてつて貰へませんか？」

九四

「君も？」

「え、僕はこの事件の真相を知りたいんです。是非お供をさせて下さい。出来るだけ僕は働きますから」

熱心な逸雄の願ひに、額田探偵は遂にそれを許しました。

さうして愈々明日の朝、神戸を立つて東京に旅する決心をしたのでした。

だが、この二つの音楽會は、何者が演ずるのでせう？」

果して二人の想像は當つてゐたでせうか？

(つづく)

(これから愈々面白くなります。
次號をお待ち下さい。)

蜂の巢

(推薦)

日高紅椿

きのふ落とした
巢のあとに
親子の蜂が
かへつてゐる

こさへたおうち

ないないで

ゆんべ一夜は

さむしかろ

落としたお家は

どうしたら

もともとここに
つくだろか





獨逸古譚 シーグフリード王子物語

山野虎市譯
寺内萬治郎畫

シーグフリード王子は、自分の領地へ行つて、一千人の強い兵士を選びました。そしてその兵士達を幾艘もの船に乗せて、イセナランドへ向けて出帆しました。

多くの艦隊を見て驚いてしまひ、もう二度とシーグフリードと戦はうと云ふ様な心は無くなつてしまひました。

旅人は大喜びで、その家の方へ進んで行きました。その家は木立の中にあつた一軒の百姓家でありました。

お化の正體

九六

相馬光鷹

途に迷つた一人の旅人が、秋の夕日を浴びながら、山の中を急ぎました。その中に日がとつぷりと暮れて、あたりが暗くなつてしまひましたが、旅人は泊る家を見つけたところから出来ませんでした。その中にだん／＼闇が深くなつて、夜が更けて行きました。旅人は仕方なく、野宿しようと思つてしまひましたが、なほ疲れた足を運んでゐますと、前方の樹の茂みの中から、チラ／＼と燈火が螢の光のやうに見えました。

旅人は大喜びで、その家の方へ進んで行きました。その家は木立の中にあつた一軒の百姓家でありました。

一行は九日間の旅を續けて、無事にアルガンヤイ國へ着く事が出来ました。

「私はお兄様の良と思召した所へ参ります。」と云つて、そつと添に居るシーグフリードの方を眺めました。王女は、その一人の武士と云ふのは、確かにシーグフリードに違ひないと思つたのであります。

主人は、「それはお安い事です、どうぞ此方へ。」といつて、煙の側へ旅人を導きました。



旅人は死人と二人で、山の中の一軒家で暫時でも居ることは氣味が悪いと思ひましたけれども、仕方がありませんから、承知をしま



式が済むとシーグフリードは、新しい妻と一緒に、自分の國のネザラランドへ歸つて参り、した。國中の人々は歡びの聲を擧げて、心からこの二人を迎へました。父の王も大へん喜んで、直ぐにシーグフリードに王位を譲る事になりました。

シーグフリードは王様となつてからも、よく下々の者を愛しましたので、人民も亦、王様に懐き、國內は常に春の様に平和でした。十年の歲月が過ぎて、シーグフリードと妃との間には、可愛らしい男の子を儲けられました。

この二人の幸福なのに引きかへて、アルンヒルト女王は、毎日々々満ちない日を送つて居りました。彼女深い女王は、シーグフリードとその妃の仲のいゝのが、羨しくて／＼堪らなかつたのです。

『どうかしてシーグフリードに、不幸を與へてやりたいものだ。』かう思つた女王は、夫のアンデル王に薦めて、シーグフリード夫妻を自分の城に招待する事になりました。

した。主人はよろこんで、
『直ぐ歸つて來ますから。』
と云つて、太い杖を持つて、
着物の裾をから
げて出掛けました。

一人になつた旅人は、
爐側へ坐つて、ちつ
と佛壇に描く燈明の火を見詰めてゐましたが
「アッ。」

と叫んで立ちあがりました。

旅人が驚ろいたのも無理がありません。佛壇の前の死骸がぐくぐくと動いたと思ふと、蒲團の中から細い手が出て來て、佛壇に伏へてあつた御飯を掴んで、すうとまた蒲團の中へ引込んだのです！

驚いた旅人は表へ飛び出さうとして、庭に下りましたが、その時ひよいと、上の方を見ると、蓬のやうに亂れた長い頭髮の女がニツと物凄く笑つて、旅人の顔を観き込んだのです！

旅人はもうすつかり度胸を抜かれて、表へ飛び出さうとして、庭を跨がうとしますと、毛の生えた手が下の方から旅人の兩足なしかと

抱いたのです！

旅人は、

「ワン。」といった儘、其所へ氣絶して終ひました。

さて、主人は駆け足で隣り村まで行つて、用を済まして、親類の若者三人と一緒に急いで家へ歸つて見ますと、戸口で旅人が氣絶してゐます。

四人は大層驚いて、旅人の顔に水を吹きかけたり、胸の所を揉んだりしました。

で、旅人はやつと呼吸を吹き返へして、氣に化かされた人のやうに、キヨロ／＼と見廻しました。旅人の心の落ちつくのを待つて、主人はどうして氣絶したのかと訊ねました。

旅人は残らず、家の中につつた恐ろしい事件を慄へながら話しました。

すると主人は

「アハ、ハ、ハ。」

と笑ひました。

續いて一緒に來た若者共も聲を揃へて、
「アハ、ハ、ハ。」



女王に悪い計があるとは知らないシーグフリードは、妃と一緒に、アルカンヤール國へやつて参りました。アルカンヤール國では、勇ましいシーグフリードが來たと云ふので、毎日、歡迎の宴會や試合が行はれました。

處が成晩の事、クリムヒルトが、アルンヒルト女王とお話しをしてゐる時、フトした事から争ひを始めました。

『世の中で、私の夫のシーグフリードほど、勇ましい武士はありませんまい。』とクリムヒルトが云ひますと、アルンヒルト女王は、

『イエエ、そんな事があるもんですか。幾らシーグフリードが強かつたつて、私の夫のアンデル王には敵ひません！』と云ひ返へしました。それを聞くと、平素温良なしいクリムヒルトも、カツとなつて叫びました。

『貴方は未だ御存知ないのですか！ イェンランドで、貴方と仕合をして勝つたのは、アンデル王では無くて、シーグフリードだと云ふ事な！』

その證據には、その時貴方から奪ひ取つたこの指環と帶とを御覽なさい！』



それを聞いたブルンヒルト女王の驚きは、
 なんだつたでせう。
 「私は欺されたのだ。私は欺されて、弱蟲の
 シンデル王と結婚したのだ！」
 女王の心は、益々シークフリードに對する
 憎しみの情で満ちました。その時、ソツと
 女王の耳に口を寄せて囁いたのは、あの悪い
 相談役の、ヘーゲンでした。
 「女王様、御心配には及びません。私は計略
 を用ひて、キツとシークフリードの生命を取
 つて御覽に入れます。」

ヘーゲンはかう云つて、ニヤリと氣味の悪
 い笑を洩しました。そしてシンデル王にも處
 めて、この悪い陰謀に引き入れました。
 ヘーゲンはシークフリードの所へ行つて、
 「どうです。久しぶりで獵に行かうぢやあり
 ませんか」と誘ひますと、王子は喜んで承知
 しました。
 併し、妃のグリムヒルトは、蟲が知らせた
 ものか、何んとかくシークフリードがこの獵
 に出て行くと云ふ事が、氣がよりでならなかつ
 たのです。

と笑ひました。
 主人は氣の毒さうに旅人に話しました。
 「急いで居つたものですから、云ひ置くの
 を忘れて済まない事なりました。實は三ツにな
 る女の兒が母の側を少しも離れせんから、
 死んだ母の側へ寝かして置いたのです。貴所
 が見た蒲團の中から出た手と云ふのはその女
 の兒の手だつたのです。それから貴所が膽を
 つぶした。女の顔と云ふのは、あれは私の妹
 です。實は妹は狂人で、あはれて仕方があ
 りませんから、つし(つしとは農家の入口の
 土の方にある二階のやうな物置)へ上げて置
 いたのですが、それがつしから貴所を覗き込
 んだのです。また毛の生えた手で貴所の足を
 抱いたといふのは、あれは家に飼つて置く
 だつたのです。」
 主人の話の聞いて、旅人はホツと胸をなで
 下しました。そして、其晩はゆつくり御飯を
 載いて死骸の置いてある次の狭い納戸で、安
 心して眠りました。(ををり)

貧乏神のお宿

長崎 五六

グリムヒルトは、ヘーゲンが悪者だと云ふ
 事に、一寸も氣が附きませんでした。そして
 たゞ夫の身の上を氣づかふの餘りに、夫の秘
 密を残らずヘーゲンに話して、どうか過ちの
 無いやうに護つて下さいと頼みました。秘密
 と云ふのは、シークフリードの身體は、劍で
 も槍でも傷つける事は出来ないが、たゞ一ヶ
 所、肩の所に柔かい肉の場所があつて、其處
 を突かされると、生命が無いと云ふ事でありま
 す。それを聞いたヘーゲンは「アたい」と思ひ
 ました。

やがてシークフリードは、シンデル王や、
 ヘーゲンと共に、森の奥へ獵に出かけて行
 きました。頭には黒貂の獵帽を冠り、腰にはバ
 ルムンガの名劍を下げて、帯には黄金の矢筒を
 吊した王子の姿は、どんなに勇ましく見えた
 事でせう！ 數多の武士の内で、シークフリ
 ードは最も獵が上手でした。シークフリ
ードは、弓や槍を使はなくて、素手で、羆を斃
 したり、狼を生擒つたりしました。
 日が暮れるとシークフリードは、多くの獵
 物を追ひたて、天幕へ歸つて参りました。

昔江戸のある町に、倭六と云ふ獨り者の
 男があつた。
 性來縁ぐのが嫌ひで、三度の御飯を食べる
 ほかは、しじう寝てゐたいと云ふ怠惰者です
 から、親から貰つたお金を、だん／＼遣ひ減
 らして、貧乏になつて來ました。
 ある日、ノツリと伯父さんの家へやつて
 來ました。

「伯父さん、こんにちは。」

伯父さんは見ると、倭六ですから、

「倭六か、しばらく來なかつたが、何か商賣
 でも始めたか。」

「ところが商賣がないので、困つてしまひま
 した。」

「仕様のない奴だな、縁ぐに追ひつく貧乏な
 しと云ふから、お前のやうに、縁がすに遊ん
 でゐれば、貧乏するのには當り前だ。」





獲から歸つて來たシーグフリードは、大變喉が渇いてゐましたので、葡萄酒を一杯呉れと云ひました。するとヘーゲンが、
「只今、此處には葡萄酒はありません。私も喉が渇いて困つてゐる處ですから、御一緒に森の泉へ行つて、冷たい水を飲んで來ようぢやありませんか」と云ひました。
騙されるとは知らないシーグフリードは、ヘーゲンと共に森の泉へやつて參りました。そして、腰の剣を外して、傍の土の上へ置き身を屈めて泉の水を飲み始めました。

其處へヘーゲンが通つて來て、先づ、シーグフリードの剣と弓とを草叢の中に隠してしまひました。そして槍を取り出して、いきなりシーグフリードの、背中の肉の軟かい所を突刺したのです。
油石のシーグフリードも、一聲苦しさうな唸り聲をたて、打倒れました。併し直ぐに跳ね起きて、剣を取らうとしましたが、劍がありません。仕方なく握でもつて、力一杯ヘーゲンを打ち倒しました。ヘーゲンは聲も立てず、血を吐いて死んで了ひました。

『そこで友達に教へてくれたのですが、金持ちになるやうに、福の神を信心しようと思つてゐるのです。』
『いくら福の神を信心したつて、お前なぞに御利益があるものか。わかし、かういふ話がある。お前のやうな怠惰者が、大黒様へお詣りをして、あなたのお持ちになつておいでになる打出の小槌から、寶を出していただきたいと願つた。すると大黒様は、小槌でその男のいふコッソと打つて、（この槌は寶打ち出す槌でなし、のらくら者の頭打つ槌）と仰つたと云ふことだ。それより、お前の家にある貧乏神を追い出すがいい。それには、これから毎日朝から晩まで騒いで、家へ歸つて來たら、貧乏神出て行け、出て行けと言ふのだ。それを七日も、續けてやれば、キツト金持ちになる。』
『これは有難い、早速明日からやりませう。伯父さん左様なら』と俵六は家へ歸つて來ました。
ところが、根が怠惰者の俵六は、何んの商賣をしようと思ふ當もなし、と言つて、遊んでゐる。

シーグフリードはもう全く蟲の息でた。急を聞いて駆け附けたケンデル王は、初めて自分の遅かつた事を後悔しましたが、もう追附きません。ケンデル王は王子の手を握つてハラ／＼と涙を流しました。
『ケンデル王、私は貴方にお願ひがあります。どうか私が亡くなつた後は、あの可哀さうなクリムヒルトと、私の息子の身の上を護つてやつて下さい。お願ひ致します。』
シーグフリードはかう云つて、遂に息が絶えました。



兵士達は、その死骸を黄金の桶の上に乗せて、都へ歸つて參りました。行く時には、あんなに大元氣で出て行つたシーグフリードがこんな淺ましい姿で歸つて來たのを見た時、クリムヒルトの驚きはどんだつたでせう？
吊ひの鐘の音が、寂しくライン河の川霧を通して響きました。それを聞くとクリムヒルトは、もう居ても立つても居られなくなつて夫の死骸の上に泣き伏すのでした。強い半面に柔しい心を持った眞實の武士シーグフリードは、かうしてその一生涯を終りました。

である、貧乏神に馬鹿にされると、朝家を出て友達のを遊び廻り、晩に歸つて來て、伯父さんに教つたとほり、大騒ぎで、『ヤイ貧乏神、出て行け、出て行け』と、怒鳴りました。
それで、毎日々々かうして、七日目の晩になつて、今夜こそ、貧乏神を追い出してやうと、いつもよりも大騒ぎで、出て行け、出て行けと怒鳴りますと、途端に天井が、メリメリと音がして、破れ目からバタリと落ちて來たのは、一本の蒲團屋でした。

俵六はオヤツと思つてゐると、やがてドマリツと大きな音がして、星の上へ何か落ちて來ました。
見ると、汚い、見事らしいお爺さんでしたので、サテハ、いよ／＼貧乏神が出て行くのかと、喜びました。

スルト、天井でゴ／＼話し聲がするので、これは不思議と、耳をすまして聴くと、
『押すな／＼、さう押入つて來ると、また落ちるぞ。』
(をばり)



童謡

野口雨情選

(子供篇)

三毛猫

若狭高濱 海邊 ハル

近所の猫は三毛猫で
いつも私の家におて
まあるくなつて
めをつぶり
のどをごろ〜
ならして

明日は雨だよ
お天気だわよ
下駄なげホーイホーイ

水車
長野縣伊賀 矢澤ひろ子
良校等四

お家の前の水車
水をのんではガツタンコ
水をはいてはガツタンコ
お米をついては
ガツタンコ

たばこのみ

若狭高濱 澤田 ワキ
校等六

お父さんのたばこのみ
すば〜すばと

のどをならすと

かはいくて

あたまをなでて

やりました

雨の裏山

東郷校 渡邊 馨
高二

雨の降る日の裏山は
ザア〜ぬれて
ゐるばかり
裏のお山で鳴く鳥は
雨がやむまで何してる

は た

熊本縣荒尾 海達 公子
北校等二
どこの家の

のみながら
おいしうにのんでゐる

積木の城

大阪市 中村 速生
東雲町 (十二才)

積木で城を
こしらへた
積木で街をこしらへた
鉛の兵隊
みんな来い
小豆の大砲
引いて来い

小春

茨城縣大井 須賀 恒
深校高一

うちの玉やは縁側の

日のまるも

ひらひら

してゐるお正月

夕方

千葉久留 荒生 英子
里校等四

お日さま西へ
しづむころ
私はおふろに
しづんでた

向ふの一けんや

千葉久留 佐藤 きわ
里校等四

夜はちら〜
あかりが見えて

日なたぼつこに
寝そべつて
咽の銀の鈴ちやら〜と



ならして楽しい夢見てる

鳥のおきう

東京市 金子 武夫

向ふのおうちは
一けんや

だれだか向ふへ
行くやうな

赤いあかりが
たんばにうつる

向ふ一けんやにや
すみたくないや

ほう〜ふくろが
なくだもの

下駄なげ

東京市外 伊藤 駿二
下目黒 (十五才)

下駄なげホーイホーイ
明日天気になーれ

屋根草取ると
鳥がおきうを
するにくる

よるになつて
皆んながねると
赤い鳥うりの
火を持つて

草のおきうをするにくる
鳥がおきうを
するにくる

本を買った時

東京府 深町 節子
香高女二

本を買った時は
うれしいよ

本をかへて
一人でに

わらつちやふ



金兵衛の夢

田 中 實

昔、ある田舎に、金兵衛といふそれはそれは貧乏なお百姓がありました。

この金兵衛があるとき、自分の今までの暮しをつくづく厭に思ひました。それは、毎日、朝はまた空

一〇六

に星がある時分に起きて、野良へ働きに出掛けなければなりませんし、夕方になつても、あたりがすっかり暗くなつて、空に星がキラ／＼輝き出す頃までは家へ歸れないのでした。そしてそんなにあくせくと一生懸命に働いても、少しも働きがひがなく、いつもいつも貧乏して、その日の暮しも、たち兼ねるやうな有様でした。

金兵衛は畑を耕しながら考へました。

『どうしたら、もちつと樂になれやうか。』

野良にゐる時でも、家にゐる時でも、寝ても醒めても、始終幸福になることはかゝ考へてゐましたがある時、いよいよ決心しました。

『こんな暮しをつゞけてゐても、先の見込みがないから、こゝらでひとつ奮發して、江戸へ行つて見よう。そして何か商賣でもして、一生懸命に働いたらこんな田舎に引込んで、あくせくしてゐるよりか、ずつとましだらうし、努力次第で、大金持になれる

いものでもあるまい。』

さう思ひつくと、もう矢も楯もたなくなりまして。別に身よりといふ者のないひとり者の金兵衛ですから、早速ありもしない道具を賣拂つてしまひ、たらないお金をすこしばかり庄屋さまに借りて、その日のうちに、江戸を指して村を出發しました。

それから幾日か旅をつゞけて、やうやく江戸へかかりました。そのとき金兵衛は、ふと、村を出る時に、庄屋さまから聞いた言葉を思ひ出しました。

『江戸へ行つたら、必ず目黒の不動さまへ參詣なされ。きつと、御利益があるほどに——』と、くれぐれも、いつてくれたのです。

——目黒の不動さまといふのは、すべて何ごとでも、必ず運を開いて下さる、大そうな御利益のあるお社だと云はれてゐました。

金兵衛は喜んで、

『よし／＼、これはいゝことを思ひ出した。大して

廻り道でもないから、ひとつ不動さまへお詣りして運を開いていたゞかう。』

かう思ひながら、それから目黒へ廻つて、不動さまへお詣りをしました。金兵衛は拜殿の前へ行つてお賽銭を賽銭箱へ入れると、手を合せて拜みながら、『どうぞ、これから始めます商賣が、繁昌いたしますやうに——』と、頭を地べたにこすりつけて、お願ひしました。

やつとお参りをすませて、拜殿を下りて境内を出ますと、『目黒名物、栗餅』と書いてある看板を出した茶店の前を通りかかりました。

恰度その時は、お晝過ぎではありましたが、お腹も少し空いてゐましたので、

『これは恰度よい。どりと栗餅でも、ゆつくり食べて、それから江戸入りとしよう』と思ひながら、その茶店の中へ這入つて行つて、赤い毛氈の掛けてある床几に、どつかと腰を下しました。

そこへ女が、お茶を汲んで来ました。金兵衛はお茶を啜りながら、

『栗餅はあるかい？』と、たづねました。

『今すつかり出きつてしまひましたので、只今携いてゐるところでございます。ちき出来ますから、少少お待ちなすつて下さいまし。』と女が答へました。



さういへば、裏の方で、ベツタン、ベツタンと、杵の音がしてゐます。

『さうかい。ではなるべく早く頼む。』

と、金兵衛は云つて、お茶を飲みながら、あたりの景色を眺めてゐましたが、すぐ出来るといつた栗餅は、なか／＼出来て来ません。日はまだ高くつてカ／＼照つてゐます。待ちくたびれて、日に照され乍ら床几の上にごろりと轉がつてゐますうちに、旅のつかれが出て、ついうと／＼といふ心持に眠つてしまひました。ベツタン、ベツタンといふ杵の音をばんやりと聞きながら。――

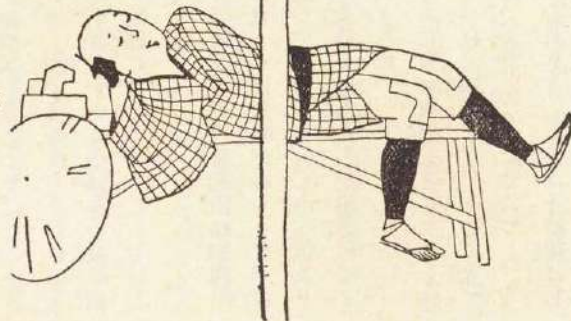
しばらく、うと／＼としてゐるうちに、

『もしもし。』と、誰か耳のはたで囁く者があります。

『おや。さては栗餅が出来たのかな。』

と思ひながら、金兵衛は目を開けて見ました。するといつの間に来たのか、自分の前には、りつばな駕

名栗餅



籠が一挺おいてあります。その傍には、きりつとした風をした草履取り、十二ぐらゐの小僧、そのほか番頭、手代などが、大せいかしこまつて控へてゐま

す。

金兵衛がどうしたのかと思つて、目をきよときよとしてゐますと、中で一番年上の番頭らしい男が出て来て、丁寧に御儀をしました。

『せつかくお寢みになつていらつしやることを、お起し申しまして何とも申譯ありません。突然で、はなはだ失禮でございますが、私共は神田の八丁堀に長年住んでをります、泉屋清三と申す者の召使でございます。主人清三は、だん／＼年をとつて行くばかりでございますが、まだ一人の子供さへございません。それに、さきほど頭をまるめて、名も文粹と改めまして、今は隠居をいたしてをります。けれども、後継ぎのないのを案じまして、自分に子供がいなければ、どなたかしつかりした方に自分の跡をゆづりたいと存じまして、適當な人と探してをりました。ところが恰度幸にも、この度あなた様が出世をお望みになつて、これまでお出でになつたこと

を、主人が年ごろ信心いたしてをりますこの不動さまのお告げで知りましたので、實は私共が迎へに参つたのでございます。どうぞお願いでございます。主人の望み通り、跡をおつぎ下さいませ。』

と、番頭は一息にいひました。そして、あつけにとられて、まだ行くとも行かないともいはない金兵衛を、みんなでむりやり駕籠に乗せて、どこともなく連れて行つてしまひました。

やがて駕籠が下に降されたので、金兵衛は駕籠から出て見ますと、前にはりつばな家があります。番頭、手代共が先きに立つて、つれられて中へ這入りました。するとまた、大せいの人たちが出迎へて、鄭重に奥座敷へ通されました。

金兵衛はじろ／＼とあたりを見廻しました。それは、御殿のやうにりつばな座敷です。そこに立てある屏風や唐紙には、金銀の砂子が散らしてあり、衝立には矢張り金銀のお日さまとお月さまが現はし

てあります。そして出された茶器といひ、床の間の掛軸といひ、庭の泉水の美しさといひ、金兵衛が今まで見たこともないやうな立派なものでした。

ふわ／＼する軟い蒲團の上に坐つて、しばらく待つてゐますと、やがて主人の文粹が出て來ました。文粹は六十ぐらゐの人のよさうなお爺さんです。文粹は金兵衛を見て、賢さうな、しつかりした男と見ましたから、大喜びで、

『これでやつと自分の後繼も出來て、わしも安心出来る。』

と、獨りぎめにきめてしまひました。そして早速、金兵衛を二代目の泉屋清三にしました。それから家中の者をあつめて、お祝ひの酒宴を開きました。金兵衛が食べたこともないやうな御馳走やお酒が出て、

『さあ飲め／＼』と、しきりにすすめられます。『若旦那、お目出度う存じます。』と、大せいの召使が一々挨拶に來ました。

その後で文粹は、財産を全部金兵衛にゆすつてしまひました。

金兵衛は志を立て、田舎を出ると、忽ちこんな思はぬ幸せにありついたものですから、すつかり有頂天になつて喜びました。

『やつぱりこれは、目黒の不動さまのおかげだ。ああ有難い／＼。』

翌る日になると、早速不動さまへお詣りをして、お禮を申しました。そしてなほこの上の仕合せをお願いいたしました。

金兵衛は店をゆづつて貰つて、一生懸命になつて働きました。朝は早くから起き、夜は晩くまで起きてゐて、大せいの召使に一々指圖をして、店が繁昌するやうに、お金が殖えるやうにと、そればかり心がけてゐました。それが忽ちお父さんの目にとまつて、

『あゝよい子を持つたものだ。』と、ほんたうに感心して、大そう喜ばれました。

ところが、この店に悪い手代が一人ゐました。それは源四郎といつて、猿のやうに悪がしこく、またねたみの強い奴でした。これが、しきりに金兵衛の出世をうらやむのでした。

『金兵衛の奴、たかが田舎の土百姓のくせに、えらく威張りやがる。』

と思ひましたが、とにかく金兵衛は今自分主人ですから、どうすることも出来ません。しかし、何とかあいつを失策らせて、この家から追ひ出したいと、源四郎はひそかに悪だくみをしてゐました。で表面にはそんなことはおくびにも出さずに、金兵衛にへい／＼と仕へてゐました。

とう／＼その折が來ました。春のお花見のころでした。金兵衛がお氣に入りの源四郎をつれて、お花見に行つた歸り道で、源四郎は金兵衛を悪い遊び場

所へ引張つて行きました。

ところが、それ以来、金兵衛は働くことをしなくなつて、遊び廻つてばかりゐるやうになつてしまひました。

『若旦那、今日は何處へ行きませう……。明日は何處へ行きませう。』と云つて、源四郎はそれから幾度となく金兵衛を遊びにつれ出しました。

金兵衛は流石にはじめの間は、お父さんの手前もあつて、そつと家を出てゐましたが、そのうちには平氣で飛び出すやうになつて、毎日毎晩お料理屋へ行つて



うまい御馳走を食べたり、お酒をのんだり、または悪い遊び場所へ行つたりしてゐました。

ある年の節分の日でした。その日も源四郎は金兵衛をお料理屋へつれて行きました。その二階へ上つて、おいしいものを食べたり、お酒をのんだりしてゐました。そのうち夜になると、その家の者が集まつて、豆蒔きをはじめました。

『福は内、鬼は外』と、云ひ乍ら、升の豆をばら〜蒔きました。

それを見ると、源四郎はにや〜と笑つて、
「どうです若旦那、豆蒔き

は古くさいやありませんか。金銀蒔きの方がすつと面白うございます。」と、すすめました。

「うん、よからう。」

金兵衛は源四郎のいふことなら、どんなことでも賛成するのでした。——源四郎がどんなに恐ろしいくらゐを持つてゐるかも知らないで。

二人はすぐさま、豆蒔きをしてゐる部屋へ行つて、升の豆を捨てさせて了ひました。そしてその代りに、金銀小判を一ぱい入れて、
『さあ〜、皆拾へよ、俺が今から小判を蒔くから。』



と云ひながら、バラ〜と蒔き出しました。すると集つてゐた大ぜいの男や女がわあ〜騒ぎ出して、喧嘩のやうにして拾ひました。升の中の小判が無くなる、また別の小判を入れて蒔きました。

で、何度も〜蒔いて、すゐぶん無茶なお金を費ひました。

金兵衛はそれから、三十年もの長い間、うか〜と夢の様に遊び暮してしまひました。源四郎は始終金兵衛を使はせてしまひましたので、あれほど澤山あつた

財産も、みる／＼内に減つて行つてしまひました。とう／＼おしまひには、お父さんの文粹に知れてしまひました。お父さんはそれを聞くと、まつ赤になつて怒り出しました。

すると源四郎が、するさうに、にや／＼と笑ひながら、文粹のところへ行つて、

「大旦那さま、若旦那にも困つたものでございます。



お金ばかりめちや／＼に費ふことばかり知つてお出です。あんな方は今のうちに追ひ出しておしまひにならなければ、お家のためになりません。」と、しきりに焚きつけました。

いゝ加減怒つてゐるところへ、そんなことをいはれては、ます／＼堪らなくなります。文粹は、たうとう我慢がしきれなくなつてしまひました。

夕方になつて、金兵衛がお酒に酔つて歸つて來ますと、文粹はいきなり、

「この極道者奴！ 出て失せろ。」

と、叱りつけました。

そして源四郎に云ひ付けて、やにはに、金兵衛が着てゐる立派な着物をぬがせてしまつて、もと此の家へ來た時のまゝの姿にして、外へ突出してしまひました。

金兵衛はどこへ行くあてもないので、門にもたれて、おい／＼泣き出しました。



ふとまた、ベツタン、ベツタンと杵の音が聞えて來ました。金兵衛はハツとして目をさました。あたりを見廻しますと、やつぱりもとの栗餅屋の床几に寝てゐましたので、はつと胸をなでおろしました。そして今のは夢だつたのかと初めて知りました。そして日差もまだ高くつて、栗餅もまだ出來てゐません。

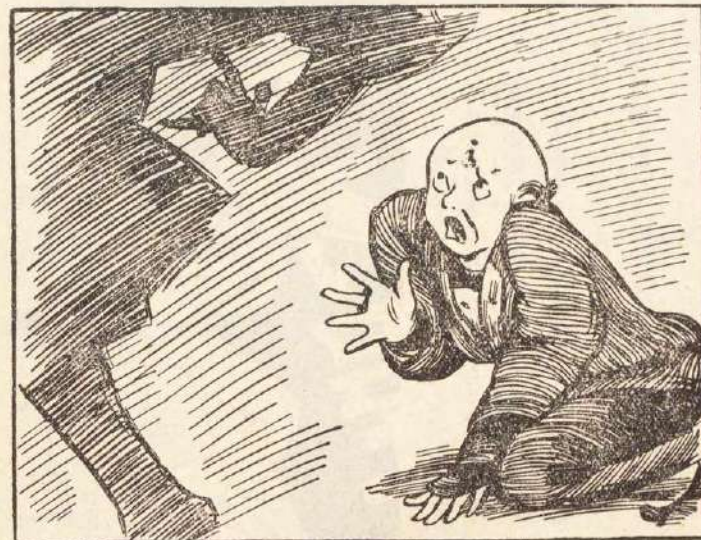
金兵衛はつく／＼と感じ入つて、思はずつぶやきました。

「何だ、まだいくらも寝ないんだな。あゝあ、俺は文粹の子になつて、せいたくをしたのは、三十年もの長い間だつた。だが目がさめて見れば、それも僅か栗餅を一白搗く間だつたのか。……馬鹿々々しいこつた。」

金兵衛はさう思ふと、もう江戸へ出て暮すことが馬鹿々々しくなつて、そのまゝまた田舎へ歸つて行きました。(をばり)

「さて、これからはどうしようか知らず」と考へて見ても、文粹の家へ來てから三十年も遊びつづけてゐて、すっかり年をとつてゐるので、もう何うにもなりません。

金兵衛は門の前に突立つて、途方に暮れてしまひました。



出目助さん道中記

三島霜川

八

(前巻までの梗概は一三頁にあります)

火事、火事、火事——それは、恐ろしい火事でした。いえ！見る／＼うちに、恐ろしい大火事になつて了つたのでございます。何にしろ、火が殆ど同時に、三ヶ所からも起つて、それが、夜明の風に煽られて、ドン／＼燃えひろがつて了つたのです。しかも、あひにくとまた、その頃から、「魔の風」とでも云ふやうな、氣味の悪い、變てに生ぬるい風が、どつと烈しく吹出して、火の粉が、吹雪の雪のやうに、亂れ狂つて、八方に、くる／＼と飛ぶ。眞つ黒な、熱い煙は、もく／＼、もく

もくと、地の底から噴出すやうに、渦まき、漲つて、水口の町ぢうは、それこそ「焦熱地獄」の有様でございました。町の人たちは、荷物やなぞを持出すどころではありません。いづれも、命もから／＼、右へ左へ、煙のなかを潜り、火のなかを抜けて、思ひ思ひに逃げて行く其の混雜——子は母を呼び、父は子を呼んで、喚き、泣き、叫ぶ、その騒動は、まるで、此の世が打壊されて了ふかと思はれるやうでした。

出目助さんが、初めて此の火の手を見つけたのは、恰度、お姫様の縛り縄をほどいて、お駕籠から出た時でした。斬合はまだ最中、お姫様の猿轡は其のまゝになつてゐました。

「大丈夫ですよ、大丈夫ですよ。しつかり、おいらかに、つかまつて居なさいまし。それから、おいらする通りにして……可いかな。」

出目助さん、お駕籠のなかを出る前に、何度と

なく、さう云つて、お姫様の耳元に囁きました。さうして、そつと、そつと、息も立てないやうにして、自分から先きに、お駕籠から這出しました。と、つい、鼻の先きで、チャリ、ツと、氣味の悪い刀の双音がしました。出目助さんは、ひやりとして、思はず首を縮めました。が、もう、「慌てゝは可けない」と、よつと度胸を据ゑてゐましたから、闇を透して

じつと、そこらの様子を窺ひました。

出目助さんは、今、まつたく劍の刃渡りをするやうなものでした。何しろお駕籠のまはりには、前にも後ろにも、斬ツつ、斬られつ、幾組となく斬合が始まつてゐるのでございます。その刃の下をくぐつて、お駕籠から脱出さうとするのですから、危ないと云つて、これ程危ないことはありません。闇のなかに、びかッ、びかッ、と、閃く、刀の影も見えます。はッ／＼といふ、恐ろしい息遣も聞えます。それがしんとした空氣に傳はつて、お腹の底まで、づんと

響いて來ます。「こりや可けない！ うっかり出るとおれも、お姫様も、どんな、はすみで、怪我をすることも知れない。」と、氣がつかしました。で、危なくて、とても、門の外へは出て行かれさうにありませんから、其事をお姫様に囁いて、そつと、そつと、反對の方の戸をあけて、ともかくも、一と先づ玄關の奥へ、脱出さうとしました。そして、やつとの思で、お駕籠の外へ退出しました。とたんに、また一人、ム、と呻いて、もう少しで、出目助さんの上へ乗しかかりさうになつて、どたりと、大地に倒れた者がありました。さつと、氣味の悪い爆風、それと共に、生ぬるい雨のやうな滴りが、したゝかに、出目助さんの顔にかかりました。

出目助さんは、ぞつとして、縮上がりしました。しかし、一生懸命にこらへて、觀音様をがみながら、呼吸も立てないやうに、じつとしてゐました。それから、そつと、お姫様の手をつかまへました。

そして、誰にも氣づかれないやうに、よく注意をして、そろ／＼、そろ／＼と、まるで、蟲の這ふやうに這つて、玄關の奥の方に進まうとしました。恰度、その時のことでございました。出目助さんは、出目助さんの泊つてゐる方角に當つて、眞ッ紅な光が、ぼーつと、闇の空を染めてゐるのを見つけました。と、同時に、わや／＼、がや／＼と、騒立てゐる人聲——それが、三四町も距つて居ましたから、妙に、ひそ／＼と、しかし、だん／＼と、物凄く、高まつて行くのを聞きました。

『火事だな。』

と、出目助さんは、すぐに、それと知りました。そして、『ア、あの火を見ては、ごんが荒出すぞ。さア、大變だ。』と、切りに、それを心配し始めました。けれども、お姫様も、捨てゝは置かれませんか。と云つて、お姫様をつれて、『ごん』のところへ駆けつけて行くことは出来ません。さア、出目助さんは、氣が採めて來

ました。いくら闇のなかちうに、びか／＼、びか／＼、刀が、きらめいてゐても、一人ならば、何んとかして、潜り抜けることも出来ようが、お姫様をつれては——出目助さんは、まったく困つて了ひました。『ごん』のところへ駆けつけようか。お姫様を助けようか。』と、出目助さんは、何うしようかと、大きな頭が滅茶々々になるほど、迷つて了ひました。でも、やつぱり、お姫様の手を把つて、玄關を上がつて、眞ッ暗な其の次の間に入つて行きました。さうして、闇を探へてゐるうちに、長持のやうな大きな箱に、ぶつかりました。(つゞく)



まにんにてき

小島政二郎



昔、九州に「萬人敵」と云ふ仇名のお醫者がありました。お醫者の癖に武藝が好きで、殊に彈き彈丸の名人でした。

彈き彈丸と云ふのは、今のバチンコと同じやうな出来で、弓の弾く力で鉛の彈丸を飛ばして敵を斃すのです。百發百中、この人が彈き彈丸を手にしたら一萬人敵が來ても叶ふまいと云ふところから、この綽名が附いたのでした。

すると、同じ村に、やはり彈き彈丸の名人で、「野に臥す虎」と云ふ綽名の方があつた。二人は毎日野原へ出て、仲よく彈き彈丸の稽古をしてゐました。今日もいつもの通りやつてゐました。萬人敵の方が成績がよくつて彈丸を放つと、バチンと、あの堅い櫟の木の幹へ、三寸もめり込んでしまふと云ふ有様でした。野に臥す虎の方は、一寸も射込みました。

大勢の村の人々は、二人を取り巻いて見物してゐましたが、

「偉いもんぢや。」と、口々に感心してゐました。

すると、中に一人旅の坊さんが混つてゐましたが我れ知らず

「ナルホド、二人とも腕の力は十分あるが、指の力がまだ足りない。あれでは人を斃す事は出来まい。」と呟きました。

運悪くその呟きが野に臥す虎の耳に聞えたから溜まりません。

「何だと。生意氣な。よし、人が斃せるか斃せないか、わしの彈丸を受けて見よ。」と、怒つて弓を坊さんに向けてました。

慌てゝ見物人が宥めましたが、間に合ひません。彈丸は弓を放れて、バチンと坊さんの額に當りました。見物人はハッとしましたが、それよりも驚いた事には、ビシッめり込む事と思つてゐた彈丸が、

カチンと額から跳ね返つて、その儘地面に落ちてしまひました。野に臥す虎は益々怒つて、あせり氣味に續けて二三度彈丸を飛ばしましたが、坊さんは一向平氣なもので、カラ／＼と笑ひながら。

「うん、だん／＼彈丸の當り方が弱くなつて來た。腕力がなくなつて來たんだらう。——どうぢやな、萬人敵と代つたら。」などとからかひました。

見物人は面白がつて

「萬人敵、出ろ出ろ。」と嗾けましたが、萬人敵はともこの坊さんに叶はない事を知つて、

「和尚さん、どうか貴方の腕前を見せて下さい。」と丁寧に頼みました。坊さんは

「いや、さう云はれると困る。何もわしは自慢をしに來た譯ではない。併しかうなつては、斷るのは却つて臆ではあるまい。よろしい、御覽に入れよう。」かう云つて、萬人敵の彈き弓を借りて一引きグイと引いたかと思ふと、弓はボキリと折れてしまひま

した。野に臥す虎も萬人敵も、その力に舌を卷いて驚きました。坊さんは仕方なしに折れた弓を捨てると、右の拇指と人差指とで暫く彈丸を捻つてゐましたが、狙を定めて、

「エイッ。」と放ちました。すると、驚いた事に、ピユツと飛んで行つた彈丸は、ブスツと解の幹を射抜いて後の地面に落ちました。見てゐた者は思はずみ

「あつ。」と感心しましたが、中でも、萬人敵はすっかり感服してしまつて、鄭重に坊さんを自分の家へ案内して來て、

「先生、どうか私をお弟子にして下さい。」と、改めて頼みました。

「よろしい、私の知つてゐるだけの事は教へよう。」そこで、翌る日から稽古に掛る事になりました。殆んど一月程の間に、萬人敵はよくも坊さんの教へてくれる事を覚え込んでしまつたものです。或日の

事、坊さんは、

「もう私には教へる事が無い。そこで「おさらば」



ぢや。が、こゝに虹と云ふ名の名劍がある。これを君に上げる。この劍は、百歩離れてゐて、向うにゐ

る人の首を落す事が出來ると云ふ名劍だ。が、斷つておく、無闇に振り廻すと災が振り掛つて來るぞ。」かう云つて、一尺程の劍をくれて、坊さんはどこへか立ち去つてしまひました。

ところで、例の野に臥す虎ですが、この事があつて後間もなく、用があつて四國へ渡りましたが、そこで山賊のために殺されたと云ふ事が、萬人敵の處へ知れて來ました。そこで調べて見ると、その山賊の頭と云ふのは、熊や狼をボカリ張り殺す程の力があつて、その上大勢の手下を従へて四國中を荒し廻つてゐる惡者だと云ふ事が分りました。

「よし、そんな惡い奴なら、親友の敵討に打ち殺してやらう。さうすれば、四國中の人の助けにもなる。」と、萬人敵は考へました。

で、早速一人で四國へ渡つて、山賊の棲家を探し求めた末、とう／＼見附け出して、隙を狙つて火を附けました。すると、見る見るうちに燃え上つたの

で、大勢の山賊共は驚いて、手桶で水を掛けるやら、荷物を擔ぎ出すやら、大騒を始めました。

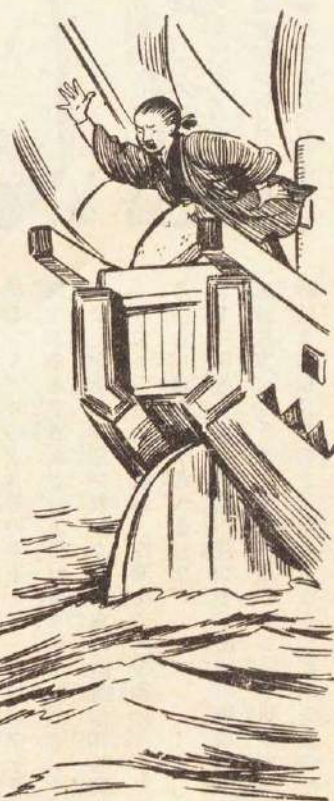
「馬鹿々々、傘なんか一本持ち出してなんになるんだ。それよりも奥の實物の這入った箱でも擔ぎ出せ。」

「おい、そんな小ッぼけな箱を、十人も掛つて持ち出してどうするんだ。」

混雑の中で、一人の大きな男が煙の中に突つ立つたまゝ、かう云つて大勢を指圖してゐました。

「ハ、ハ、こいつが頭だな。よし、どうするか見てゐろ。」と、萬人敵は、例の名劔を取り出すと、遠くから、

「エイッ。」と投げ附けました。すると、見事に劔が飛んで行つて、頭の首はコロリと前に落ちました。



それを持つて、急いで九州へ歸つて來た萬人敵は、野に臥す虎のお墓に供へて、怨みを霽してやりました。

二

さあ、この事が評判になつて、萬人敵の名は前より一層有名になりました。

その頃、九州の人達は、紅毛人と貿易をしてゐたの

で、大金持の商人が随分ゐました。かう云ふ商人にとつて一番恐ろしいのは、海の真中へ追つ掛けて來て大事の品物を奪ひ去る海賊でした。或商人などは、餘り度々積荷を取られるので困つてしまつて、とうとう萬人敵のところへ

「先生、どうか私の船に乗つてゐて、海賊を追ッ拂つて下さい。」と頼みに來ました。

「よろしい。海賊退治も面白からう。」

で、萬人敵は早速お醫者を止めてしまつて、貿易船に乗り込む事になりました。

すると、初めての航海の時に、すぐに海賊に襲はれました。併し萬人敵は、例の彈丸で、片端から海賊を射殺してしまひました。商人は喜ぶまい事か、萬人敵を神様のやうに敬つて、

「先生さへ附いてゐて下されば、海賊だつて恐くない。」と云つて、それは／＼大事に取り扱ひました。ところが、或時また海賊船が現れて、こつちの船

を追ッ掛けて來た事がありました。それを見た萬人敵は、船頭に、
「帆だ、帆だ。帆をみんな張れ。」と命じました。忽ちのうちに、帆が一杯に張られるとぶくツと風に膨んで船は急



に早く走り出した。見る見るうちに、海賊船は小さく見えな

くなつてしまひました。

すると、ふいに遙か後の方に小舟が一艘現れて、矢のやうに波を縫つて走つて來ました。見ると、その舟には、カラ／＼に瘦せたお爺さんがたつた一人風、長い鬚を靡かせながら船に突ッ立つてゐるだけでした。別に誰も漕いでゐる者もゐないのに、舟は生物のやうにスカツ、スカツ、と波を切つて近づいて來るのでした。萬人敵は

「おのれ」と例の劔を抜いて、「エイッ」とお爺さんを目掛けて投げ附けましたが、當りませんでした。「しまつた。」と思つて、今度は彈弓で射殺してやろうと弓を引く間もなく、お爺さんの舟はスラ／＼と近附いて、舟の上ではお爺さんが枯枝のやうな片手を上げながら

「戻せ。」と呶鳴つたかと思ふと、不思議不思議、萬人敵の乗つてゐる船は、スラ／＼と何里か後へ引き戻されてしまひました。見ると、海賊船が待ちかま



へてゐて、船を近附けて來たかと思ふと、船と船とを縛り合せてしまつて、バラ／＼とこちらの船へ亂れ入るが早い、手向ふ者は斬り付し斬り付し、大事の品物をみんな持ち去つてしまひました。

萬人敵は、彈弓に丸を番へて射て防いでゐましたが、例の小舟に乗つたお爺さんが、

「おい、その男は斬り付さずに、生捕りにしてわしの前へ連れて來い。」と、命じたかと思ふと、海賊共が大勢で打つて掛つて、忽ち萬人敵を縛、上げてしまひました。やがて、品物と云ふ品物を残らず取つてしまふとお爺さんが

「引き上げろ。」と號令を發したのを合圖に、海賊船はドン／＼漕ぎ出しました。

間もなく、或島へ着きました。すると、何百人と云ふ鎧武者が迎へに出來て、みんな平伏してゐる中を、お爺さんばかりは悠然と輿に載つて擔がれて行きました。その後から、萬人敵もスゴ／＼從いて

行きました。すると、目の前に、王様の御殿のやうな立派な建物が見えて來ました。お爺さんは輿に乗つたまゝ、すん／＼正面の御門から這入つて行きましたが、お爺さんが這入つてしまふと、御門はガラガラドーンと締つてしまひました。外の者達は、萬人敵を引ッ立て、脇門から中へ這入りました。

やがて、萬人敵は繩を解かれてお爺さんの前へ引き出されましたが、そこは五十疊もあらうと云ふ大廣間で、お爺さんは、正面の金の飾りのある椅子にまるで王様のやうに腰を卸してゐました。

「お前の名は何と云のか。」とお爺さんが尋ねました。「親の附けてくれた名前なんか忘れてしまつた。私一人で一人に敵すと云ふので、世間では萬人敵と云つてゐる。」と、彼は弱味を見せまいとしてわざと威張つて答へました。すると、

「ハハハ。でも、わしには負けたではないか。――それはさうと、わしに投げ附けた劔はあれはどこで

手に入れたか。」

「私のお師匠さんから戴いた。」

「よし。さがれ。」かう云はれて、萬人敵は或一間へ下らされました。間もなく、お爺さんは、不機嫌な顔をして、

「一番力士を呼べ。」と嘯鳴りました。すると、早速家來が、

「一番力士、御前へ。」と高らかに呼び立てる聲につれて、目のギョロツとした見るから強さうな男が十人ズラツと這入つて來ました。それを、お爺さんは恐い目付をして一人一人順々に睨みつけて行きました。たが、

「よし、さがれ——二番力士を呼べ。」

「はッ。」また前のやうにして、二番力士が十人、矢張これも強さうな者ばかり這入つて來ました。お爺さんは、これをも順々に睨め附けて行きましたが、

「三番力士を呼べ。」と、急ぎ立てました。

萬人敵の姿を一旦見た三番力士の坊さんは、眞蒼になつて顔へ上つてしまひました。

「お許し下さい。私が悪うございました。」と云ひながら、床の上に平伏して許しを乞ひました。

「ならん。あの時お前はわしの武藝の先生へ、三つの寶物を屈ける大事な役目を持つてゐた。で、途中で若し役人にでも狙はれるとイケないと思つたからこそ、わしの大事なこの寶劍を、守り刀にやつたのだ。それなのに、途中でこんな弟子を拵へ、そればかりかこの寶劍までやつてしまふとは、許し難い奴おや。さあ、みんなでこの男を斬つてしまへ。」

「大王、全く私が悪うございました。もう決して致しませんからどうぞお許し下さい。」

「ならんわ。」坊さんが何と泣いて詫びても許されませんでした。それを見兼ねた一番力士、二番力士、三番力士がみんな揃つて、

「どうぞ命ばかりはお助け下さい。」と願ひました。

三番力士も、數は矢張十人でした。お爺さんは、また恐い目付をして順々に顔を睨み附けて行きました。たが、五番目の男まで行くと、

「うん、この男だ。」と頷きました。見ると、それは萬人敵に彈弓を教へてくれた上に、例の寶劍をくれた坊さんでした。お爺さんは目を傾らして、

「この男を斬り捨てろ。」と命じました。坊さんは慌

て、

「大王、私には殺される覚えはございません。何か

お間違ではございませんか。」

「黙れ。この劍に覚えがあらう。」かう云ひながら、

お爺さんは、萬人敵の投げた劍を見せました。

「あ、その劍は、この前御命令で九州へ參りました時、誤つて海を落しましたので……」

「ハハハ、嘘を吐け。お前から貰つたと云ふ男がこゝへ來てゐるわ。——おい、あの捕虜を引き摺つて來い。」

「さうか。そんなにみんなで願ふなら、今度だけは許してやらう。」やつとみんなは生き返つたやうな思ひをしました。

「大王、ついでにあの捕虜の命も許してやつては戴けませんでせうか。」力士の中から、情深い男がかう云つて萬人敵の命乞ひをしてくれた者がありました。すると、お爺さんは、

「うん、あれは蟲ケラも同然な者だ。殺すにも當るまい。あの坊主の部下にでも入れて置け。」

そこで、萬人敵も許される事になりました。それにしても、今更自分が一人で萬人に敵するなどと威張り返つてゐたのが羞しくなりました。それ程この海賊大王の部下の者はみんな強いのです。

みんなは萬人敵を親切にしてくれました。中でも例の坊さんは暇さへあれば、いろ／＼の武藝を教へてくれたので、今では萬人敵の腕前は力士と呼ばれる程になりました。併し二年もこゝにゐるうちに、

萬人敵は故郷へ歸りたい心で一杯になりました。で、その事を大王に願ひましたが、

「お前を歸せば、この島の事を政府へ訴へるに違ひない。」と云てどうしても許してくれませんでした。

そのうちに、大王の奥さんが重い病氣に罹りました。併し島の事ですから、醫者なんて云ふ者はあません。大王を始めみんなが心配してゐるのを見て、

萬人敵は、
「私は九州では醫者をしてゐました。私が直して上げませう。」

診察をして薬を二三度飲ますと、いゝ鹽梅に、ケロケロと直つてしまひました。大王は喜んで

「ぢやあお禮に九州へ歸して上げよう。」

間もなく、大勢に送られて、無事に九州へ歸る事が出来ました。併しその後は懲りて、決して武藝なんか身に入れずに、一生懸命にお醫者として働いたので、お醫者としても名高い人になりました。

すると、或秋の事、例の坊さんが、右の手一本になつてフラリと尋ねて來ました。驚いて、
「どうしたのです。」と聞くと、

「大王が、政府の船とも知らないで海賊を働いたのだから、忽ちあべこべに攻め立てられて、あの島も滅茶滅茶にせられてしまつた。大王も部下もみんな斬り殺されてしまつたが、私は泳げるので、やつとこゝまで逃げて來たんだよ。でも、片手を斬られてしまつたよ。」

「併しあんなに強い仙人のやうな大王なら、官軍位追ッ拂へさうなもんぢやありませんか。」

「そこが不思議さ。いくら強くつたつて、賊は黙だけれど、官軍は雷だからね、ガラ／＼ビシャンと落ちて來られては叶はないよ。」

「成程ね。」

萬人敵は、一生この坊さんを大事に自分の家へ匿まつてやりました。(をばり)

長篇(前)號(の)梗概

小鳥は空に

義雄の父親はつと以前に亡くなつて、今ではお母さんと女中のお美津との三人きりで、京都に住んで居りました。父親と云ふのは畫家で、有名な岩村伯爵の三男で、義雄のお母さんの信子と結婚する時、信子が卑しい植木屋の娘だと云ふので、頑固な伯爵の怒りに觸れて遂に東京に居られなくなり、京都へ來て住む事になりました。所が伯爵家は、後嗣になる者が無いので、今度改めて義雄少年を世嗣として迎へる事にしました。併し頑固な伯爵は、母親の信子だけは身分の卑しい者だから、家に入れる譯には行かない。と云ふのでした。親しい遊び友達の健吉や、大工の庄助と分れて、愈々義雄が東京へ出發する日が參りました。

出目助さん道中記

昔、大津に、出目助と云ふ、大へん馬子唄の上手な、子供の馬方が居りました。或る時、西國大名のお姫様が江戸へお下りの途中、大津の宿で出目助の唄をお聞きになり、大層お氣に入つて、出目助はお姫様のお供をする事になりました。一行が水口の宿屋に泊つた晩の事、出目助はフト、宿屋の前に置いてあるお姫様の駕籠に乗つて見たくなつて、こつそり中へ這入りました。そしてウト／＼と居眠りをして居ると、突然騒しい物音に眼を覺まされた。何者かお姫様を奪はうとして斬り込んで來たのです。出目助は出るに出不れず、マゴ／＼してゐると、其處へお姫様が、高手龍手に縛りしめられて、駕籠の中に押こまれて來ました。出目助は、かうしてゐるとお姫様のお命が危いと思つたので、お姫様の締めを解いて、隙を見て外へ逃げださうと決心しました。

名曲「嘆きの薔薇」

義雄の父市田四郎は十年前に死にましたが世界的なグアイオリンの名手でした。「嘆きの薔薇」は父の作つた名曲です。それを完全に奏する事が出来るのは、九官鳥の珊瑚だけなのです。その珊瑚が何者かの手に奪はれました。下僕の河野や額田探偵と共に色々考へましたが、一向に行方が分りません。と河野は突然逸雄に向つて、逸雄には芳雄といふ兄があり、十年前行方不明になつたと告げました。その芳雄と逸雄とが偶然會ひましたが「珊瑚を盗んだのは僕だ」と云はれると、逸雄は兄弟の情から彼を許して共に暮しました。或る日芳雄から珊瑚の行方を探しに支那人張宋楊の家へ行かうと言はれてそこへ行くと、俄かに逸雄は囚はれられ、壁の間からは河野の顔が笑つてゐます。それ許しか珊瑚の鳴聲さへ聞えて來ます。逸雄がアツと呼んで壁の方に近づいた時、びしと閉つてしまひました。



綴方

齋藤佐次郎選

うれしかった日(賞)

長野縣北佐久郡小諸小學校第六

小口壽満子

五十錢銀貨を右手にしつかりとにぎりながら、金の星を買はうと思つて家を出た。寒い／＼淺間おろしの風がひんやりとは／＼をなでて吹き過ぎる。手に持つてゐる銀貨が汗ばんでくる。『當選するといひのに』そんな事を思つてゐる内に本屋の前に來た。ガラス戸越に雑誌臺上を見ると、真中に明るい電氣の光に金の星の表紙が美しく

光つてゐた。戸をあけて中に入り、急いでかさなり合つてゐる本の間から取り出して、終の方からさら／＼と頁をくりはじめた。胸がどき／＼なり出して、足がふるふるふるへる。『綴方』と書いた頁をめくつた時、『あつ』と小さな聲を立てた。自分のが一番先に出てゐる。急にうれしい笑ひがこみ上げてきた。どうしてもがまんが出来なくなつてとう／＼笑つてしまつた。後から／＼笑ひがこみ上げてくる。帳場にゐた本屋のをばさんが驚いた様に私の顔を見た。『此の本を下さい』汗ばんだ手から本屋の錢箱に五十錢銀貨が入れられた。おつりをもらつてとお様に外に出た。足が一人で軽く上つた。菓子屋の前までくると、こらへきれなくなつて、『アハ、』と

笑つてしまつた。お家の門口まで來てもう一度本屋の方を振り返つて見た。警察署の赤い電燈が、ぼんやりとけむつた様に地上を照してゐる。

穴を掘つてゐた時(賞)

東京府下目黒九六四

門田洋一

此の間だつた。僕と功さんが一生懸命になつて穴をはつてゐた時、隣の家の子供が四つ目垣根から僕等がほるのを見てゐた。僕が『もう功さんの胸位まで掘つたね』と云つたら、功さんがその穴の中に飛び込んで胸の處に手をやつて計つた。僕等はたは／＼掘り出した。さつきから見てゐた子供のおばあさんがのつこりやつて來た。するとその子供は『おばあち

やんどうしてこんなにはると水が出るの』と聞いた。するとおばあさんが『それは水がたまつてゐるからよ』とその子供に云つてきか



「四條の村落」(賞)

香川郡水上校 熊野 義雄

せた。その子供はまだよくわからならしい。小さな目をくり／＼させながら僕等のほる／＼の先と僕等の顔をはる／＼見てゐた。やがてその子供が『そんならどうして水がたまると』と又聞いた。おばあさんはめんだうになつたのか『あんたなんかにはまだわかりませんよ』と云つて『さあ早く洗濯屋に行つて來ませうよ』と云つて無理にあつちにつれて行つてしまつた。

冬の夜(賞)

若狭高濱校第六

寺西フミ

キャン／＼と犬の聲。風はビュウ／＼と鳴つてゐる。犬の鳴聲はだん／＼と遠ざかつて行く。なせ犬が鳴くのであらう。けんくわで

もしたのであらうか。又犬ころしでも來たのであらうか。風はますます鳴つて來る。今にも雪が降りさうだ。もう犬の聲は聞えない。町には人通りが少しもない。たゞ小さい火をともした自転車に風が吹かれながら走つて行くだけである。だん／＼風は、はげしくなつて來る。隣の家からカー／＼といふ時計の音がさびしく聞えて來る。其の時ビュ／＼と聲をふるはして汽車のふえが聞えてきた。七時半の汽車が行くのであらう。だん／＼と風ははげしくなつて、とう／＼アラレが降つて來た。

牛の逃げた晩

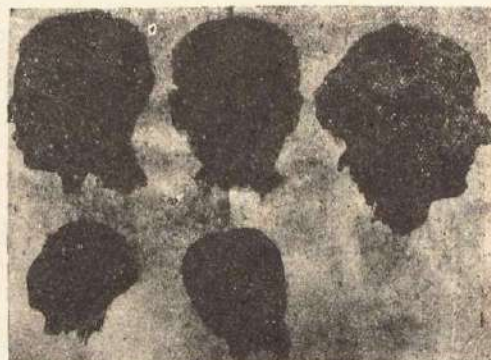
千葉縣生長郡東郷校高二

鈴木ます

丁度戸をしめてゐる時であつ

「顔」(賞)

千葉縣佐原校 宮内 忠胤



た。裏の方で姉さんと母が何かいつてゐた。よく聞いてゐると、牛が逃げた、牛が逃げた。といつてゐました。大急ぎで下へおりる

と、兄さんは牛をつかまへようと裏の方へ行きました。すると牛は表の方へ逃げて来た。兄さんが、じようばの方を出られないやうにはしごをやつてくれといつた。それは、いつか親類の家の馬が逃げた時、じようばから逃げた事があるから、先づじようばを先に、にげられない様にした。そしてそこに母がついてゐた。又、兄さんが私の事を提灯をつけてくれといつたから、大急で提灯に火をつけ様としたが、かんじんなマツチが見えない。それは、あわてゐるからでした。よく探すと、マツチはじきそばに、ありました。表の方では兄さんが、早くしろ、早くしろといつてゐる。やつとの事で火をつけて庭の方へもつていつた。牛はせいをきつて、庭の方から、

牛小屋の後を通つて、みかんの木の下をなんどもくかけまはつてゐた。弟はいくらあふないからといつても、心配になると見えて、あふないといつた時は、うちの中に入つて居て、また少し立つと外に出てゐました。其のうちに提灯の火が消えました。すると牛が牛小屋の中に入つた。その時、ほつとした。家の中に入つて兄さんにわけを聞くと、兄さんがせいまいじようから歸つてきて、いつもなら牛を牛小屋の中に入れるのだが、牛小屋の前まで来て牛をはなすと、牛はすーつと裏の方へ逃げて行つてしまつたといつた。

けんくわ

横須賀市深田三一

岡本又一郎

『うるさいつたら』と僕はまたどなりました。大きい聲でどなればどなるほど、姉さんは大きい聲で歌を歌ひます。僕はとう／＼かん



「歳日の里」

大木 安雄

にんぶくろの緒を切つて、姉さんをふとんの上からたぐさんぶつてやつた。すると姉さんは死んだまねをして、ちつとも聲もださなければうごきもしない。それでもやつぱり生きてゐるのだから、ふとんはすゝすと上にもち上る。僕は自分には死んでゐるまねをしてゐるといふことはわかつてゐるけれども、やつぱり心配でならないから、くるつとふとんをまくつてやつた。さうしたら『心』してらア』と笑ひながら姉さんが云つたので、きまりがわるいから、僕はいきなり自分のふとんのなかに、もぐりこんでしまつた。

元日の朝

山梨縣大月廣里東校尋四

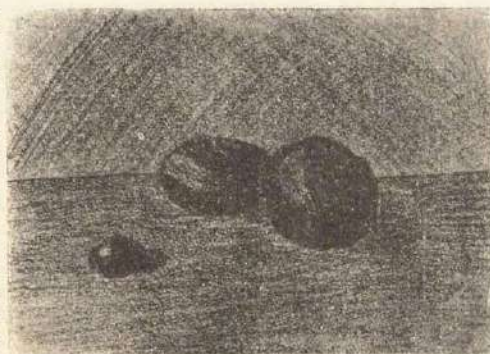
北條 忍み子

時計の音で目がさめました。うれしくて床をはね起きました。禮子は『おねえさん、禮子は七つになつたよ。』といひながら起きました。私は『禮子は七つになつた、だからおとなしくするだよ。』といひました。そのうちにお母さんも起きました。私の起きた時は五時でした。朝はんの時、おせんへすわつた人の顔は皆にこ／＼して居りました。おとそをのむ時、私は一ぱいでもしまひにしたのに禮子はさかづきへ五はいのみました。私たちがわらつたりして、をしまひに私か『禮子もつとのんでをどりをどつてごらん。』といひましたらお父さんやお母さんたちが大わらひしました。禮子はまちめくさつて、ふんともいひません。ごはんの時色々のおかづが出まし

「みかん」

福井縣高濱校

松尾金四郎



た。禮子はたべたいさうで、むづむづしてゐました。やがてごはんになつてお母さんが「みなさんごはんやおかぞをたべなさい。」とお

つしやいました。いふと一しよに禮子のはしに手をつけました。ごはんをたべる前私たちがお父さんやお母さんにおめでたうをする時禮子がふだけました。禮子はつかりふだけたのでみんながばかにしました。

よもぎつみ

京都府加佐郡中筋校尋六

村尾 ヨシエ

大きな籠を背負ひ、友達と先になり、後になりして、よもぎをつみながら、あせ道づたひに土堤へ向つた。土堤には青々とした大きなよもぎが、むしろをしきつめたやうにかたまつてあつた。私は友達よりも早くそれを見つけてかけよつた。一つか二つかつまない間に、友達に「そつちにたくさんあ

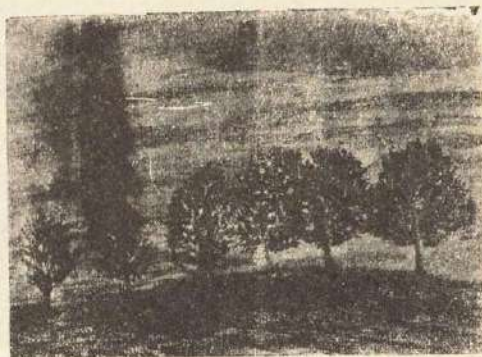
るかゝい」といふなり、私のそばへかけよつてつみはじめた。

私は「自分が見つけた所をつまれてたまるものか」と友達の方へきゆう／＼によつて、ひじでつきながら手を動した。あまり急いでつまうとするので、切物がすべつたり、よもぎのしんから切つてしまつたりして、かへつて友達よりもおくれる。どちらも口をきかずにつんでゐると、ヌラツと手につかへたものがあつた。何かと思つて見ると、それははたるのつばであつた。土堤の道は誰も通らない。私等は一心になつてつんでゐる。私は友達の前へ／＼と行つてつんだ。真横の川の水は、ザアザアと音を立て、私に加勢してくれるやうに思へた。

算用する人

香川県木田郡水上校尋六

谷本 富士一



「ミカンの木」

青森縣七戸校 盛田 武二(八才)

僕は東の正義さん所の風呂に這入つて、我が家のかどまで くと、家で兄と誰れかが話してゐる。「お母さん家へ誰れかが来てゐるせ」と云ふと母は「フン」と云つた。後には黙つてゐる。僕は急いで家へ歸ると、知らぬ人が三人来て二人は炬燵にあたつてゐる。一人は庭で板をいぢり廻し「これ何すあるんや、何ほいや」と云ひながらさしがねをあてたりしてゐる。内の兄さんは墨をすつてゐる。兄「おいまあ上つてあたれ」と云つた。四人は一緒にたつて算用してゐる。母が戸を「ガラツ」と明けると「これお祖母さん何にも焚かいでもよいで」「母」へえもう何んちや焚きまへんよ」と言て、「政一寸來い」と兄を外へ呼び出して何か話をしてから、又兄は炬燵へ這入つて算

用のやりさしをしてゐた。仕事も終つたのか四人はさあ歸らうと言つた。兄はまあ待てと言つて、ご飯の拵へをした。兄添へて四人はあんだら話をしながら食べ終つた。三人はもう歸らうと言て庭へ降りた。母提灯でもあげやうか」と言つて出したが、それを取らずに御馳走でござんしたと言つて家を出かけた。僕の家の人も少しの間して床に就いた。

冬の朝

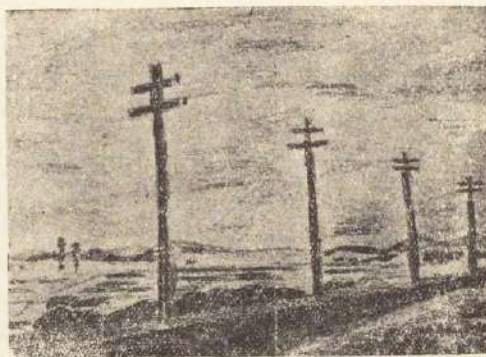
京都市御徳校尋四

吉田 和子

いよ／＼冬になつた。冬はほんとうに寒い。とりわけ此の頃はきつう寒い。今朝も足先がこほるやうに冷たい。學校へ行く仕度をして外へ出た。「マア」と私は頓狂に

「秋」

京都市烏丸通 川崎 良二



答へました。

あまり大きな聲を出したので向ふへ行く人が、私たちをながめたので、あわてて辻をまがった。寒い北風がどつとふいて、私たちのをはをかすめた。

電 氣

朝鮮京城日出校第五

河野 正三郎

夕飯がすんでから、お母さんが、『正ちゃん、下へ行つてりんごを取つておいで』といったので、かごをもつて物置へ行つて、箱の中からやつと一つ出してかごに入れました。

すると急に電氣がきえました。僕はこぼくなつたので『おーい、電氣がきえたぞー』といひながら、手さぐりで物置を出て戸をしめま

した。

じつとしてみると、だん／＼くらくなくなつて来るやうです。入口の方へ來たら、臺所があかるいので上つていきました。

その時はちつともりんごはほしいと思ひませんでした。弟達とさわいでゐたら、お父さんが電話をかけました。お母さんはまだこはをたべてゐます。りんごをたべてゐますと、バツが電氣がついて、又消えました。『はあ、なほしに來たな』とお父さんがおつしやいました。少したつてから電氣がつかまりましたので、らふそくはけしました。

あとでお父さんが『この近所は皆電話がないから、電氣がついたのは、うちのおかげだ』といつてをられました。

講演だより

盛岡より

沖野 岩三郎

一月十三日朝、私は盛岡驛のプラットホームで、盛岡幼稚園の先生達や、同幼稚園出身の菊池二郎さん始め四五の方々、それから盛岡師範の先生で、東北地方で童話の權威と言はれてゐる佐藤瑞彦さん達に出席へられました。

集會は十四日ですが、雪の爲めに列事が後れてはいけないと思つて、故ら一日早く出かけたのです。

集會は岩手日報社の後援で、會員諸君は氣の毒な程必死になつてゐました。

十四日の朝、野口先生が來られました。そして十二時から盛岡劇場へ行つてみようと、一時からの開會に、もう満場立餘の餘地なき有様でした。

やがて時が満ちて、會は開かれました。岩手

日報社の禿^ぐ氏^し岳^{がく}山^{さん}氏が開會の辭を陳べられ盛岡幼稚園の幼年會員の、歌、踊、などがありました。みんな涙ぐましい程よく出来ました。殊に園児諸君總出のトイ、シンフォニーは大喝采でした。みんな玩具の樂器で、奏樂するのです。可愛いコンダクターの指揮棒につれて、吹く、たたく、弾く、鳴らす。實に愉快でした。

夫れから野口先生のお話、自由獨唱があつて、最後に私も一時間話しました。四時間の會合が、欠伸一つ招かなかつたのは、會員諸君の努力の功でした。

夜は六時から開會しました。やつぱり劇場は一杯でした。野口さんのお話と、幼年會員の歌、踊などがあつて、私は最後を引受けて二時間話しました。何だか私の心が、焦々し

てゐましたので、思ふ事を半分に言へませんでした。

私は其時、二年間金の星で翻譯の筆を執つてゐられて、一月二日に亡くなられた山野虎市さんの事を想ひ出しました。

私はこの親しかつた友達の亡くなられた事が、私をどんなに咀喪せしめてゐるか、焦々させてゐるかと思ひました。

十五日の朝は、盛岡幼稚園で野口先生と、私と二人で話しました。そして一時から歡迎會に行つて、三時十分の汽車で、私は青森縣の方へ旅立ちました。野口先生は水戸を経て東京へ歸られました。

盛岡の二日間の會は、大成功と云つてよいでせう。

次號豫告

世界童謡號

次號はいよくお待ち兼ねの『世界童謡號』です。執筆
者、作曲家、執筆畫家等は特に特色ある作家を選びました。
決定してをる分は凡そ左の通りです。

作 謠 者

島崎 藤村、竹久 夢二、濱田 廣介、白鳥 省吾、
野口 雨情、若山 牧水、露谷 虹兒、外國名童謡作家。

作 曲 家

本居 長世、中山 晋平、山田 耕作、弘田龍太郎、
小松 耕輔。其他。

挿 畫 家 岡本 歸一、寺内萬治郎、竹久 夢二、其他。
振 付 林 きむ子。

尙、次號には『金の星』獨特の童話名作を澤山に掲げま
す。執筆の諸先生は、特に此の號のために非常な苦心をさ
れました。

愛讀者の皆さんから募集した童謡は、大人篇小供篇とも
未曾有の數に達しました。目下、選者の手許にあつて、嚴
選されつゝあります。



通信

自由畫選評

山本 鼎

△熊野義雄君の「四條の村落」一見の印象がいふ、物もはつきり描いてあり、筆致も悪くない、雪などなかくうまく描けて居る。もつと進歩するためには、それらの物の色合の相違や、いろ／＼な面から濃淡がつくれ、その奥深い面白さや、それ／＼の物體の姿勢や、線や、丸味までの美しさをつく／＼と眺めるやうにならなければ駄目だ。下塗のやうに用いた黄色は甚だ感じが悪い。
△宮内忠胤君の顔のスケッチよく描けて居る、鉛筆の線が堅すぎる。
△大木安雄君の「歳日の里」筆にも色にも味えがあつていふが、少しうさぎ繪になつて居る、もつとトオンに注意を拂ひながら描くといふ。

綴方の選後に

齋藤佐次郎

△今月は先づ普通の出来ばえでした。作は澤山にありましたが、いふ／＼アと思つたのは、ホシの一つでした。賞の第一席に入選してゐる小口壽海子さんの「うれしかった日」がそれです。この人は二月號にも入選してゐますが、全く優れた感情と観察を持つてゐます。店頭で雑誌をとり上げた時の微かな心持ちを、よく上手に書いたのです。たゞかういふ上手な人に、私の老妻心から御注意したいのは、上手なのにまかせて書過ぎて、愚達者にならない事です。前にも御注意したかと思ひますが、いつまで／＼今のやうに生き／＼としたころを失はないうやうにして下さい。
△門田洋一さんの「穴を掘つてゐた時」は上手な作といふ事は出来ないうでせうが、中學の

一年生であるだけに觀察に深いところがあります。老人と子供とを對照して、子供が自分の周囲に起る出来事に就て「や妙な心」を起してゐるのに、老人はそれに一向無頓着で教へようとしないう、といふ一つの觀察をねらつたものとして面白く作です。
△寺西フミさんの「冬の夜」は冬の夜の情緒を十分にあらへてゐます。多少型にはまつてゐるといふ缺點はありますが。
△鈴木ますさんの「牛の逃げた晩」田園気分がよく現れてゐます。書き方も、作らずさざらずなほなほ筆です。
△阿本又一郎さんの「けんくわ」も輕妙で一層面白く讀ませられます。殊におしほの方で、姉／＼が「心配してらア」と床の中から飛出してゐる處が面白く讀ませます。
△北條ふみ子さんの「元日の朝」はまじめな處をとります。もう一層樂に書けると伺ひいと思ひます。村尾ヨシエさんの「よもぎつみ」も同じやうな感想を受けました。
△此の外の作に就ても一々感想を書きたいのですが、さうは書き切れませんから、此の位で略します。

幼年詩選評

若山 牧水

同じことがあつても、歌ふ人の

童話の選後に

齋藤佐次郎

こゝろもちや態度で、その出来榮はずつと違つて来る。今度一等にとつたチヤボの卵の歌でもこれと同じことを歌つたものには他に幾つか見たが、今度の様に、しんから底からそのチヤボの卵に對して可愛い／＼といふ氣持を持つた歌は今までになかつた。同じことを歌つて何處かその感情が疎離であつたり、わざとらしくあつたり、または人眞似であつたりしては、この歌の様に上品に、そしていかにもしみ／＼としたものは出来ません。

『金の星』誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろいろの特典と便宜とがありますから、御希望の方は本社宛に規則書をお申込み下さい。今度より三ヶ月分以上の直接購讀者に對しても、誌友のお取扱ひをする事となりました。

歌つてある事から（材料または題目などいふか）の如何より、先づ大切なのはこの「歌はうとするこゝろもち、態度」のよしにあるのです。わざとらしくあつたり、小ましくくれてゐたりするのなど（さういふのがいつも甚だ多いが）みなさうした態度から出て来るのです。なほそれは、さういふ風に作らせてやうとする人たちの責任にも及んでゆくのです。

思ひました。
△今月は非常に良成績です。いふ／＼作が多いのです。投稿家が皆な上手で、童話作家として原稿生活をしてゐる人達の作と比べて、劣らないと思はれる作が仲々多いのです。
△若い、元氣なかういふ新進作家の爲めに「金の星」は大に門戸を開きたいと思ひます。この間も、或る投稿家がさういふ御注意がありました。今後はいかゞ無名な、しか

編輯室より

△漸くボカ／＼して來ました。春が近きまじやう。行きつまつた童話雑誌界に「金の星」は率々の夢を破るものと見て、今後目ざし活動する決心です。御役をねがひます。
△次號の「世界童話」のために今や編輯部一圓大活躍なしてゐます（一記者）

自由畫掲載外佳作

白澤 一郎(愛知) 野島フサエ(香川)
石井 弘(香川) 多田 正雄(香川)
佐々木健一(香川) 森川 茂(香川)
岩谷ミヨノ(香川) 高木 ヒデ(香川)
藤田 榮三(香川) 木村 ノブ(香川)
海老原三三(香川) 海田 時義(香川)
多田 正雄(香川) 波多江正男(香川)
岩谷 貞三(香川) 谷本 直正(香川)
兒島 豊子(香川) 今井 明保(香川)
井手本秀士(香川) 富田 正夫(香川)
出陣キエ(香川) 野島フサエ(香川)
進藤利一郎(香川) 花澤 譲治(香川)
宇井 義明(香川) 佐藤 恭一(香川)
高木 義明(香川) 田邊 剛二(香川)
鈴木 政雄(香川) 長谷川 眞澄(香川)
王利 徳夫(香川) 長谷川 眞澄(香川)

幼年詩掲載外佳作

成富 公孫(東京) 清水 信夫(千葉)
佐久間信一(千葉) 小林 富貴子(香川)
白井ユミ(香川) 大和 茂喜(香川)
持井 幸作(香川) 高橋 徳義(香川)
山川 啓四郎(香川) 吉田 功也(香川)
横澤 共八(香川) 御田 英二(香川)
鈴木 信夫(香川) 信夫 茂(香川)
藤江 一郎(香川) 宗三(香川)

綴方掲載外佳作

宮崎かほる(山梨) 齊藤 きよ子(山梨)
金子 賢吉(山梨) 田中 勇大(山梨)
山川 平一(山梨) 吉田 實山(山梨)
興水 鶴山(山梨) 高橋 てる(山梨)
村井シエ(香川) 千代田愛三(東京)
山岸 猛(朝鮮) 河野正三郎(朝鮮)
古賀 文子(朝鮮) 小淵 政彦(大坂)
林 善四郎(山梨) 石澤ワメ(山梨)
川西 孝(香川) 千代田愛三(東京)
深井 正三(香川) 牧野 松子(山梨)
田中 文八(香川) 三浦 繁雄(香川)
遠藤 武雄(香川) 平井 義明(香川)
森川 弘香(香川) 石井 弘香(香川)
井手本秀士(香川) 海通 光俊(香川)
小出 光俊(香川) 光野 イト(香川)
上高 光子(香川) 廣瀬 三郎(香川)
中村 佐(香川) 河野 洗(香川)
堀口 キヲ(香川)

童話掲載外佳作

中川清三郎(京都) 栗原 くに子(千葉)
海老名花子(京都) 田邊 剛二(香川)
設楽 ハル(山梨) 川崎 良二(京都)
宮内 忠胤(千葉) 長島 實(千葉)

童謡掲載外佳作

奥田 準一(福岡) 宮本 演彦(神奈川)
新井 青一(東京) 門田 幸子(香川)
小山 武雄(神奈川) 正木 秋三(香川)
植田 正一(奈良) 山内 敬和(香川)
田邊 剛二(香川) 岩谷 貞三(香川)
好本 綱子(東京) 早田 清次(香川)
黒田三千雄(大阪) 山本 一美(香川)
牧野眞砂子(香川) 眞田 幸尚(香川)
渡邊 光三(香川) 早田 稔夫(香川)
川井田十路(香川) 渡邊 純(香川)
河井正三郎(香川) 中川富之助(神奈川)

新誌友名簿

平野 直三(香川) 鈴木 富雄(香川)
阿部 武雄(北海道) 倉永 孝(香川)
浅原 泰二(香川) 柴田 要七(香川)
出口 松助(香川) 平岡 高次郎(香川)
新井 直三(香川) 鈴木 富雄(香川)
阿部 武雄(北海道) 倉永 孝(香川)
浅原 泰二(香川) 柴田 要七(香川)
出口 松助(香川) 平岡 高次郎(香川)

新らしく出た本

◇家庭用 児童劇 (伊達謙氏著)
児童劇に關する著書の確たる事は全く驚く程である。又それだけに、中には不純なもの、健全な物が少なくなっている。本書は、坪内逍遙氏と、その児童劇に對する立場を同じくする伊達謙氏の著されたもので、児童劇に最も必要とする三要素、簡單、純粋、無邪氣と云ふ事に、充分の注意が拂はれてゐる。狐ときりぎりす以下十八篇、すべて、純眞なる子供の爲の児童劇として申分の無いもので、父兄達はこの本ならば安心して子供達に與へる事が出来る。装幀と口繪は矢野左行氏の筆に成り、他に平澤文吉氏の豊富なる挿繪が添入つてゐる。(四六判箱入、二七〇頁、定價貳圓二拾錢、東京早稲田大學出版部發行)
◇ラング童話集 (飯田敏雄氏譯)
アンドロイド、ラングの代表的傑作三篇を集めた、面白い物語である。讀者は一番始めの「プリオ王子」一篇を讀んだだけで、すっかりラングが好きになつてしまふに違ひない。プリオ王子と云ふのは、例の過きる王子で、お乳を飲む赤ん坊の頃から、もうお父さんと口喧嘩をして、お父さんを云ひ負かした云々。プリオは大きくなつてから、その有り餘る智慧を働かして、恐ろしい火輪を退治したり、一度死んだ人間を生き返へさせた

十五少年漂流物語

少年少女にとつて、このやうに面白い物語は先づ無いと云つて、二十五年の間の苦心慘情と、洞穴に住み、或時は敵と戦ひ、或時は悪者と戦つて、終に懐かしい本國へ歸る事が出来る云ふ筋。その間に、プリアンに面づくると云ふ二少年の性格の對照が、實に面白く現はれてゐる。この物語は前に二三譯述が出てゐるが、皆文の晦澁な點に於て、少年少女に適さない。本書は、金の星でおなじみの、霜田史光氏の著ばれたもので、譯文の流麗な事は云ふ迄もない。装幀挿繪は寺内英治郎畫伯の手に成つたもので、一度本書を手にした者は、その華麗極まる装幀に一驚せざるを得ない。(四六判箱入、二七〇頁、定價壹圓五拾錢、東京早稲田大學出版部發行)
◇西遊記 (金の星社名著大系十四篇)
お待たせの西遊記が出来ました。この本の面白さは、此處でこれこれ云ふ必要はありません。皆様の御父様にでも聞いて御覧なさい。ワケは、西遊記にあらん面白く話に他には無い。お前が讀む前に、一冊借して呉れ、お前が讀んで、送料十二錢金の星社發行)



讀者だより

▼先生、うれしいうれしい『金の星』三月號を、今日いただきました。有難うございます。東京の方は、梅なぞ咲きました様ですが、もうすっかり春の気分になつて居るでせう。當地の方も、だんだん春めいて來ました。今日も、はかくと日が照つて、かげらふが立ち昇つて、のんびりとした気分です。早く黒い煙の土を見出したものだと思つて居ります。先づお知らせまで……

(秋田市 本下孝) ▼段々と春も間近に迫りました。金の星も發行當時に比して、實に驚く程よくなつてゐるのに、山野先生が突然逝かれた事は本當に悲しい事です。何も山野先生にさし

上げるものがありません。唯兒童の爲めに、又教師として盡された先生の霊前へ、永遠に幸ある祈りを捧げ奉ります。そして先生の霊によつて金の星がより一層大いなる雑誌となる事の出来る様、只管おれがひいたします。(東京 六戸功夫)

▼『金の星』誌友の皆さま！私も今度皆さんの仲間に入りましたからどうぞよろしく。お山も野も皆一日一日と春めいてきます。蝶やとんぼの姿を見るのも程ないことでせう。童謡壇の皆さまの御奮闘を祈ります。(笠原信秀)

▼美しい『金の星』有難う存じました。意り勝たれ私自身の心の弱さをしめしめ思ひました。藤野先生の去つた福井縣の人々お互ひに奮ひませう。福井縣小濱町 法本美夫) ▼先生様私は今度金の星の讀者になつてました。書き方を先生から教へてもらひました。そしてお友だちと三人で投書します。お友達に乙坂喜代さんと太田きく子さんです。之から毎月投書しますから

せんか、紙上に御答へ下さい。こんな童話を出して先生はきつと苦笑せられる事でせう。だが笑はないで下さい。僕に叔父さんに聞かない、一番短いのを、一番下手に書いたのです。今度こそは一番いいのな、一番上手に書きます。沖野先生同様の好なを以つてよろしく御願ひ申します。二月號で面白く御読みの第一片手な失した話、次は出目助さん道中記 日本一の粗忽者でした(和歌山 早田稔夫) ▼振り假名は要りません。(記者) ▼山の頂に出て、遠く照つた湖水を見て私はどんなに淋しかつたでせう。友もなく、唯一人暗い生活のみして居る自分を顧み見た時、どんなに記者様に感謝したでせう。あの美しい純な輝の有る表紙を見て、もうたまらなく嬉しくなりました。あゝ嬉しい。唯待つものは、私の金の星のみ。記者様折角御奮闘と御健康を御祈り申します。(信州 原みのる)

▼自由畫の賞、ロビンフッド物語有難くちやうだいしました。厚く御禮申上げます。(横濱 渡邊敏) ▼今日授業の初めに武藤先生が非

皆様どうぞよろしく。(山形縣 齋藤正雄) ▼ほんとうに春がやつてきました。詩味豊かな春、うんと活躍しようではありませんか。『世界童謡』が待たれます。どんなに立派なものが出るでせう。半年間以上も投書を續けましたが、一つとして掲載されませんでした。選外佳作ばかりで全部で八篇です。けれども益々努力します。記者様、私の『流星』第二號ができ次第寄附します。まだ知らぬ方は入會して下さい。では皆さまようなら。(神奈川県 岡田純義)

▼病氣の爲、暖い沼津へ行つて居りましたが快くなつたので、もと

の古巣へもどりました。私、十五の少年ですが、童謡を大人の部へ投書してもいいでせうか。是非誌上にてお答へ下さいませ。(讀者 諸君 お便りお恵み下さいませ)(東京市 外大井町一四九 山口日出雄) △十五才ば、丁度大人と子供との部へお入り下さい。(記者) ▼二月號の童話、小島先生の『蘆所(一里)』ほんとに吹き出しまし

た。仙波しげるさんの短篇童話としてユーモアのある上手なものでした。三須、仙波、田井、佐藤、小西さん等々々童謡壇の方々の一層お振ひあらんことを。詩生

▼二月號の童話小供編(八二頁)所載の『小鳥』は、他の雑誌に出てゐたもの焼直しでありました。實は、私どものコードモ會の人達のを集めて御送りしたもののうちの私の不注意のいたすところでした。誌上を以て先生を初め皆様にいわびいたします。(岡山縣 内藤)

▼御社の御隆盛を御祝申上げます

『金の星』が號を逐々に従ひ内容外観共に秀れた誌になりました。五月には童謡號をお出しになる由、眠れる童謡界に、どんなに強い清涼劑となることとございませう。私も傑作をお寄せしたいと力んでゐます。又同封の『金の星作品批評』は讀後感と思つた儘書いたものです。編輯上御参考になれば幸甚です。近以内に童話も書いて久し振に齋藤主幹の御高覧に供したいと思つてゐます。それから『金

を走らせて出來た誌、清い同情と泪とにみちた日本の童謡界の人物餘名が加型して下さいました。私の身を氣付けて下さつた、三須英三様、公子様の御父様の海邊貴文様にあつく御禮申上げます。福井縣小濱町絹萬方法本芳泉改め 法本美夫) ▼親愛なる金の星の諸兄姉！御壯健ですか？ 今度文藝誌『夢』を發刊致します。圓かなる夢田、それそのもの如き『夢』に何卒皆様の御力をそゝいで下さいませ。東京市外大久保百人町三〇五山本方夢社 前田晃)

▼みなさま私も此度からお仲間入れなさして頂きます。法本様仙波様中村様などがお振ひです。法本様若芽をお退きになつたんです。あなたのみ作に接し得られぬので淋しくなりません。お手紙を下下さいませ。埼玉縣南埼玉郡宮村中妻 田口まつな) ▼記者先生お達者ですか。私は始めの金の星の愛讀者でございませう。面白味があるやうにこれがひ申します。記者一同様御奮闘を祈ります。(朝鮮 韓學風)

の星』を永く保存する爲に是非、綴込表紙が作つて戴き度いと思ひます。希望者はさぞ澤山あると思ひます。(都外川邊) ▼記者先生私も本誌の愛讀者となりました。よろしく、私もこれから金の星に振ふつもりです。それから文藝誌發行の方は一部お送り下さい。入社致します。(埼玉縣 越ヶ谷町三丁目 中村ひろたか) ▼『白鳥』といふ純な文藝雑誌を發行致しました。創作、詩、童謡、和歌、俳句、短文や童話等を濃集して居ります。皆様のお入會を歓迎致します。郵券で貳拾錢お送り下されば見本一冊差上げます。(東京市外大井町北濱川一四九 山口日出雄)

▼私は親友の又市君と、金の星の愛讀者になりました。今までこんな良本のあるのがわからなかつたのです。どうぞこれからばどしどし投書いたします。今までの罪をかんに入して下さい。(栃木 山本新造)

▼先生、私は『のるま牛と雀』と云ふ童話を投稿致しました。どうぞ、よろしく御願ひ致します。原稿には振假名を付けなければなりま

一四七



金の星社 四月號

出版だより

三井信衛先生譯 「家なき娘」

癒々三月半發行

定價壹圓九拾錢
送料十二錢

譯者序文の一節――

「この物語は佛蘭西の文豪エクトル・マロワ氏の原作で、『まだ見ぬ親』とか『故郷いつ』などと譯されて、日本で廣く讀まれてゐる『家なき子』の姉妹篇です。今の時代に澤山の少年少女文學の作者がありますが、この物語の作者エクトル・マロワ氏は、わ

けても美しい涙に富んだ作家でありまして、その作品は本國佛蘭西はいふまでもなく、世界各國の言葉に譯され、健全な面白い讀物として歡迎されてゐます。

これは原名を『アン・フアミユ』と言つて、巴里の或る新聞紙上に數ヶ月間連載され、少年少女諸君からは云ふまでもなく、父兄の方々からも多大の好評を博しました。ところが『家なき子』の方は日本にも澤山に譯書がありますが、この『家なき娘』の方は未だ一冊も出版されてありません。私はそれを大變残念に思ひまして、不學なも願ひす此處に記述しました次第です。

極簡単に筋だけを書いておきますと、佛蘭西人父とし、印度生れの英國人を母とした、パリンと

いふ美しい混血兒の少女が、哀しくも旅の途中に父母を失ひ、まだ見ぬ祖父へ慕つて佛蘭西の或る町に來ましたが、會へると思つてゐた只一人の親父には會ふことの出来ない事情を知りました。家もない哀れなパリンとは、来る日もない哀れなパリンとは、来る日も

世界少年少女名著
大系(15)

ローマ英雄物語

癒々三月下旬發行

前號に續告しました『ローマ英雄物語』は、目下印刷中でありまして、いよいよ三月の下旬に発売

行になる運びとなりました。長い間愛讀者諸君から非常な期待を以て出版の日を待たれてゐた本です。装幀も挿畫も非常に立派に出來ます。出版界にはめづらしいものだけに、必ず大歡迎を受けるであらう。

近刊

世界少年少女名著
大系(16)

ことわざ舊約聖書物語

この本は、舊約聖書の初めに出て來る五大人物に就いて、子供達に分るやうに、面白く書いたものです。信仰深いアラハム、イサクの嫁えらび、鹽の柱になつたロトの妻、應の肉の好きなイサク、モセの夢判斷、など一度讀みだしたら面白くてやめられませんが、今皆さんが此本を御讀みになつて置くとき他日大人になつて舊約

近刊

金の星童謡曲譜第九輯

あの町この町

中山晋平先生作曲
竹久夢二先生装幀
野口雨情先生作謄

『あの町この町』は中山晋平先生の作曲中最大の傑作であるばかりでなく、又日本童謡作曲中第一、二を爭ふ程の名曲です。この名曲を本社から發行する光榮を得たばかりでなく、尙外に、同先生の作曲中、特に優れたもの七曲を

選出して近日發行になります。装幀は竹久夢二先生が苦心をこらされた木版五度刷の他に見られぬ美しいものです。

本社の『名著大系』が如何に歡迎されつゝあるか

本社の名著大系は昨年二月第一冊目を發行して以來既に十四編まで發行しまして、今や毎月一冊或は二冊づゝ發行してをりますので、近い將來に二十冊三十冊と積つて参ります。

さて、此の『名著大系』が社界からどんなに歡迎を受けてゐるかといふことを考へますと實に發行所である本社も意外な程各方面から賞讃の辭を受けてをります。従つて發行部數も非常に多く毎月版を重ねて行く有様で、社内一同いよいよ勵みまして、今後は一層改良に改良を加へまして、皆さまの御期待にそむかないやう努力いたします。

既に第二十編までの原稿は全部

整理されてをりますから今後は今までよりも、澤山に發行になります。二十編が完全しますと、第二回目の發行に着手いたします。どうぞ今後は一層御力添へ下さいまして、一日も早く此の仕事が完成する事が出來ますやう希望いたしてをります。御一讀の上、御氣附きのことを、御知らせ下さい。

讀後感

「オデッセー物語」を讀みて。

僕は先日、町の本屋へ行つた時、ふとオデッセー物語と云ふ本が目についた。手に取つて見ると、オリッパ色のふるひ附きたい様な美しい表紙で、真中に、一人の人魚が岩に凭れて、ちいッとした沖の方を見つめて居る繪が描いてある。如何にも面白さうなので、九拾錢奮發して買つて來た。炬燵にもぐり込んで讀み始めると、いやその面白さうと云つたら大へんで、僕は今迄何故こんな素的な本に氣が附かなかつたのだらう、と残念で堪らない。まあ聞いて呉れ給へ。

をことわり

『十五少年漂流物語』は本社から出版すべき本が非常に多くて發行の期日が非常に後れるやうな次第となりましたので、都合上本社の姉妹社といふべき神田區小川町二十七金塔社から發行になりました。定價金一圓五十錢送料十五錢本社へお申込み下さればお送り致します。目下大好評です。

懸賞創作募集

自由画……山本鼎先生選
 幼年詩……若山牧水先生選
 綴方……編輯部選

〔注意〕 懸賞は何でもかまいません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君の好きなもの、諸君の好きなやうに書いたり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまいませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおさないやうにして下さい。用紙は自由画はなるべく畫用紙に、幼年詩や綴方はなるべく原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出来た方には「金の星」特製の賞品を差上げます。次號へ切は三月廿八日（その以後は次號へ廻る）發表は五月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地の金の星社。

〔注意〕 童話 童話とは十五行以内、童話二十行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童話には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童話には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の星」賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返ししません。

定價壹冊金四拾錢 送料壹錢
 三ヶ月分三冊（送料共）壹圓二拾錢
 半年分六冊（送料共）貳圓四拾錢
 一年分十二冊（送料共）四圓八十錢
 但し新年號は特別號で五十錢ですが、御注文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

振替口座東京五九五六番
 振替口座東京五九五六番
 電話小石川五三八七番

〔注意〕 御注文は必ず前金で御拂込み下さい。送金は振替が一番便利で御座います。切手代用は（電報切手）一割増しです。何冊何巻第何號よりと書いてください。住所姓名は必ず書き添えてください。

廣告料は御覽會次第お答へ致します

大正十四年三月九日印刷納本（毎月一回）
 大正十四年四月一日發行（一日發行）

編輯兼發行人 齋藤佐次郎
 印刷所 東京市小石川久野町八番地
 印刷所 東京市小石川久野町八番地
 發行所 東京市外田端三百五十一番地

金の星社發行名著

沖野岩三 先生著 森の祈り (長篇物語)	小島政二 先生譯 狼少年 (長篇物語)	野口雨情 先生著 青い眼の人形 (童話集)	三宅房子 先生譯 家なき子 (長篇名作)	武井武雄 先生著 フウ太郎鍛冶屋 (繪入童話集)
本書は紀州の漁村に育つた兄妹の、父が行方不明になつた後、祖父と母と共に世の荒波にまわれつゝ奮闘努力を續けたる、沖野先生の中核作。	印度の自然の中で狼に育てられて成人した少年を主人公にして、熱帯の森林の中で猛獸と共に生活しながら探々の冒險を行きつづける、原作的な傑作。	野口雨情先生の童話の中で最も有名で、先生が網羅した一冊のみの傑作である。現代一流の有名作家の作を、深山に揚げました。	原作は佛國文豪マローの作になり、孤兒の生涯を書いたもので、名家の生れでありながら不思議な運命にもあそばされて、遂に旅役者に賣られ、旅から旅へさすらい歩く哀れな物語です。	武井先生の童話と畫は、實に先生獨特のもので、こんなに面白くない程で、日本にあらずといふべき、鍛冶屋のアウ太郎はじめ、魔ヒツキなどが現れて、それは、面白話を皆さるにします。
四六判箱入美本 本文二四〇頁 定價金壹圓八拾錢 送料金拾貳錢	四六判箱入美本 本文三二〇頁 定價金壹圓九拾錢 送料金拾貳錢	四六判箱入美本 本文二二〇頁 定價金壹圓八拾錢 送料金拾貳錢	四六判箱入美本 本文二七〇頁 定價金壹圓八拾錢 送料金拾貳錢	四六判箱入美本 本文三〇〇頁 定價金壹圓六拾錢 送料金拾貳錢
東京市外田端三百五十一番地 電話小石川五三八七番	東京市外田端三百五十一番地 電話小石川五三八七番	東京市外田端三百五十一番地 電話小石川五三八七番	東京市外田端三百五十一番地 電話小石川五三八七番	東京市外田端三百五十一番地 電話小石川五三八七番

12A 29

完全に消毒された新形式の

ライオン 歯刷牙

四號形 學童用齒刷牙

- ◎ 完全なる藥品熱氣消毒がしてあります。
- ◎ 形も小形にして小児の口にふさはしくしてあります。
- ◎ 毛束の植込み方が齒列に合ふやうにしてありますから、奥齒の奥まで十分に磨けます。
- ◎ 毛の硬さも、學齡頃の子供の齒にちやうど適するやうに程よくしてあります。
- ◎ 「舌」に、有害ですからむざと附けないのであります。

◇ 一本 金 拾 五 錢

◇ 全國の化粧品店藥品店にあります。品切の節は直接本舖へ御注文を乞ふ。

發賣元 **ライオン齒磨本舖**
東京驛前丸ビル一階



『金の星』第七卷第四號 (大正十一年四月十三日) 大正十一年四月九日 定價金四十錢 送料一錢五厘